

研 究 紀 要

第 5 号

2007

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

序

財団法人新潟県埋蔵文化財調査事業団は平成4年に発足し、以来、高速自動車道・国道・北陸新幹線に関連した遺跡の発掘調査を実施しております。

当事業団の任務の一つに、発掘調査等で得られた成果を県民の皆様に還元する普及・啓発活動があります。「発掘調査報告会」・「出土品展」・発掘現場での「現地説明会」の開催、広報紙「埋文にいがた」の発行等がその代表的なものです。

また、平成8年10月には県埋蔵文化財センターが設置され、当事業団が管理運営を委託されました。当事業団はセンター業務として、埋蔵文化財に係る調査・研究、整理・保存、情報収集、専門職員研修、さらに普及活動の一環として出土品の公開や埋蔵文化財講座への協力などを行ってまいりました。

この間、発掘調査は増加の一途をたどり、その成果も高度な内容が求められてきております。このため職員は日々の業務に従事する傍ら、埋蔵文化財に携わる者としての社会的付託を意識し、自ら研鑽を積んでまいりました。その成果の一部を『研究紀要』として発行いたします。今後の調査・研究活動にご活用いただくとともに、皆様のご叱正をいただければ幸いと存じます。

最後に、本書の刊行にあたりご協力いただいた関係各位に感謝申し上げるとともに、今後とも一層のご指導をくださいますようお願い申し上げます。

平成19年2月

財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団

理事長 武 藤 克 己

目 次

新潟県東蒲原郡阿賀町 角神A遺跡におけるナイフ形石器文化加藤 学.....1
縄文時代中期後葉～後期初頭の炉の変遷 －新潟県阿賀町 北野遺跡の炉の検討－高橋 保雄.....21
新潟県におけるタタキ甕・布留式系甕について龍沢 規朗.....41

新潟県東蒲原郡阿賀町 角神A遺跡におけるナイフ形石器文化

加 藤 学

1 はじめに

角神遺跡は、福島県境に近い東蒲原郡阿賀町角神に所在する。1969（昭和44）年に閔 雅之氏が周辺一帯の段丘遺跡の分布調査を実施した際に発見された遺跡で、閔氏・高田俊雄氏によってA地点（角神A遺跡）^{註1)}から採集された石器の中に「旧石器」が存在することが指摘されている〔閔1972〕。さらに『図説・東蒲原郡史 阿賀の里』〔閔・若松ほか1978〕、『新潟県史』〔新潟県1983〕等に取り上げられ注目されてきた。

筆者は、東蒲原郡史編さん事業に携わる中で、高田俊雄氏所蔵の資料を実測図化する機会を得た。郡史はすでに刊行されており、そこで資料について記載した〔加藤2006〕が、ここでは資料群の編年的位置付けについて検討し、いくつかの問題点を整理することとしたい。そして、阿賀野川流域に立地する阿賀町上ノ平遺跡A地点〔沢田1994〕・C地点〔沢田1996〕、阿賀町吉ヶ沢遺跡B地点〔沢田2004〕、阿賀野市円山遺跡〔土橋2003〕との比較を通じて、今日的研究を踏まえた資料の位置付けを行うこととしたい。

2 角神A遺跡の立地

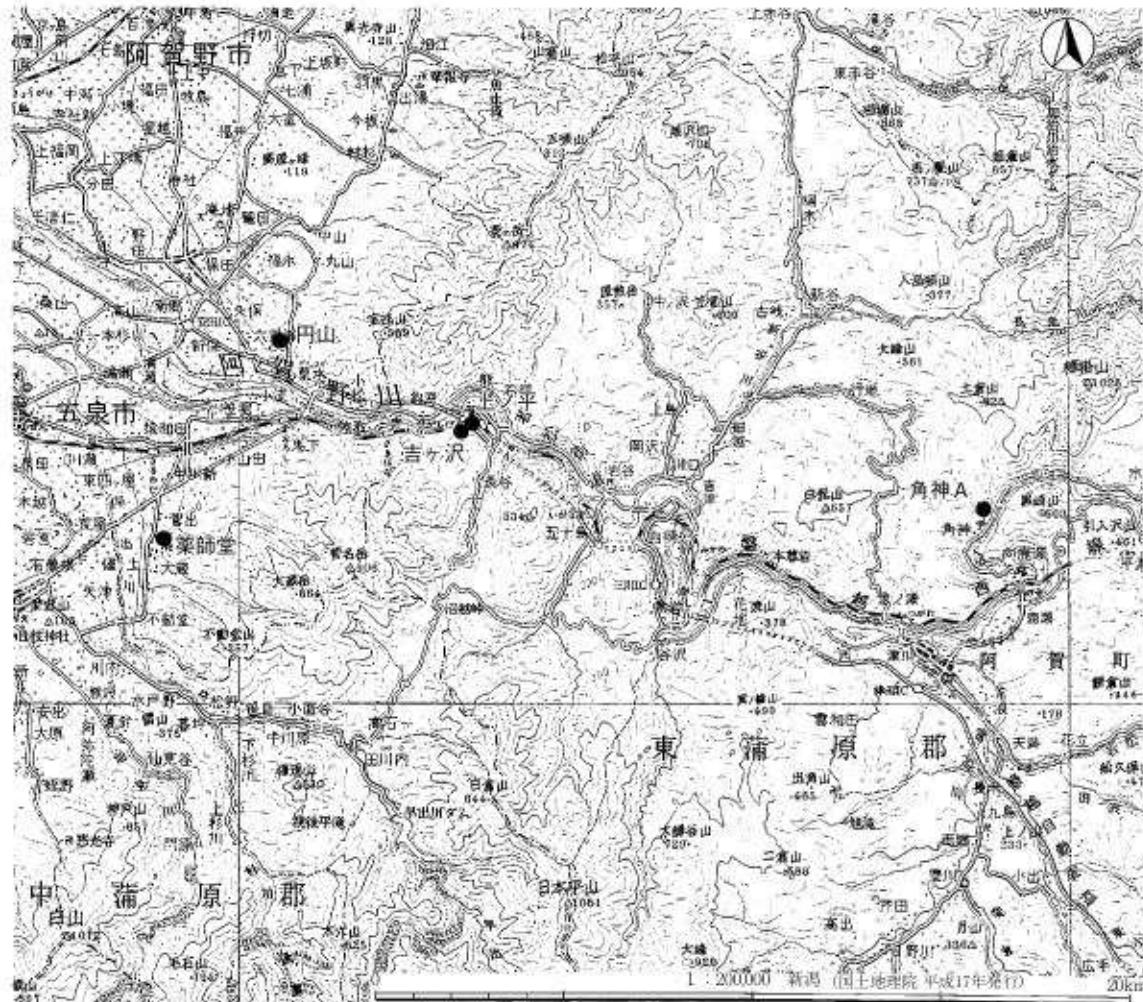
角神遺跡は、阿賀野川右岸に形成された河岸段丘上、角神温泉スキー場内の緩やかな斜面に立地する。遺跡は、A・B・C・Dの4地点で確認されており、ナイフ形石器文化の石器が採集されたのはA地点である。A地点は、標高140mほどの最上位段丘上にあたり（第1図）、中位・下位段丘のB・C・D地点からは縄文時代中期の遺物が採集されている。

遺跡の発見者である閔 雅之氏は、「ホテル角神より一段高い段丘（スキー場付近）のローム層から石刃、ナイフ形石器、搔器などが発見されている。」〔閔1972〕と記載している。A地点周辺は土地造成により一部削平されていることもあり、現地でその地点を判断することは難しい状況にあるが、閔氏によれば第1図左下の遺跡位置図のうち「角神スキー場」という写植の「キ」の字とその西側付近、15m程度の範囲から主要な石器が採集されたとのことである^{註2)}。

また、新潟県埋蔵文化財包蔵地カード（記載者：荒木繁雄氏、1973年記載）によれば、A地点周辺の土層は、上位から表土50cm、黄色粘土層80cm、シルト層100cm、砂層（細砂）が堆積するとされている。そして、黄褐色粘土層の最上位から「スクレイバー」が出土したと記載されている。黄褐色粘土層の上部はローム層に相当するものと考えられ、石器表面にもローム質の土が付着するものがある。このことは、石器の出土層位がローム層中にあったことを示唆している。

3 採集資料の紹介

A地点で採集された石器は、他地点で採集された縄文時代の石器と一部混在して保管されていたため、まずはこれまでに公表されている文献〔閔1972、閔・若松ほか1978、新潟県1983〕に掲載されている明らかな資料を抽出した。さらに技術的・形態的特徴から、ナイフ形石器文化に属すると考えられる石器を抽出した。したがって、すべてがA地点から採集された資料でない可能性も残る。しかし、閔 雅之氏の記



第1図 阿賀野川流域におけるナイフ形石器文化の遺跡（上）と角神A遺跡（下）の位置

載によれば、A地点のみからナイフ形石器文化の石器が採集されたものとみることができる。実際、他地点から採集された縄文時代の石器と比べると、技術的・形態的特徴はもちろんのこと、使用石材においても明らかな相違がみられる。したがって、ここで紹介する資料をA地点から採集された石器とみてほぼ問題ないとみられる。

検討の結果、ナイフ形石器文化に属すると判断した石器の内訳は、ナイフ形石器4点（第2図1～4）、彫器3点（第3図5～7）、搔器6点（第4図8～11、第5図12・13）、削器1点（第5図14）、石刃2点（第5図15・16）である。ただし、搔器2点（第4図11、第5図13）については、縄文時代の石器である可能性も残ることから、その旨の記載も加えることとした。

なお、この16点の石器のうち14点がトゥールである点は特筆される。残る2点もトゥールの素材となる石刃であり、石器製作において副次的に産出される剥片・碎片等は認められない^{註3)}。採集時に碎片等の小さな石器が採集されなかった可能性もあるが、トゥールが87.5%もの高率で発見される状況は特異である。接合関係や明瞭な母岩の共有関係が認められないことを勘案すれば、遺跡内で剥片剥離から石器製作に至る一連の石器製作が行われなかつた可能性がある。すなわち、石器が完成品や素材の状態で遺跡に搬入された様子を窺うことができる。

（1）ナイフ形石器（第2図1～4）

1は玉髓製で、長さ8.2cm、幅3.2cm、厚さ1.2cm、重さ22.65gを測る。縦長剥片を素材とし、基部側に残置された打面にはわずかに調整剥離が認められる。下半部の両側縁には、抉るような二次加工が施されている。その結果として最大幅が中間部付近にあり、二次加工が施されない先端側が基部側より幅広な形態となっている。

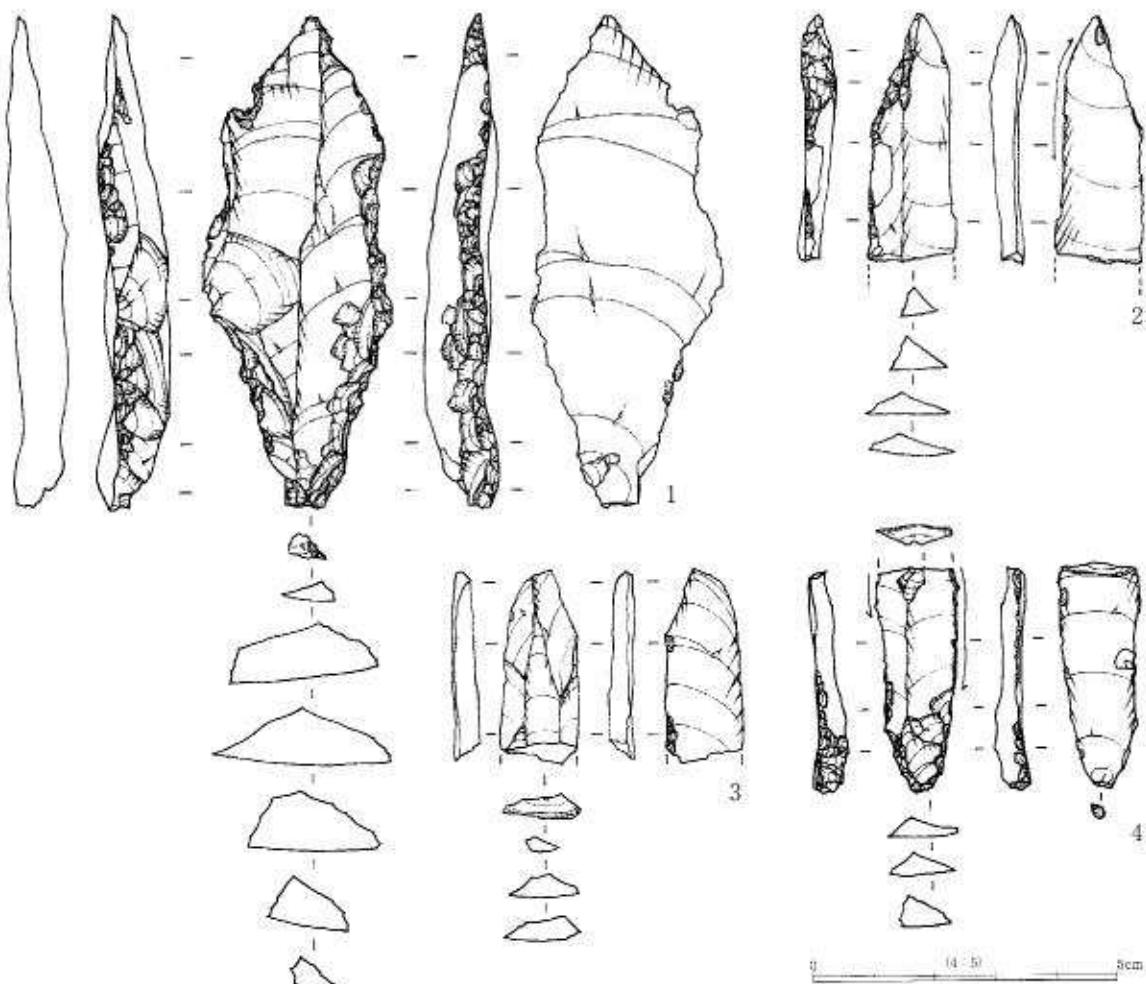
2は光沢を有する珪質頁岩製で、長さ4.1cm、幅1.5cm、厚さ0.6cm、重さ2.5gを測る。表面には一条の稜線が中央に走っており、表裏面の剥離軸が一致する。いわゆる石刃を素材としていることがわかる。素材剥片の打面を先端側に充て、先端部の一側縁に素材を大きく斜断するような加工が施されている。なお、基部は新規欠損している。

3は光沢を有する珪質頁岩製で、長さ3.2cm、幅1.3cm、厚さ0.4cm、重さ1.89gを測る。石刃もしくは縦長剥片を素材とし、右側縁の裏面に施された二次加工が、折損している基部側まで連続することが想定されたためナイフ形石器と積極的に判断した。二次加工の部位が他のナイフ形石器と異なるため、あるいは削器に分類することが適當かもしれない。

4は玉髓製で、長さ3.8cm、幅1.4cm、厚さ0.6cm、重さ2.47gを測る。表面には一条の稜線が中央に走り、表裏面の剥離軸が一致することから、石刃を素材としていることがわかる。先端部を折損しているが、基部は細かい二次加工によって尖銳に仕上げられている。薄手で小形の石刃を素材とし、先端部の一側縁と基部に二次加工が施され柳葉形に整えられている。「真正の石刃」[芹沢1959]を素材とし、「基部、あるいは基部と一側辺の先端部に剥離を加え」[芹沢1986]、「柳の葉のように細長く」[芹沢・中村・麻生1959]、「基部も先端部も共に尖」[芹沢・麻生1953]のように仕上げられた、いわゆる「杉久保型ナイフ形石器」[芹沢・麻生1953]の基部と考えられる。基部に裏面加工が施されず、打面を残す点は、「金谷原型」[加藤1965]とも共通する。

（2）彫 器（第3図5～7）

5は頁岩製で、長さ7.8cm、幅3.7cm、厚さ2.7cm、重さ46.54gを測る。「し」の字状[織笠1983]をなす厚手の石刃を素材とし、その両端部に彫刀面が作出されている。また、右側縁下半には、急角度な二次



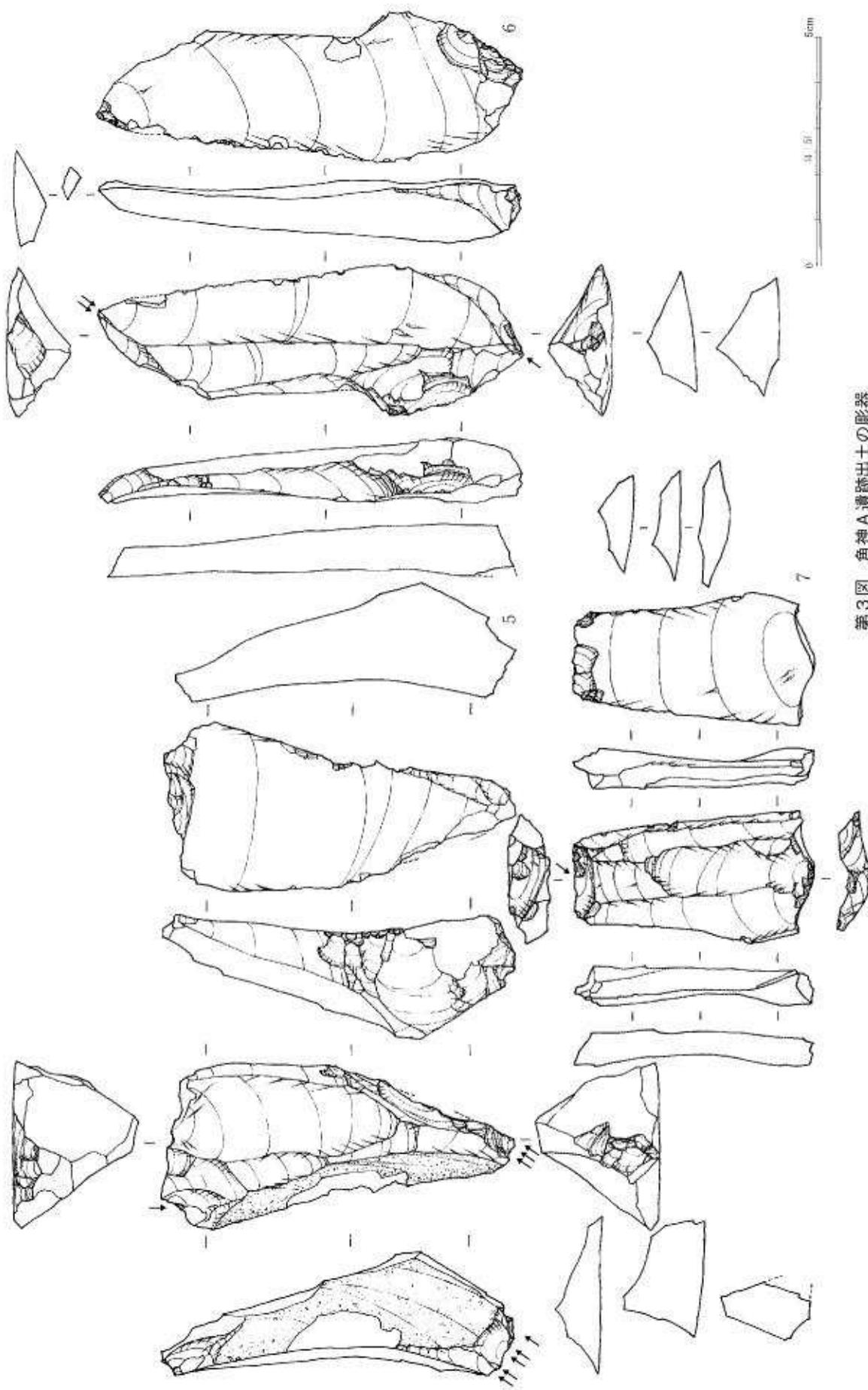
第2図 角神A遺跡出土のナイフ形石器

加工が施されている。

6は頁岩製で、長さ9.5cm、幅3.3cm、厚さ1.4cm、重さ26.51gを測る。石刀を素材とし、その両端に彫刀面が作出されている。

7は頁岩製で、長さ5.3cm、幅3cm、厚さ0.9cm、重さ13.9gを測る。石刀を素材とし、その末端部に彫刀面が作出されている。細長い彫刀面は形成されていないが、その製作過程は5・6と共通する。

これら3点の彫器は、いずれも共通の製作過程をたどる。縦長剥片の端部右側裏面に二次加工を施し、ここを打面として左側縁に彫刀面が作出されている。「背面と彫刀面とは、約45度をなして交わり、多くの場合には、背面にも細かい剥離が加えられている。この背面剥離は、彫刀面をきざむための、打面を形成させることに目的があるのかもしれない。このような彫刀面を上からのぞけば、Z形を呈する」〔芹沢・中村・麻生1959〕と定義される「神山型彫器」の範疇に含まれるものと考えられるが、形態的バラエティーに富む。7は一端のみに彫刀面が作出されるのに対し、5・6は両端に作出されている。また、彫刀面には斜断するように形成されるもの(6)と、素材の側縁に基軸に沿うように形成されるもの(5)とがある。素材の大きさも個性的である。神山型彫器の形態的多様性については、いくつかの研究〔菅沼1996、立木1997、沢田1996、佐藤・山本ほか2000等〕からも明らかにされているが、そもそも加工の過程を重視された定義について、「素材・加工・形」〔織笠1984〕の各側面から体系的に検討する必要がある〔加藤2005〕。



第3図 角神A遺跡出土の影器

(3) 搾 器 (第4図8～11、第5図12・13)

8は光沢を有する珪質頁岩製で、長さ8.1cm、幅5cm、厚さ1.9cm、重さ59.09gを測る。縦長剥片の打面を刃部にあて、素材の形状が大きく修整されている。刃部は、微細剥離痕が重なることで滑らかな円弧状に整えられている。本遺跡で最も大きな搔器である。

9は珪質頁岩製で、長さ4.2cm、幅2.7cm、厚さ0.9cm、重さ9.33gを測る。珪質頁岩は、光沢を有するほど良質なものではなく、黒色の脈を有する。寸詰まりな縦長剥片を素材とし、先端部から左側縁にかけて連続的に急角度な二次加工が施される。特に先端部は、微細な剥離痕が重なり滑らかな円弧状に整えられている。なお、裏面の広範囲には使用痕と考えられる光沢面が観察される。

10は光沢を有する珪質頁岩製で、長さ8.6cm、幅3.9cm、厚さ0.9cm、重さ20.7gを測る。素材となった石刀は薄く、取り込まれた打面は小さい。打面調整・頭部調整が施されており、石刀技法の調整技術がよく表れている。石刀の末端部に円弧状の刃部が作出されているが、一部は破損により大きく抉れている。二次加工が施されない左右両側縁には、微細剥離痕が連続的に分布している。

11は光沢を有さない緻密な珪質頁岩製で、長さ1.5cm、幅2.5cm、厚さ0.4cm、重さ1.91gを測る。刃部のみの資料であり、剥離面の切り合い関係の観察から最終的に両極剥離がなされていることがわかる。この両極剥離面は、搔器の製作時に形成された剥離面よりパティナ（風化面）の形成が微弱である。両極剥離は、石器製作時に多用する技術であり〔田中1977〕、パティナの状況の相違を勘案すれば、縄文時代に先土器時代の搔器が転用された可能性もある。

12は光沢を有する珪質頁岩製で、長さ7.7cm、幅3.5cm、厚さ2cm、重さ40.1gを測る。調整打面から剥離された石刀が素材となったものと考えられるが、他の資料と比べると取り込まれた打面は大きく厚手である。礫面に付着した角礫による凹凸を除去するために厚手に剥離されたものと考えられる。その末端部から左側縁にかけて広範に二次加工が施され、円弧状の刃部が形成されている。なお、礫面が残る右側縁には刃部が延長しない。器面に凹凸があるため滑らかな刃部の作出が困難であり、あえて片側に偏るように刃部が作出された可能性がある。

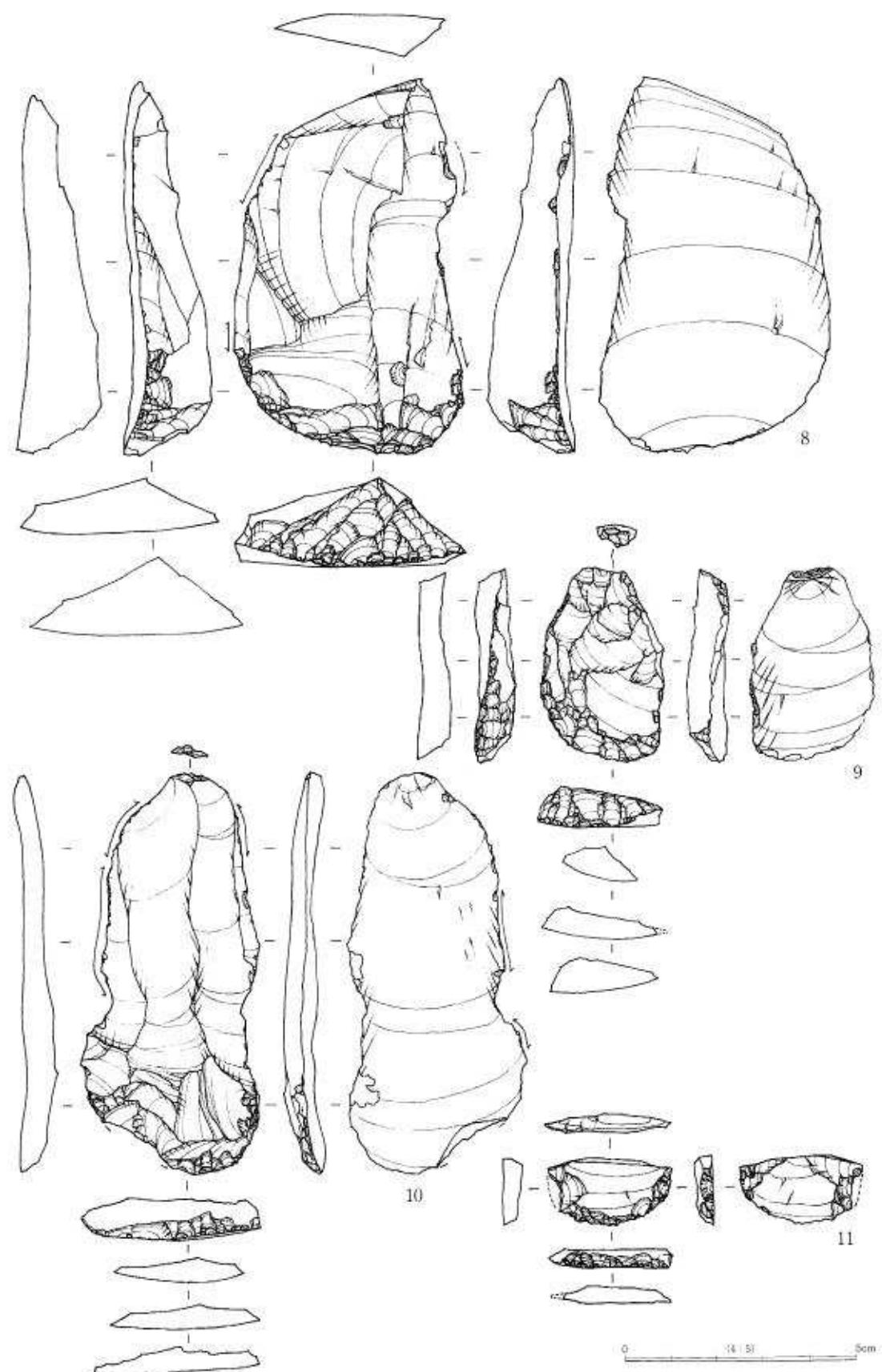
13は流紋岩製で、長さ6.7cm、幅3.4cm、厚さ1.3cm、重さ20.48gを測る。ナイフ形石器文化の石器においては、特異な石材選択の状況といえる。周辺地域においては、流紋岩は縄文時代に頻繁に用いられる石材であるが、先土器時代の石器群に用いられることは稀である。また、縦長剥片の端部の狭い範囲のみに二次加工が施されているのみで刃部長は短い。石材・刃部の形状において、他の搔器と比べて異質といえる。あるいは縄文時代に下る資料である可能性も考えられよう。

(4) 削 器 (第5図14)

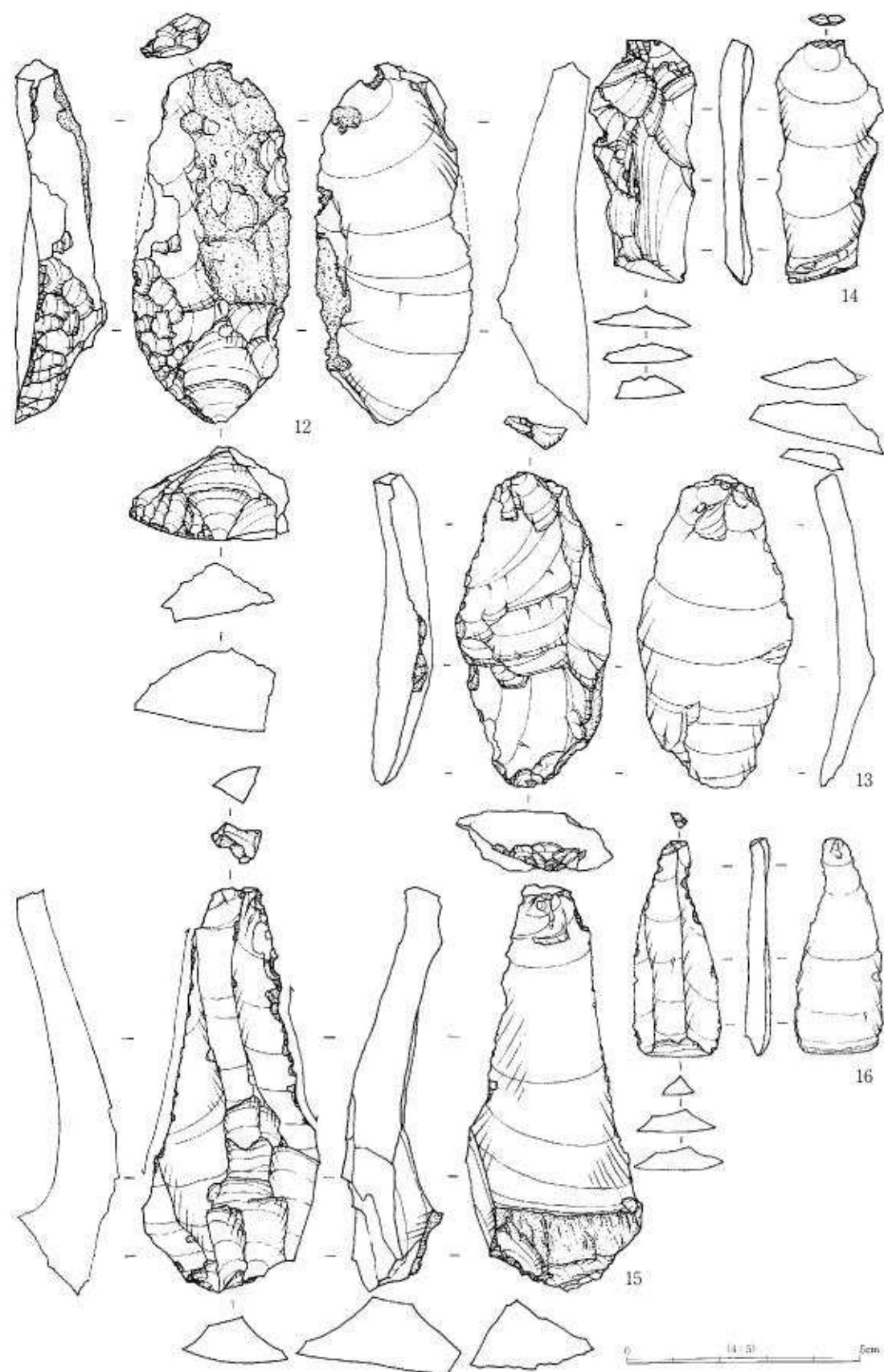
14は光沢を有する珪質頁岩製で、長さ5.3cm、幅2.3cm、厚さ0.7cm、重さ6.4gを測る。表裏面の剥離軸が一致しない縦長剥片を素材とする。小さく取り込まれた調整打面、頭部調整を有する特徴から、石刀技法により得られたものと考えられる。左側縁の裏面に二次加工が連続的に施されている。

(5) 石 刀 (第5図15・16)

15は黒曜石製で、長さ8.7cm、幅3.8cm、厚さ2.2cm、重さ35.2gを測る。両設打面の石核から剥離された大形の石刀で、打面調整は行われているが、頭部調整は行われていない。剥離時に他端の打面が取り込まれたため、「し」の字状をなしている。両側縁には微細剥離痕が連続的に認められるが、これは使用により生じた刃こぼれかもしれない。なお、本資料は角神A遺跡から採集された唯一の黒曜石製石器である。漆黒で、やや紫色を帯びる極めて特徴的な黒曜石であり、この原産地を探ることは、石器群の系譜を考え



第4図 角神A遺跡出土の搔器



第5図 角神A遺跡出土の搔器・削器・石刃

る上で興味深い。

16は光沢を有する珪質頁岩製で、長さ4.6cm、幅1.9cm、厚さ0.6cm、重さ4.12gを測る。残置された打面には打面調整がなされており、頭部調整も行われている。表裏面の剥離軸は一致しており、単設打面から連続的に剥離されたものと考えられる。末端部には折損面様の剥離面がみられるが、主要剥離面と連続しており、剥片剥離時に生じた蝶番状の剥離面である。なお、微細な剥離痕が認められるが、単発的であり連続するものではない。

4 石器群の位置付け

(1) 角神A遺跡における2つの石器群

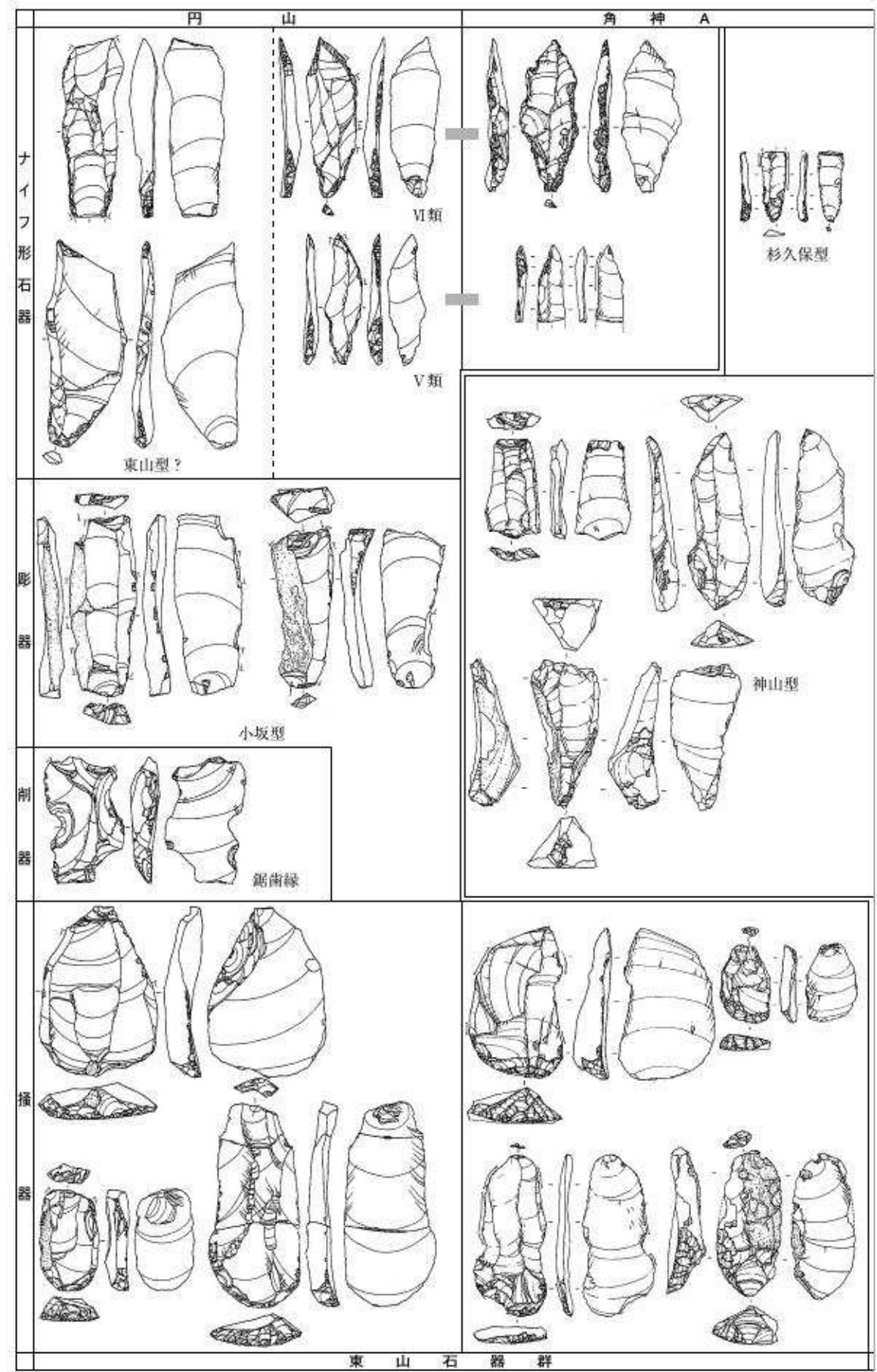
角神A遺跡から採集された石器には、杉久保型ナイフ形石器(4)^{註4)}と神山型彫器(5~7)が認められる。この2種の形態の組み合わせから構成される石器群は、「杉久保石器群」と呼ばれている〔麻柄2000等〕。殊に、特徴的な製作過程を辿る「神山型彫器」の存在は、杉久保石器群の認識において重要な指標となる〔阿部1996〕。角神A遺跡採集資料においては、3点を神山型彫器と判断したが、それらは形態的バラエティーに富む。分類上は「神山型」となるが、素材の大きさや彫刀面の作出位置において、典型例とされる上ノ平遺跡や吉ヶ沢遺跡の事例(第6図)と比べると異質である。

一方、杉久保石器群に伴うことは稀な搔器〔芹沢・中村・麻生1959〕が多数認められる(8~13)。むしろ、この搔器の存在に注視する必要がある。近隣では東山石器群の代表的事例とされる円山遺跡において多数の搔器が出土しており、素材の大きさや用い方、二次加工が施される部位、光沢を有する珪質頁岩が用いられる点において共通する(第6図)。また、角神A遺跡においては、杉久保石器群に一般的には伴わない形態のナイフ形石器(第2図1・2)が認められる。より大形の石刃を素材として基部を大きく抉るように二次加工が施される1や、素材剥片の打面を先端側に充て先端部の一側縁に素材を大きく斜断するような加工が施された2は、円山遺跡のナイフ形石器に共通する。円山遺跡発掘調査報告書におけるナイフ形石器の分類と対比すると、1はVI類と、2はV類とよく共通する(第6図)。石器の形態構成において、円山遺跡と多くの共通性を見出すことができるといえよう。これらの状況から判断し、従前の分類にしたがえば、「東山石器群」〔小林1963〕によく共通する内容を持ち合わせるものと考えられる。標識資料である東山遺跡の実態が必ずしも明らかでない現段階において円山遺跡を東山石器群と評価することに問題もあるう^{註5)}が、少なくとも杉久保石器群の代表的事例である上ノ平遺跡・吉ヶ沢遺跡には認められない特徴を有するといえる。すなわち、角神A遺跡においては、杉久保石器群と東山石器群の各要素が見出され、両者が混在する可能性を指摘できる。

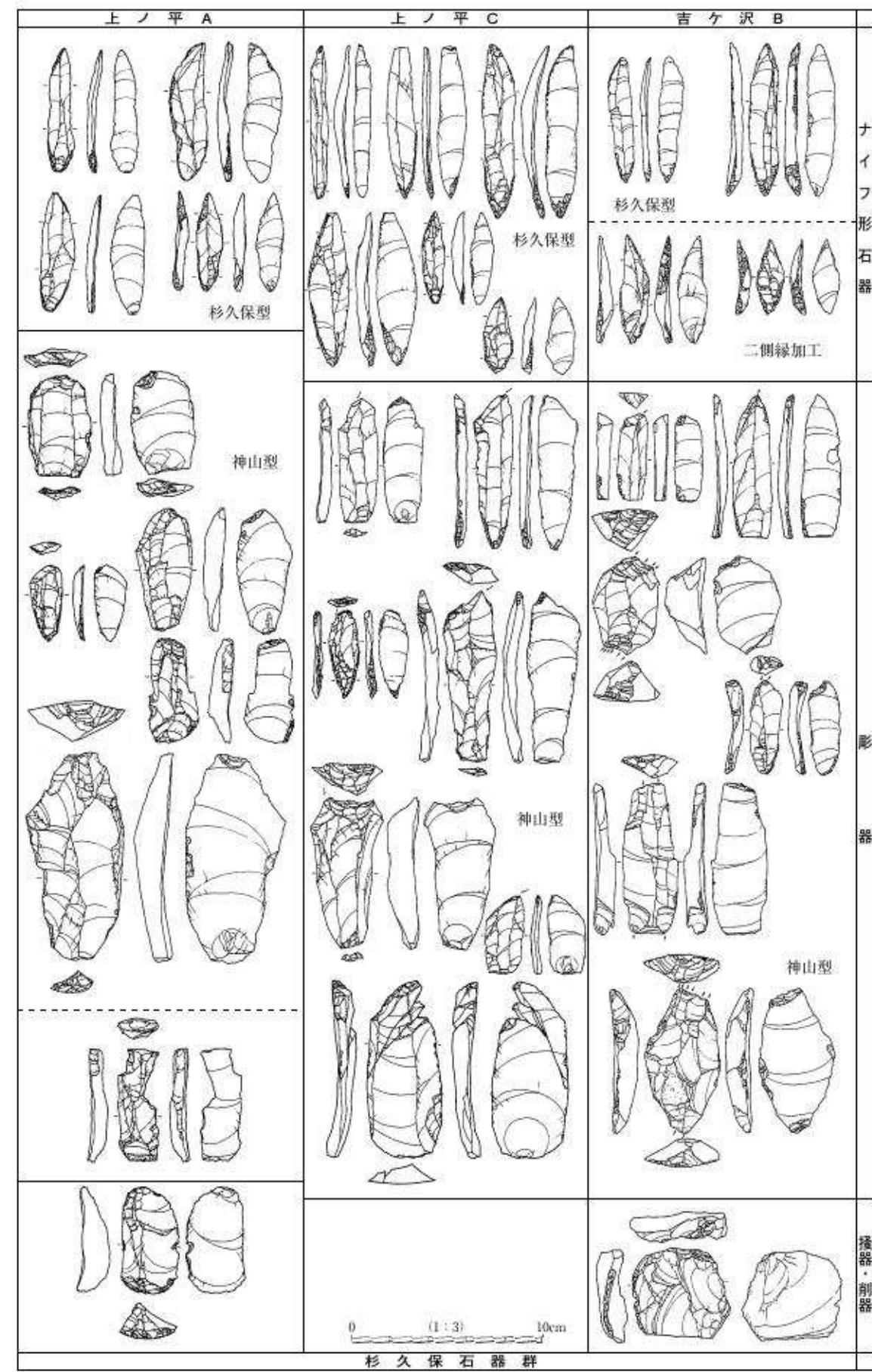
(2) 東山石器群の範囲に関する問題

角神A遺跡において認められる「東山石器群」およびそれを構成する「東山型ナイフ形石器」の範疇については、これまで十分な検討がなされてきたとは必ずしもいえない。類例が少なく、検討のための十分な資料が得られていないことが、その大きな要因と考えられる。このような現状においては、標識遺跡である東山遺跡の調査者である加藤 稔氏の見解に立ち返る必要がある。氏は、「東山型ナイフ形石器」およびこれを伴う石器群を、次のように表現している。

「(中略) 大形ナイフである。すなわち、石刃の打面を大きくのこし、打面周辺の側縁にだけ細部加工をほどこし基部とする単純な形のナイフ形石器である。先端部には、小さく刃潰しの加工のみられるばあいがある。さらに主要剥離とは逆の方向から剥離された面があるのも特徴で、全体が幅広く、従来知られて



第6図 阿賀野川流域における



ナイフ形石器文化の石器

いた杉久保型とよばれるナイフ形石器のようにスラリとした細身の類がない。20cm近いものもあり、杉久保型よりは概して大形の傾向がある。石器群はこのナイフの他に彫刻刀、縦形搔器、石刃、石刃核で組成されている。」[加藤1964]

さらに加藤 稔氏のもとで研究を進めた高橋郁夫氏は、「東山型ナイフ形石器文化」について、次のように詳細な解説を加えている。

「(a) ナイフ形石器は真正な大形ないしは中形石刃を素材とするものであること。その他の特徴は、打面を大きく残し、その側縁だけに調整を加え、先端部の刃潰し加工はわずかにみとめられる。また、先端部に主要剥離と逆の剥離された面が残り、鋭い抉入状の刃部をなしている場合が多い。(b) 多量の定形的な縦形搔器を伴うこと。搔器の大部分は先刃搔器 (End-Scraper on blade) である。また、搔器の素材として黒曜石や玉髓質が多く使われる傾向にある。(c) 上下両端に打面を持つ石刃核 (Cylindrical-Core)、つまり円筒形石刃核があること。(d) 彫刻刀形石器が少ないこと。(e) 小坂型彫刻刀の仲間の角形彫刻刀である確率が高い。」[高橋1978]

加藤 稔氏・高橋郁夫氏の記述は、現在いわれている「東山石器群」の内容を端的に示している^{註6)}。当時の限られた資料をもとに、このような特徴が明らかにされたことは卓見であったといえよう。一方、東山型ナイフ形石器の定義については、素材と加工の記述はみられるが、形についての記述は「大形」という抽象的な表現に留まっている。「東山型ナイフを単に杉久保型ナイフと異なる形態、つまりNon-Sugikubo Typeとして包括的に考え、資料の増加をまって細分しようとする動きがあった」[高橋1978]ため、形についての記述が詳細になされなかつたのであろう。このような考え方、「東山型ナイフが拡大解釈される原因となった」[高橋1978]と考えられる。また、東山型ナイフ形石器のプランディングの認識そのものについても問題が指摘されている〔藤原1979等〕が、高橋郁夫氏も「使用痕のある石刃を一応東山型の仲間と考えたが、厳密な意味ではナイフ形石器といえない。」[高橋1978]としている。この表現には、東山型ナイフ形石器の捉え方の難しさが象徴されている。そもそも、そのすべてをナイフ形石器として捉えるべきか否かから改めて検討を始める必要があろう。

(3) 杉久保石器群と東山石器群の先後関係

しばしば対置される形で捉えられる「杉久保石器群」と「東山石器群」ではあるが、佐藤達夫氏により、そもそも東山型ナイフ形石器と杉久保型ナイフ形石器の分布の中心は重複しないことが指摘されている〔佐藤1969〕。阿賀野川流域は、両者がモザイク状に重なり合って分布しており、両石器群の検討において重要な地域といえる。相互の関係については、様々な観点から検討する余地が残るもの、二つの石器群に大別することについて重大な異論は提示されていない。両者の特徴について、中村孝三郎氏は次のように整理している〔中村1965〕。

「杉久保型の刃器文化」 (イ) 杉久保型ナイフ形石器をもつ。(ロ) 神山型彫器をもつ。(ハ) 中形の刃器をもつ。(ニ) 杉久保型ナイフ形石器、神山型彫器は刃器を素材とする。そのうち中形の刃器は刃器技法によって製作されている。

「東山石器文化」 (イ) 東山型ナイフ形石器をもつ。(ロ) 小坂型彫器をもつ。(ハ) 搔器をもつ。(ニ) 中形および大形の刃器をもつ。(ホ) とくに東山型ナイフ形石器、搔器はかたちのととのった刃器からつくりだされている。(ヘ) 刀器技法の発達が顕著である。

中村氏は、石器の形態組成と刃器の大きさの相違から、両者を区別できるとしている。この2群に大別する視点は、発表から40年以上を経過した現在においても重要な研究といえる。中村氏の論旨は、近年の

調査事例の蓄積により具体性をもって把握され、それが的確な指摘であったことが裏付けられている。

殊に、文化層が重複しない遺跡が多いことは一段階の様相を端的に示しており、両者の相違を鮮明に把握するための条件が整いつつある。一方、両石器群が重複して検出された事例は数えるほどしかなく、新潟県域で石器群の先後関係が層位的に把握された事例は樽口遺跡〔立木1996a〕のみである。また、新潟県域は土層の堆積状況に恵まれないため、仮に石器群が重複して検出された場合においても、文化層を明瞭に分離することは困難である。このような限られた条件の中、始良Tn火山灰（AT）と浅間草津黄色軽石（As-K）との上下関係の把握に努め、周辺地域の様相を参考に編年観が示されてきた〔沢田1994b、阿部1996、音沼1999、高橋・沢田1999、佐藤2002、佐藤ほか1999、山本2003、加藤2004等〕（第1表）。また、立木宏明氏は、樽口遺跡の報告書において、折り重なるように検出された複数の石器群を層位的検討と石器の型式学的検討をとおして文化層を分離した〔立木1996a〕。

これらの研究をとおして、東山石器群がAT降灰前後の層位から検出されること、杉久保石器群がAT降灰以降、As-K降灰以前の層位から検出されることが明らかとなった。また、上ノ平遺跡C地点においては、杉久保石器群がATよりAs-Kに近い層位から検出されており、AT降灰後、より新しい段階に位置付けられる可能性が示された〔沢田1996〕。こうして「東山石器群→杉久保石器群」とする変遷観が構築された。

さらに、杉久保石器群については、杉久保型ナイフ形石器を主体とする一群と、杉久保型に二側縁加工のナイフ形石器が安定的に加わる一群とに細別される〔沢田1996〕。後者に尖頭器が共伴する事例（津南町・柄ノ木平遺跡〔中村1961〕、岩手県・和賀仙人遺跡〔菊池ほか1984〕）があることから、前者をより古い段階に、後者をより新しい段階に位置付ける考えが示されている〔小熊1994、沢田1996、立木1996b等〕。しかし、後出的要素の根拠とされた尖頭器の共伴関係そのものに疑義が指摘されており〔佐藤2002、沢田2004〕、筆者は両者の関係を慎重に評価することとしたい〔加藤2004〕。

また、近年では、杉久保石器群を細別できることが幾人かの研究者によって報告されている〔森先2004・2005、山本2005〕。これらの研究によって、石器群をより細かな単位で捉えることができる事が予想されるものの、杉久保石器群と東山石器群に大別する視点と変遷観は、今後の研究において大きな変更は生じないものと考えられる。

なお、工藤雄一郎氏は向原A遺跡・向原B遺跡における杉久保石器群の¹⁴C年代測定値を発表した。氏は、その年代値を較正すると約23,000～22,000calBP頃に集中することを明らかにし、相模野台地における測定値との比較から杉久保石器群が、南関東の「砂川期」と対応することを示した。従前の研究より具体性をもって示された対応関係であり、今後の広域編年を検討する上で重要な資料となる〔工藤2005、佐藤ほか2006〕。工藤氏が示した年代観は、従前の変遷観を具体的に裏付けたものといえよう。今後のさらなる測定値の蓄積が期待される。

(4) 角神A遺跡の編年的位置付け

これらの研究を踏まえて角神A遺跡の編年的位置付けを整理したのが第1表である。杉久保石器群は、いくつかの遺跡における層位的出土例からAT降灰以降、As-K降灰以前に位置付けることができる。東山石器群は、AT降灰前後から検出されている。角神A遺跡と共に見出される円山遺跡の報告書において土橋由理子氏は、「基部に抉りを持つナイフ形石器」が山形県上ミ野A遺跡〔羽石・会田・須藤2004〕や樽口遺跡A-KSE文化層といった国府型ナイフ形石器を伴う石器群（瀬戸内系石器群）に伴うことを指摘している〔土橋2004〕。また、円山遺跡・上ミ野A遺跡・樽口遺跡A-KSE文化層をとおして、鋸歯縁石器・

抉入石器（ノッチ）が特徴的に加わる〔加藤2004〕。すなわち、円山遺跡における東山石器群と瀬戸内系石器群には、これらの共通点を認めることができる。この点を積極的に評価すれば、円山遺跡・角神A遺跡における東山石器群は、AT降灰以降に位置付けられる瀬戸内系石器群と対比できる可能性を指摘できる。したがって、角神A遺跡の東山石器群は、AT降灰以降、As-K降灰以前に位置付けられる可能性がより高いと考えたい。

改めて整理すると、角神A遺跡の石器群は「東山石器群（瀬戸内系石器群併行）→杉久保石器群（砂川期併行）」という変遷觀を辿ることができる。しかし、杉久保石器群の重要な指標である神山型彫器は、典型例とはいひ難いものである。石器が限られた範囲からまとめて採集されたことを考慮すれば、両者の併存の可能性が皆無とは言い切れず、今後の事例の増加を待つて再度検討することも視野に入れておく必要がある。

地 域		下 越				津 南	
広域火山灰	遺跡名 校正年代[工藤2005]	樽口	ガラハギ・荒川台 上ノ平A・上ノ平C	坂ノ沢C	角神A	胴抜原A	下モ原I
			荒沢（中越）				
		縄文草創期					
As-K							
		細石器					
	23,000 ~ 22,000calBP	杉久保	杉久保		杉久保		杉久保
		東山・瀬戸内		瀬戸内	東山		
AT	28,000 calBP						
		東山				東山	
		台形様		台形様			

第1表 広域火山灰との層位的出土事例と角神A遺跡の位置付け

※各報告書等を基に作成した〔加藤2004〕を改変。

5 石材利用の状況

角神A遺跡から採集された石器の石材は、珪質頁岩9点、頁岩3点、玉髓2点、流紋岩1点、黒曜石1点である。ここでいう珪質頁岩は、風化面が光沢を帯び、新鮮な剥離面が緻密で黒色を呈するものである。一方、頁岩は珪質頁岩ほど緻密ではなく節理面があり、風化面は光沢をもたないものである^{注7)}。石器群別（分類が明らかでない資料を除く。）にみると、杉久保石器群は頁岩3点・玉髓1点、東山石器群は珪質頁岩6点・玉髓1点・流紋岩1点である。また、両設打面の石核から剥離された黒曜石製の大形石刃（15）は、あるいは東山石器群に分類される可能性がより高い。

すなわち、両石器群の石材構成は、頁岩を主体とする点において共通するが、その質感は異なる。東山石器群では珪質頁岩が、杉久保石器群では頁岩が用いられているのである。頁岩は阿賀野川流域に分布する七谷層・津川層にあることから、その原産地が近隣に存在することが想定され、上ノ平遺跡・吉ヶ沢遺跡の近隣を流れる長谷川や阿賀野川・新谷川・網木川・常浪川等の流域で採取できる〔阿部1995、田村2005〕。一方、東山石器群に用いられる光沢のある珪質頁岩は、阿部朝衛氏による周辺地域の河川調査で容易に採取できないことが明らかにされており〔阿部1995〕、筆者の踏査においても同様の所見を得ている。

しかし、珪質頁岩を近隣で採取できないわけではなく確認される量がわずかであることから、ノジユールとして部分的に含まれることが想定される^{註8)}。近年、田村 隆氏によって良質な石材の分布が指摘されており〔田村2005〕、更なる調査が必要と考えられる。

このように未知の原産地が存在する可能性は残るもの、阿賀野川流域の遺跡への石材搬入の状況からは、周辺地域において珪質頁岩を安定的に供給する環境を積極的に認めることは難しい。阿賀野川流域における石材利用の対照的な在り方は、次の2類に整理される。

【1類】 主要石材：光沢を帯びない頁岩が主体となる。

石器の特徴：

- ・原石から完成品に至る一連の石器製作関連資料が出土しており、接合関係が著しい。
- ・光沢を帯びる珪質頁岩製のトゥールが、数少ないながらも搬入されることがある。

主な遺跡：吉ヶ沢遺跡B地点（杉久保石器群）

【2類】 主要石材：光沢を帯びる珪質頁岩製が主体となる。

石器の特徴：

- ・石刃（素材）もしくは完成品の状態で搬入されている。
- ・剥片や碎片など、剥片剥離時に生じるであろう資料が少数である。
- ・単独個体が多く接合資料が少ない。
- ・彫器の刃部変形が繰り返し行われている。
- ・頁岩製のトゥールが、数少ないながらも搬入されることがある。

主な遺跡：円山遺跡（東山石器群）、上ノ平遺跡A地点（杉久保石器群）、上ノ平遺跡C地点（杉久保石器群）、薬師堂遺跡（杉久保石器群）〔藤塚1982、菅沼1992〕

1類は、石材が原石の状態で多量に搬入されていることを考えれば、近隣で容易に採取できる石材を利用した結果を反映するものと考えられる。一方、石材を容易に採取できる環境においては、2類のような状況は生じにくいものと想定される。新潟県域から出土する光沢を帯びる珪質頁岩製の石器は、先土器時代・縄文時代をとおして単独個体で出土することが多く、遺跡内で石器製作が大々的に行われることはほとんど認められない。これは、同質の石材による石器が多数出土している山形方面から完成品もしくは素材の状態に加工されて、搬入されたことを示唆する可能性がある。

このように、対照的な在り方が存在することは、沢田 敦氏により整理されている（第2表）〔沢田1997〕。1類は沢田氏のいう石材原産地遺跡（トゥールや石刃が多量に製作されて持ち出された遺跡）と、2類は上ノ平遺跡A地点に代表されるトゥールや石刃が持ち込まれた遺跡に共通するものと整理できよう。沢田氏の一連の研究〔沢田1994a・1996・1997〕は、氏が担当した上ノ平遺跡A地点・C地点、吉ヶ沢遺跡B地点の調査所見による

		石材原産地遺跡	上ノ平遺跡A地点
石 器 組 成	トゥール	少ない	多い
	石刃	きわめて多い	多い
	石核	多い	きわめて少ない
	削片	少ない	きわめて多い
	剥片	きわめて多い	少ない
	石器の総点数	多い（数千点）	少ない（数百点）
石器の分布密度		高い	低い
同一母岩の石器点数		多い	少ない
石器接合		多い	少ない
持ち込まれた遺物		原石・荒割り原石	トゥール・石刃・剥片
持ち出された遺物		石核・石刃・トゥール	トゥール・石刃
主な石器製作		石刃生産	トゥールの製作・再生

第2表 石材産出地遺跡と上ノ平遺跡A地点の特徴 [沢田1997]

ところが大きいようである^{注9)}。3遺跡の発掘調査報告書が刊行されたことによって、更なる具体的な研究が展開されるものと期待される。

さて、この2つの分類と、角神A遺跡の頁岩製石器の状況を対照してみる。東山石器群は2類に分類される。単独個体で、すべての資料が搬入されている可能性が高く、石材の質も含め円山遺跡の状況に酷似する。一方、杉久保石器群は1類と共に頁岩が用いられているものの、剥片剥離に関する資料は伴わず、2類のようなあり方といえる。2類に分類される上ノ平遺跡C地点においても、少數の頁岩製トゥールが単独個体で出土する状況にある。頁岩の原産地を控えながらも、石器の製作痕跡が認められる遺跡と、トゥールや素材が主体的に出土する遺跡が存在することがわかる。あるいは別個に分類すべきパターンといえよう。このような状況からは、例えば珪質頁岩の利用を基本としながら、不足した場合に近隣で採取可能な類似石材で代用するようなケースを想定することもできようが、解釈にまで言及することは避けたい。今後の資料の蓄積と綿密な石材環境の調査を相俟って、多角的に検討することが必要となろう。

6 おわりに

これまでの検討のとおり、角神A遺跡採集の石器は、ナイフ形石器文化の資料であると判断された。この中には、石器形態の組み合わせから東山石器群と杉久保石器群が混在するものと考えた。

東山石器群は、枠組みの捉え方そのものに問題もあるが、その代表的事例のひとつとされる円山遺跡との共通性が見出された。石器形態の組み合わせだけでなく、ナイフ形石器や搔器の形態的バラエティーにおいても共通する。事例の少ない資料群であり、今後の研究における評価が注目される。

一方、杉久保石器群の重要な指標とした神山型彫器の形態は、典型例とされる上ノ平遺跡や吉ヶ沢遺跡の事例と比べると異質である。このことを一時期における形態差と捉えるべきか、杉久保石器群内における時期差と捉えるべきか、今後、検討を要する課題である。

仮に後者の可能性を想定した場合、東山石器群と併存する可能性も指摘できようが、これまでに知られている資料と比較すれば時期差として捉えるべきであろう。ただし、採集された石器は石器群の断片であるため全体像の把握は困難であり、両石器群の共存についても視野に入れつつ、類例の蓄積をもって改めて評価すべき課題であろう。

なお、本稿は、2006年5月に脱稿したものである。その後、2006年11月25・26日に山形県高畠町で開催された第20回東北日本の旧石器文化を語る会「シンポジウム 東北日本の石刃石器群」において、筆者は「新潟県域における杉久保石器群と杉久保石器群 - 下越地方の資料を中心に - 」と題して発表した。その内容の一部は、本稿を基に作成したものであることを付記しておく。

最後に、資料の採集状況についてご教示いただいた関 雅之先生、東蒲原郡史の執筆においてご指導いただいた中島栄一先生・遠藤 佐氏・沢田 敏氏、日ごろよりご指導いただいている新潟石器研究会の皆様に感謝申し上げます。

註

- 1) 新潟県遺跡台帳では、A地点は「角神A遺跡」の名称で周知化されている。
- 2) 関氏のご教示によれば、資料はスキー場のゲレンデ造成で、ブルドーザーが押した土砂から発見されたとのことである。したがって、発掘調査によって得られた資料ではないものの、土砂が大きく移動してい

ない段階での採集品とのことであり、まとまりをもった資料群として理解することができよう。氏によれば、第2図2、第3図6、第4図8～10、第5図16が、1969（昭和44）年の同日採集資料であり、第5図15の発見により「旧石器」として認識されたとのことである。なお、古川知明氏が『新潟県史研究』12に紹介した資料〔古川1982〕は、異なる地点から採集された資料のことである。

- 3) 関氏のご教示によれば、第1図のホテル前からスキー場へ向かう道路の東側の三叉路、三叉路の交点から西側80m付近の赤土の土道と、その北西側4～5m付近の赤土で碎片のみが採集されたとのことである。土器片を伴わず、本稿で紹介する資料群に伴う資料である可能性もあるが、主要な資料の採集地点と30～40mほど離れており、共伴関係に言及することはできない。別地点の採集状況ではあるが、当時、碎片を採集する意識をもって資料収集がなされていたことを窺うことができる。
- 4) 杉久保型の範囲については、芹沢氏の当初の理解に基づき、基部の裏面加工によって尖った形態が作出されたものに限定する考え方がある。杉久保型とした4は、基部に裏面加工がなく、素材剥片の打面をわずかに残置することから、その定義には相当しない。むしろ「金谷原型」〔加藤1965〕と捉えるべきであるかもしれない。しかし、狭義の杉久保型と金谷原型類似形態は、しばしば共存する。芹沢氏は、「基部の「加工方法の差異は、主に素材として使用された石刃の性質によるのではないかと思われる。」〔芹沢・中村・麻生1959〕としており、とりあえずは杉久保型を大きな枠組みで捉えておきたい。
- 5) 森先一貴氏は、「東山石器群」という枠組みの問題点を端的に指摘している。その上で、山形県乱馬堂遺跡出土資料を定点として「乱馬堂型石器群」という枠組みを設定している〔森先2004〕。新潟県域の資料においても、円山遺跡をひとつの定点として特徴を見直すべきであろう。また、AT降灰をはさみ、前後の資料間にみられる共通点と相違点も明らかにしていく必要がある。
- 6) 高橋郁夫氏のいう（c）については、杉久保石器群にも存在することが明らかとなっており、この事項のみを取り上げると東山石器群の特徴とはいえない。しかし、（a）の記述と総合して考えれば、両者の関連性を理解することができる。
- 7) 上ノ平遺跡C地点・吉ヶ沢遺跡B地点の報告書〔沢田1996・2004〕において、同様に頁岩を分類している。
- 8) 高橋春栄氏のご教示による。
- 9) 沢田 敦氏のご教示による。

引用・参考文献

- 阿部朝衛 1995「新潟県北部地域における石器材料の調査」『帝京史学』10 帝京大学文学部史学科
 阿部朝衛 1996「新潟県北部における旧石器時代研究の現状と課題」『北越考古学』7 北越考古学研究会
 小熊博史 1994「荒沢遺跡」下田村文化財調査報告書32 下田村教育委員会
 織笠 昭 1983「細石刃の形態学的一考察」「人間・遺跡・遺物」発掘者談話会
 織笠 昭 1984「石器形態の復原」「東京考古」2 東京考古談話会 昭 1984「石器形態の復原」「東京考古」2 東京考古談話会
 織笠 昭 1985「ナイフ形石器型式論」「論集 日本原史」吉川弘文館
 加藤 学 2004「新潟県域における『石刃石器群』の様相－研究の現状と課題の整理－」「第16回長野県旧石器文化研究交流会 シンポジウム「杉久保石器群をめぐる諸問題」発表資料」80～101頁 長野県旧石器文化研究交流会・野尻湖ナウマンゾウ博物館
 加藤 学 2005「杉久保石器群に関する覚書」「津南段丘に暮らした氷河期の狩猟民」津南学叢書第1集 津南町教育委員会
 加藤 学 2006「角神A遺跡」「東蒲原郡史」東蒲原郡史編さん委員会
 加藤 稔 1964「山屋・東山遺跡」山形県新庄市教育委員会
 加藤 稔 1965「東北地方のナイフ形石器文化」「歴史教育」13-3 歴史教育研究会
 加藤 稔・佐々木洋治 1978「山形県小国町東山発見の旧石器群」「山形考古」2-3 山形考古学会
 菊池強一ほか 1984「和賀仙人遺跡発掘調査報告書」和賀町文化財調査報告書第11集 岩手県和賀町教育委員会
 工藤雄一郎 2005「津南町後期旧石器時代の石器群の年代的位置」「津南段丘に暮らした氷河期の狩猟民」津南学叢書第1集 津南町教育委員会
 小林達雄 1963「無土器文化から繩文文化の確立まで」「創立80周年記念若木祭展示目録」
 佐藤達夫 1969「ナイフ形石器の編年的一考察」「東京国立博物館紀要」5 東京国立博物館

- 佐藤雅一 2002「新潟県津南段丘における石器群研究の現状と展望－後期旧石器時代から縄文時代草創期に残された活動痕跡－」『先史考古学論集』11 安斎正人
- 佐藤雅一 2004「杉久保系石器群研究の視点」『新潟考古』15 新潟県考古学会
- 佐藤雅一・山本 克・織田拓男・安部英二 1999「津南町における旧石器時代の石器群」『第12回 東北日本の旧石器文化を語る会（予稿集）』東北日本の旧石器文化を語る会
- 佐藤雅一・山本 克・安部英二・高山茂明 2000「下モ原I遺跡」津南町文化財調査報告書32 津南町教育委員会
- 佐藤雅一ほか 2006「貝坂桐ノ木平遺跡群（旧石器時代編）」津南町文化財調査報告書第50輯 津南町教育委員会
- 沢田 敦 1994a「上ノ平遺跡A地点」新潟県文化財調査報告書64 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦 1994b「新潟県の様相」「第2回 岩宿フォーラム/シンポジウム 群馬の岩宿時代の変遷と特色」笠懸野 岩宿文化資料館・岩宿フォーラム実行委員会
- 沢田 敦 1996「上ノ平遺跡C地点」新潟県文化財調査報告書73 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 沢田 敦 1997「氷期を生きた人々と 持ち運ばれ、再生を繰り返した石器 明らかになってきた石器製作システム」「ここまでわかった日本の先史時代」角川書店
- 沢田 敦 2004「吉ヶ沢遺跡B地点」新潟県文化財調査報告書132 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 菅沼 豊 1992「五泉市薬師堂遺跡旧石器時代資料の再検討」『新潟考古』3 新潟県考古学会
- 菅沼 豊 1996「『神山型彫刻刀』の再検討－中部地方北部の彫器の分析を中心に－」「考古学と遺跡の保護」甘粕 健先生退官記念論集 同論集刊行会
- 菅沼 豊 1999「第1章 旧石器時代 第2節 編年と地域性 第3項 ナイフ形石器群」「新潟県の考古学」新潟県考古学会
- 関 雅之 1972「鹿瀬町周辺の考古遺跡と遺物」「角神温泉付近の歴史と考古」ホテル角神
- 関 雅之・若松 茂ほか 1978「原始」「図説・東蒲原郡史 阿賀の里」東蒲原郡史編さん委員会
- 芹沢長介 1959「ローム層に潜む文化」「世界考古学大系1 日本1」平凡社
- 芹沢長介 1986「旧石器の知識」東京美術
- 芹沢長介・麻生 優 1953「北信・野尻湖底発見の無土器文化（予報）」「考古学雑誌」39-2 日本考古学会
- 芹沢長介・中村一明・麻生 優 1959「神山」津南町教育委員会
- 田中英司 1977「縄文時代における剥片石器の製作について」「埼玉考古」16 埼玉考古学会
- 高橋郁夫 1978「山形県における東山型ナイフ形石器の研究」「山形考古」2-3 山形考古学会
- 高橋春栄・沢田 敦 1999「阿賀野川以北における旧石器時代の様相」「第12回 東北日本の旧石器文化を語る会（予稿集）」東北日本の旧石器文化を語る会
- 田村 隆 2005「この石はどこからきたか－関東地方東部後期旧石器時代古民族誌の叙述に向けて－」「考古学」Ⅲ 安斎正人
- 立木宏明 1996a「樽口遺跡」朝日村文化財報告書11 朝日村教育委員会
- 立木宏明 1996b「中部地方北部における後期旧石器時代後半から縄文時代草創期前半の石器群の再検討」「考古学と遺跡の保護」甘粕 健先生退官記念論集 同論集刊行会
- 立木宏明 1997「二又遺跡 堅岩遺跡 ガラハギ遺跡」朝日村文化財報告書11 朝日村教育委員会
- 土橋由理子 2003「円山遺跡」新潟県文化財調査報告書121 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 中村孝三郎 1961「越後の石器」長岡市立科学博物館研究調査報告4 長岡市立科学博物館
- 中村孝三郎 1965「中部地方北部の先土器時代」「日本の考古学 I 先土器時代」河出書房新社
- 新潟県 1983「新潟県史 資料編1 原始・古代1」新潟県
- 羽石智治・会田容弘・須藤隆 2004「最上川流域の後期旧石器文化の研究1 上ミ野A遺跡第1・2次発掘調査報告書」東北大学大学院文学研究科考古学研究室
- 藤塚 明 1982「新潟県五泉市薬師堂遺跡の踏査」「クロッカス」6 クロッカス同人会
- 藤原妃敏 1979「東北地方における石刀技法を主体とする石器群研究の問題点」「考古学ジャーナル」167 ニュー・サイエンス社

- 古川知明 1982「角神遺跡採集の石器九例」『新潟県史研究』12 新潟県
- 麻柄一志 2000「杉久保石器群」『旧石器考古学事典』学生社
- 森先一貴 2004「杉久保型尖頭形石器の成立とその背景－東北日本日本海側石器群の批判的再検討－」『考古学』Ⅱ 安斎正人
- 森先一貴 2005「杉久保石器群の南北地域差」「津南段丘に暮らした氷河期の狩猟民」津南学叢書第1集 津南町教育委員会
- 山本 克 2003「中魚沼郡津南町内旧石器時代遺跡の編年と対比」「第15回 長野県旧石器文化研究交流会－発表資料－」長野県旧石器文化研究
- 山本 克 2005「津南町内出土の杉久保石器群の様相把握」「津南段丘に暮らした氷河期の狩猟民」津南学叢書第1集 津南町教育委員会

縄文時代中期後葉～後期初頭の炉の変遷

—新潟県阿賀町 北野遺跡の炉の検討—

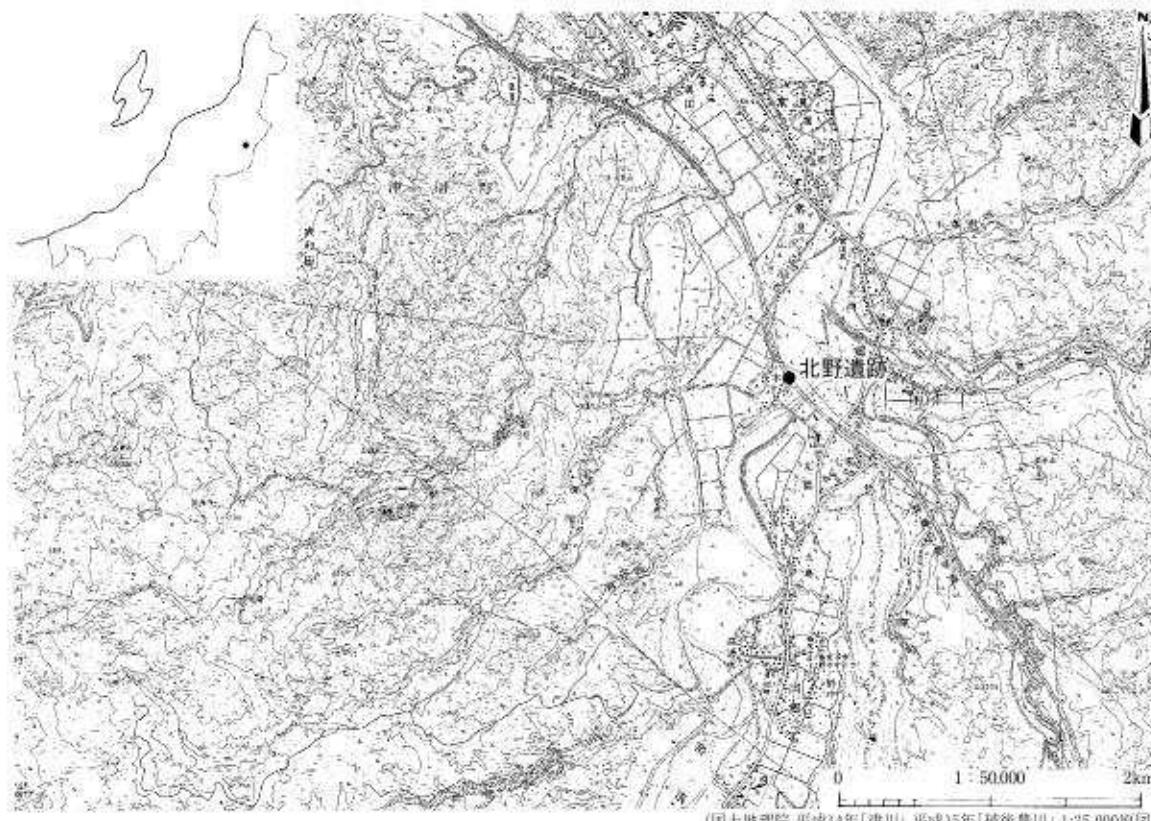
高橋保雄

1 はじめに

北野遺跡は東蒲原郡阿賀町（旧上川村）大字九島字長木3,429番地ほかに所在する（第1図）。平成5～7年度の発掘調査によって、鹿瀬軽石質砂層を挟んで下層からは縄文時代早期中葉～前期末葉、上層からは縄文時代中期前葉～後期中葉、古代、中世、近世の遺構・遺物を検出した。発掘調査報告書は、下層が平成14年度〔高橋ほか2003〕、上層が平成16年度〔高橋ほか2005〕に刊行済みである。

上層、下層ともに縄文時代の集落が複数調査されたため、遺構・遺物は膨大である。中でも縄文時代中期末葉（大木10式古段階）～後期初頭（三十稻場式古段階）の拠点集落の約半分を調査したため、これに伴う遺構・遺物が最も多い。上層の遺構のうち、住居は64基中、縄文時代中期前葉3基、中期後葉3基、後期中葉2基、中世？2基を除く、54基がこの時期の所産である。ただし、住居は掘り込みを持たないものが多いため、炉の検出を持って住居と認定したものが極めて多い。また、重複が著しいため、柱穴の組合せを確定できたものも少ない。加えて現地表面から遺構確認面までの土層が薄いため、搅乱が多く遺存状況は悪い。

上層の発掘調査報告書では事実記載の遺構数・資料数が多いため、まとめ簡単に遺構の分布と集落の



第1図 北野遺跡位置図

変遷を述べただけである。ここでは縄文時代中期末葉～後期初頭の集落に先行する中期後葉の集落を加え、北野遺跡における中期後葉～後期初頭の炉の特徴と変遷を考えてみたい。

2 阿賀野川流域の炉の編年研究

北野遺跡を含む当地域の中期後葉～後期初頭の炉の形態として、複式炉が挙げられる。複式炉はその形態的特徴や地域的分布から多くの論考があり、内容も多岐にわたる。ここでは本文に関係する阿賀野川流域や福島県南部の炉について、主に編年的な研究の概略を記述する。

「複式炉」は昭和32年福島県飯野町白山住居跡の発掘調査で名づけられたもの〔梅宮1960〕で、当初は検出例の多い福島県を中心に研究されていた。その定義は、埋め甕炉と石組炉及び前庭部の3つの構造がセットになって構成されるもの〔梅宮1972〕とされている。その後、複式炉が広く紹介されたことから〔目黒1982〕、福島県以外でも集成・検討がなされるようになった。新潟県内では増子氏、田辺氏が集成を行った。増子氏は信濃川上流域から阿賀野川流域にかけての複式炉を集成し、両地域の複式炉の形態差、地域差を明らかにした。また、阿賀野川流域は東北地方南部の複式炉と同様な様相を示すとし、大木8 b式期の複式炉の発生と粗形→大木9式期の大型化→大木10式期の小型化という時期的変遷を追及した〔増子1988〕。同じように魚沼地方と北蒲原地方の複式炉を集成した田辺氏は両地域の複式炉の違いを明らかにし、大木9式併行期から大木10式併行期の両地域の石組みの簡素化、大きさの小型化を指摘した〔田辺1988〕。しかし、両氏とも複式炉に後続する炉については何も述べていない。これは中期末葉から後期初頭に連続する遺跡が少ないとによるものと思われる。一方、阿賀野川流域と関係の深い東北地方南部では、鈴鹿氏が集成を行なった。それによれば、大木8 b式から9(古)式の発生期、大木9(新)式の発達期、大木10(古)式の安定期、大木10(中)式の退化期と変遷を明らかにした。さらに大木10(新)式期に複式炉の消滅と石圓炉の発生を示唆した〔鈴鹿1986〕。

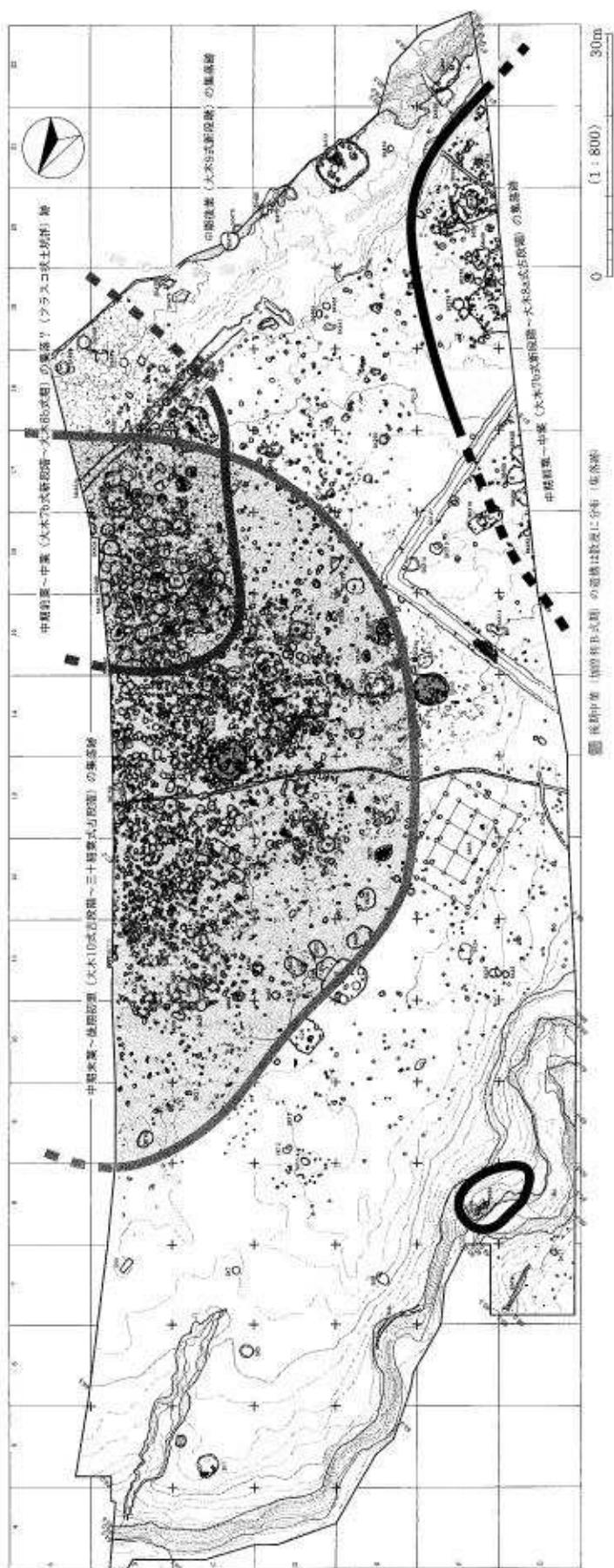
この後、阿賀野流域の複式炉についての論考は少なくなるが、近年、県内の縄文時代の炉を集成した増子氏は、後期前半の炉として地床炉、土器埋設炉、石組炉を挙げている〔増子1999〕。また、阿部氏は資料の増加した県内の複式炉の分布を4地域に分け、その変遷を詳述している〔阿部1999〕。2005年福島県で行われた複式炉のシンポジウムでは、それまで県内検出の複式炉を地域別に集成し、編年を提示している〔阿部・寺崎・佐藤2005〕。それによれば、複式炉の変遷はこれまでとほぼ同様であるものの、大木10式新段階まで複式炉、これに後続する炉として方形石組炉を提示している。

このように当地域における中期後葉から後期初頭の炉は、複式炉の発生→発展→安定→退化→消滅=土器埋設石組炉の発生という変遷で捉えられている。

3 炉の特徴

(1) 中期後葉・中期末葉～後期初頭の炉（住居）の分布

北野遺跡（上層）の発掘調査報告書〔高橋ほか前掲〕によれば、縄文時代の集落は第2図のように中期前葉（大木7 b式新段階）～中葉（大木8 a式古段階）の集落は、調査区南西部の17～21Fグリッドから法線外に延びている。調査区外の南西部に環状または馬蹄形の集落が広がるものと推定できる。中期後葉（大木9式新段階）の集落跡は調査区南東部の20Cグリッドより南東側に延びている。同じく調査区外の南部に環状または馬蹄形の集落が広がっていたものと推定できる。しかし、この部分は現在、常浪川が流れている。したがって、集落は常浪川に侵食され、調査区以外は既に消滅している。



第2図 北野遺跡（上層） 時期別 集落分布図

一方、中期末葉～後期初頭の集落は9～17・B～Eグリッドから東側の法線外に延びている。法線外は同じく磐越自動車道建設に伴う長木集落の墓地移転先のため、平成6年度に旧上川村教育委員会が発掘調査を実施している。報告書は刊行されていないが、調査時の実見と照らし合わせると、環状ないしは馬蹄形を呈する集落と推定できる。したがって、本調査範囲における炉（住居）の分布は9～17・B～Eグリッド内で、半円状（環状）に分布しているといえる。炉はすべて土器埋設複式炉、土器埋設石組炉で占められている。それぞれは、分布に偏りが認められず、両者が混在して分布する。この集落に伴う土器は大木10式古段階（中期末葉）～大木10式新段階～三十稻場式古段階ではば占められる。前述の炉の編年研究に合わせれば土器埋設複式炉、土器埋設石組炉は連続した同一集落内での変遷として捉えることが可能である。

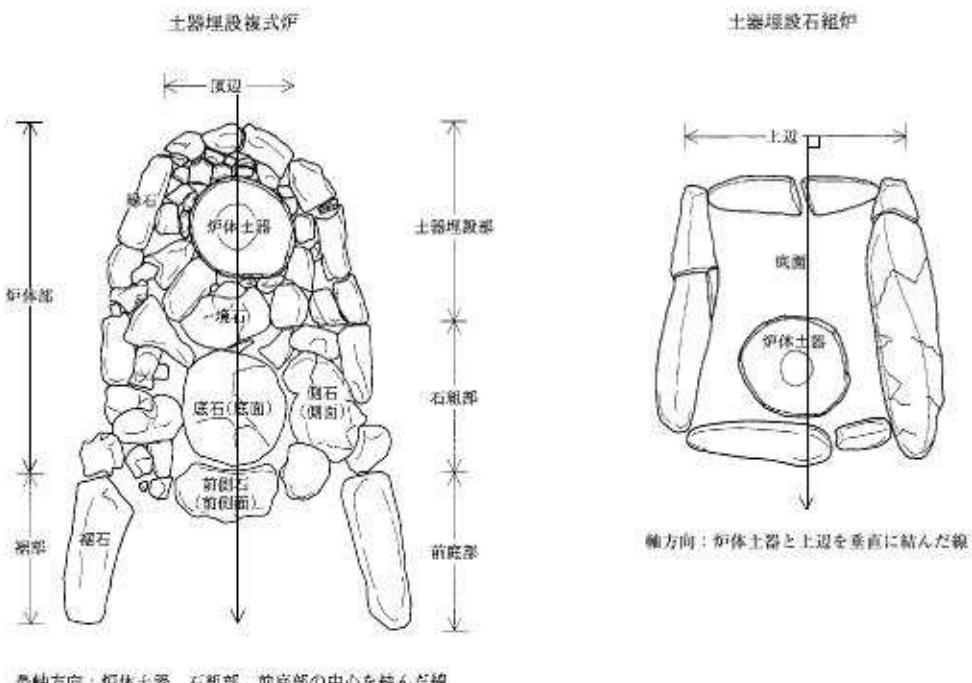
なお、後期中葉の住居は2基検出されているが、13C、14Fグリッドに散布している。

（2）炉の主軸方向

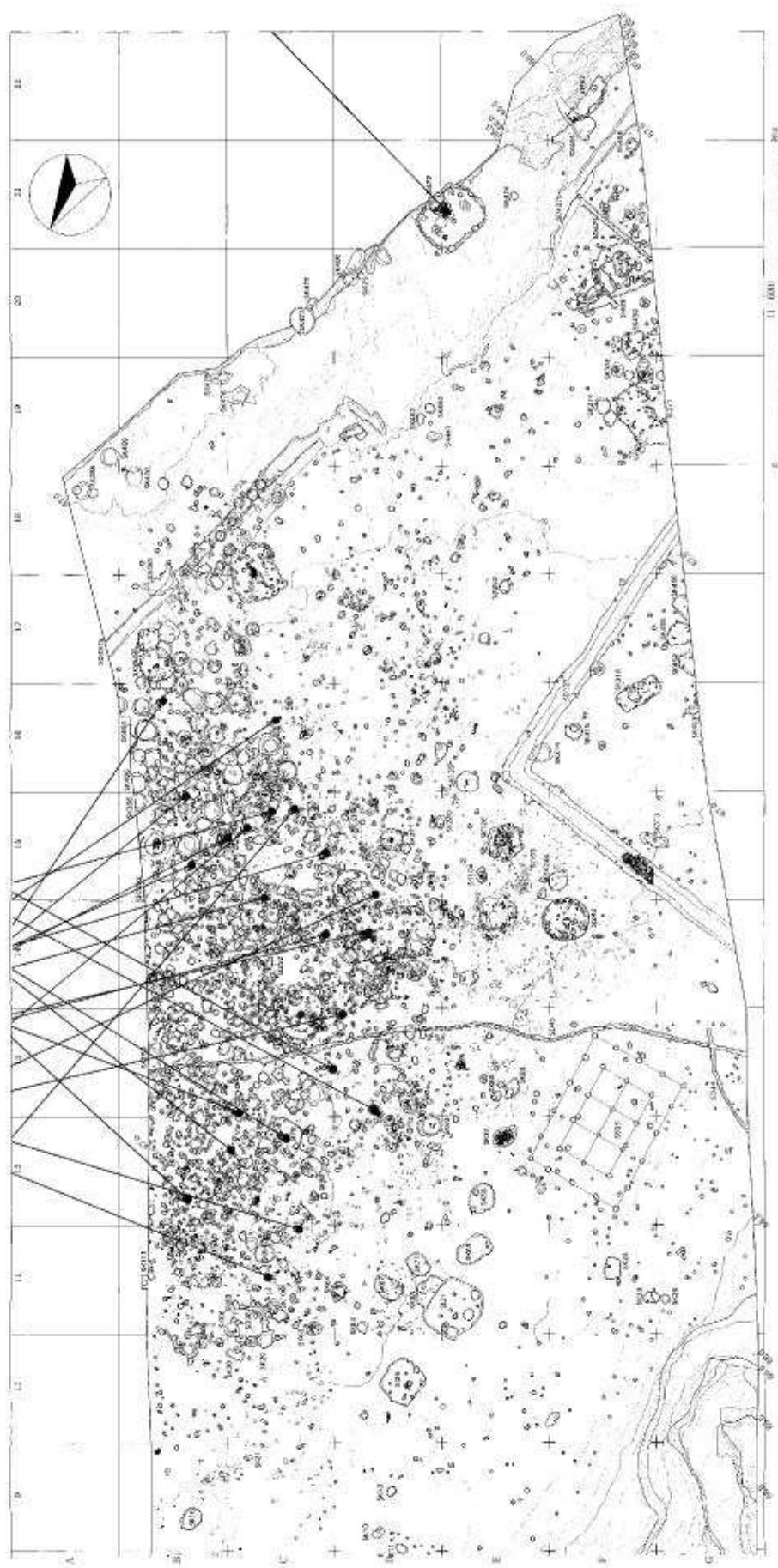
中期後葉～後期初頭に見つかった住居は、炉の有無にかかわらず57基である。このうち炉の見つかっていない住居は2基のみである。炉の形態は、大きく土器埋設複式炉と土器埋設石組炉に区分される。内訳は土器埋設複式炉31基、土器埋設石組炉23基、不明3基である。

主軸方向を観察する前に、まず主軸方向の求め方について考えてみたい。土器埋設複式炉は一般的に土器埋設部、石組部、前庭部からなり、ほぼ左右対称に構築される。これらの部位の中心を結んだ直線を長軸方向とし、主軸方向とした。同じく土器埋設石組炉は、長大礫を方形に組み、炉体土器をいずれかの辺に近づけ、または接して埋設している。したがって、炉体土器と炉の上辺からの垂線を結んだ直線を軸（炉軸）方向とし、主軸方向とした。

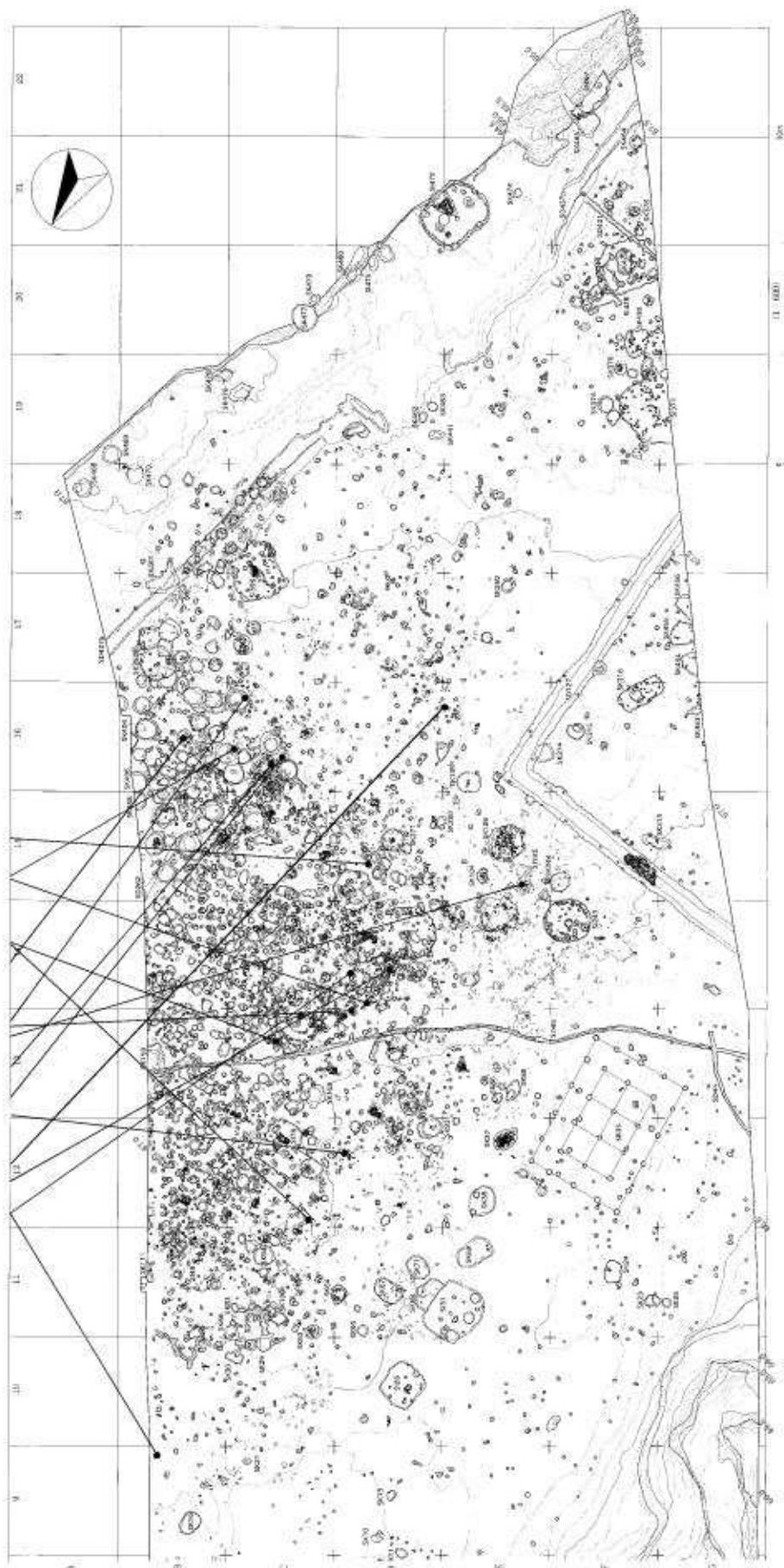
なお、土器埋設複式炉、土器埋設石組炉の部位名称・主軸方向は、第3図のとおりである。



第3図 土器埋設複式炉と土器埋設石組炉の主軸方向の決め方と部位名称



第4図 土器埋設複式炉の主軸方向



第5図 土器埋設石組炉の主軸方向

A 土器埋設複式炉の主軸方向

31基中、主軸方向を求めることができたものは23基であり、第4図に図示した。1基(SI472)を除き、いずれも北東から東方向に向いている。詳細に見ると13列、14列グリッドを境に、これより北西側にあるものはほぼ東方向に、南側にあるものはほぼ北東方向に向いている。つまり主軸方向は環状集落の内側(広場?)を向いていると言えよう。

また土器埋設複式炉は土器埋設部側を環状集落の外側に、石組部・前庭部を内側に向いている。環状集落の内側を中心と考えるならば、石組部・前庭部が複式炉の手前側であり、土器埋設部が向こう側となる。

これらの主軸方向と異なるSI472は、中期後葉の堅穴住居で、大型の土器埋設複式炉を持つ。土器型式で見ると大木9式新段階である。既述のように中期後葉の集落跡は、20Cグリッドから南東側に延び、同じく調査区外の南部に環状または馬蹄形の集落が広がるものと推定できる。現常浪川の侵食により消滅しているが、SI472の土器埋設複式炉は、中期後葉の集落の内側(広場?)に主軸方向を向いているものと推定できる。

このようにSI472の炉の位置、主軸方向の違いから、中期後葉の集落が中期末葉～後期初頭には明らかに移動したものと推定できる。

B 土器埋設石組炉の主軸方向

23基中、主軸方向を求めることができたものは16基であり、第5図に図示したとおりである。すべて北東から東方向に向いている。環状集落の北西から西側に存在すると推定される炉はほぼ東方向に、同様に南西から南に存在すると推定される炉はほぼ北西方向に向いている。したがって、土器埋設複式炉と同じく主軸方向は集落の内側を向いている。

また、土器埋設石組炉の埋設土器はすべて集落の内側寄りに埋設されている。前述のように集落の内側を中心と考えるならば、埋設土器が埋設されている側が石組炉の手前側であり、反対側が向こう側となる。

以上、土器埋設複式炉と土器埋設石組炉の主軸方向から住居の炉は、集落の内側(広場)を意識して構築されたものといえる。

4 土器埋設複式炉、土器埋設石組炉の分類

住居の炉は中期後葉～後期初頭の連続する時期の中で土器埋設複式炉、土器埋設石組炉で占められている。したがって、ある時期に土器埋設複式炉から土器埋設石組炉へと大きく炉の構造を転換していると考えられる。分類にあたっては、まず土器埋設複式炉と土器埋設石組炉に分け、土器埋設複式炉は前庭部・裾石の有無と裾石の碟の形状、土器埋設石組炉は使用碟の形状と並べ方により分類した。

A類 土器埋設複式炉で前庭部または裾石が認められるもの。大きさ・使用碟の形状から次のように細分される。

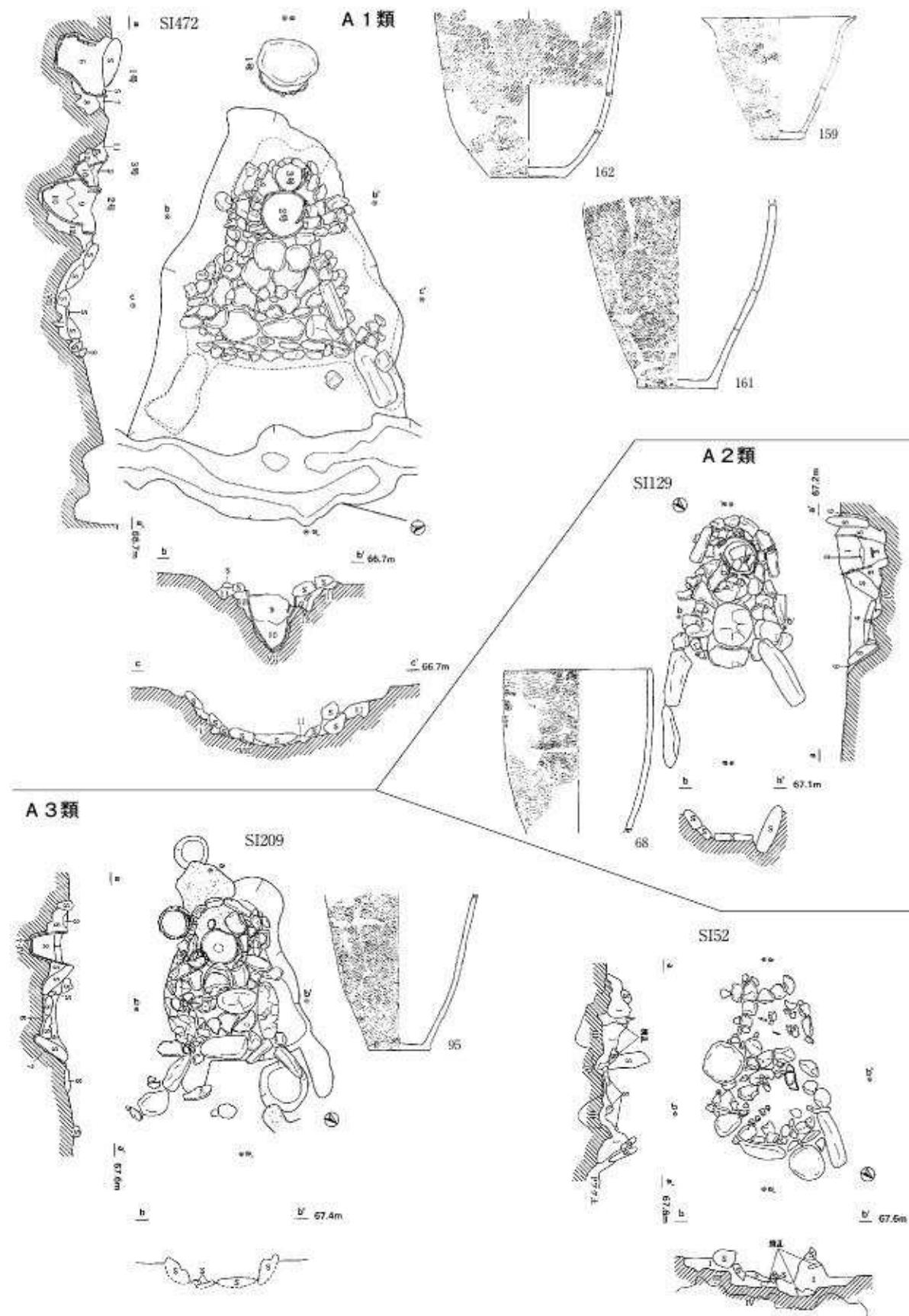
A 1類 (第6図SI472) 大型の土器埋設複式炉である。長さ・幅ともに他の複式炉と比べ、著しく大きい。

前庭部も広く、裾石も大型の長大碟を使用する。

A 2類 (第6図SI129) 炉の形状はA 1類に近似するが、小型になる。逆に使用する碟は、A 1類と同様に大型の碟を用いるため、見た目はA 1類に比べやや粗雑に見える。

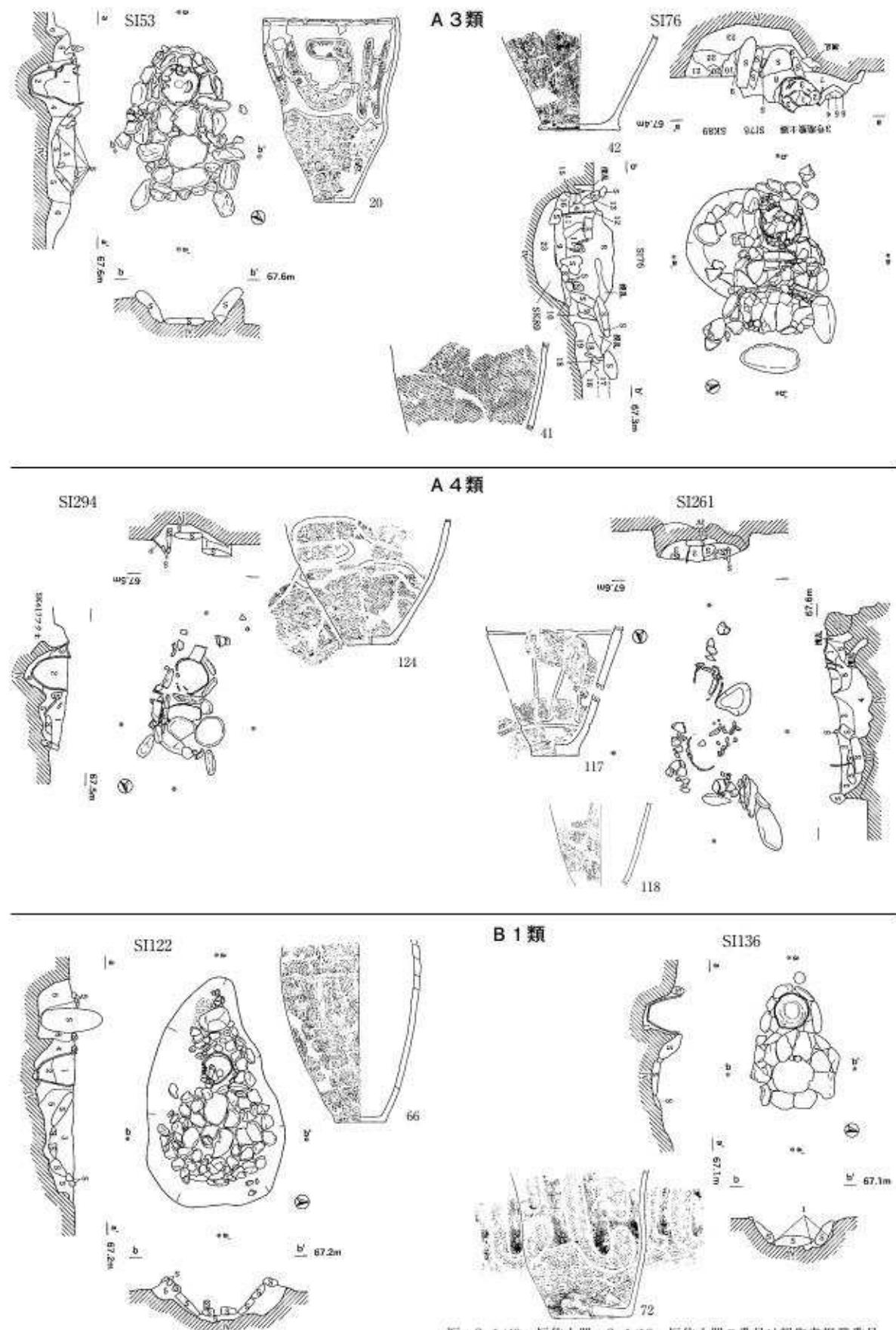
A 3類 (第6・7図SI209・52・53・76) 土器埋設部・石組部の大きさはA 2類と同程度であるが、前庭部が狭く、裾石も小さい。

A 1類は土器埋設部から石組部・前庭部に向かい、幅を大きく広げるが、A 2・A 3類はそれほど広げない。



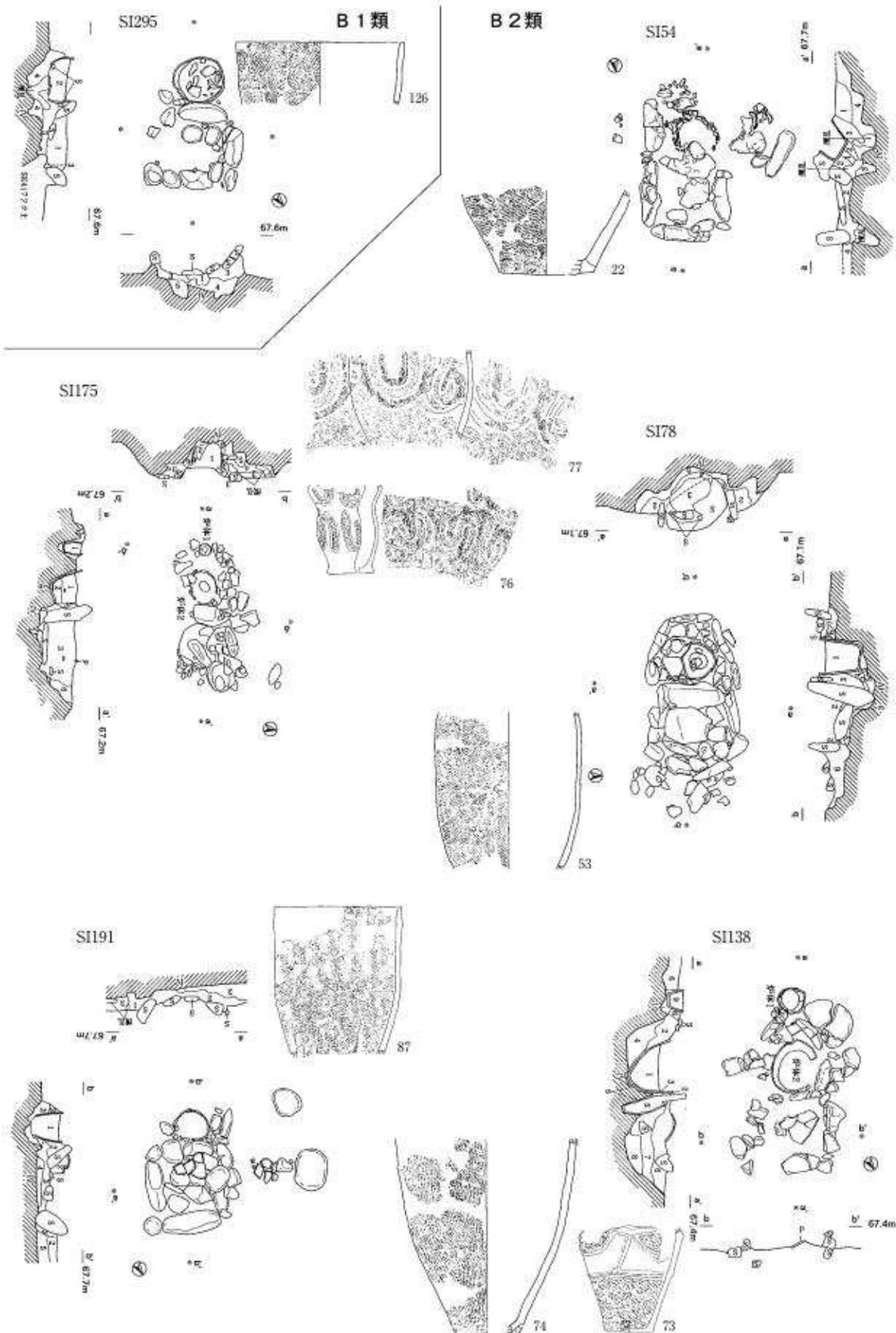
炉 : S=1/40、炉体土器 : S=1/10、炉体土器の番号は報告書掲載番号

第6図 炉分類別集成図 (1)

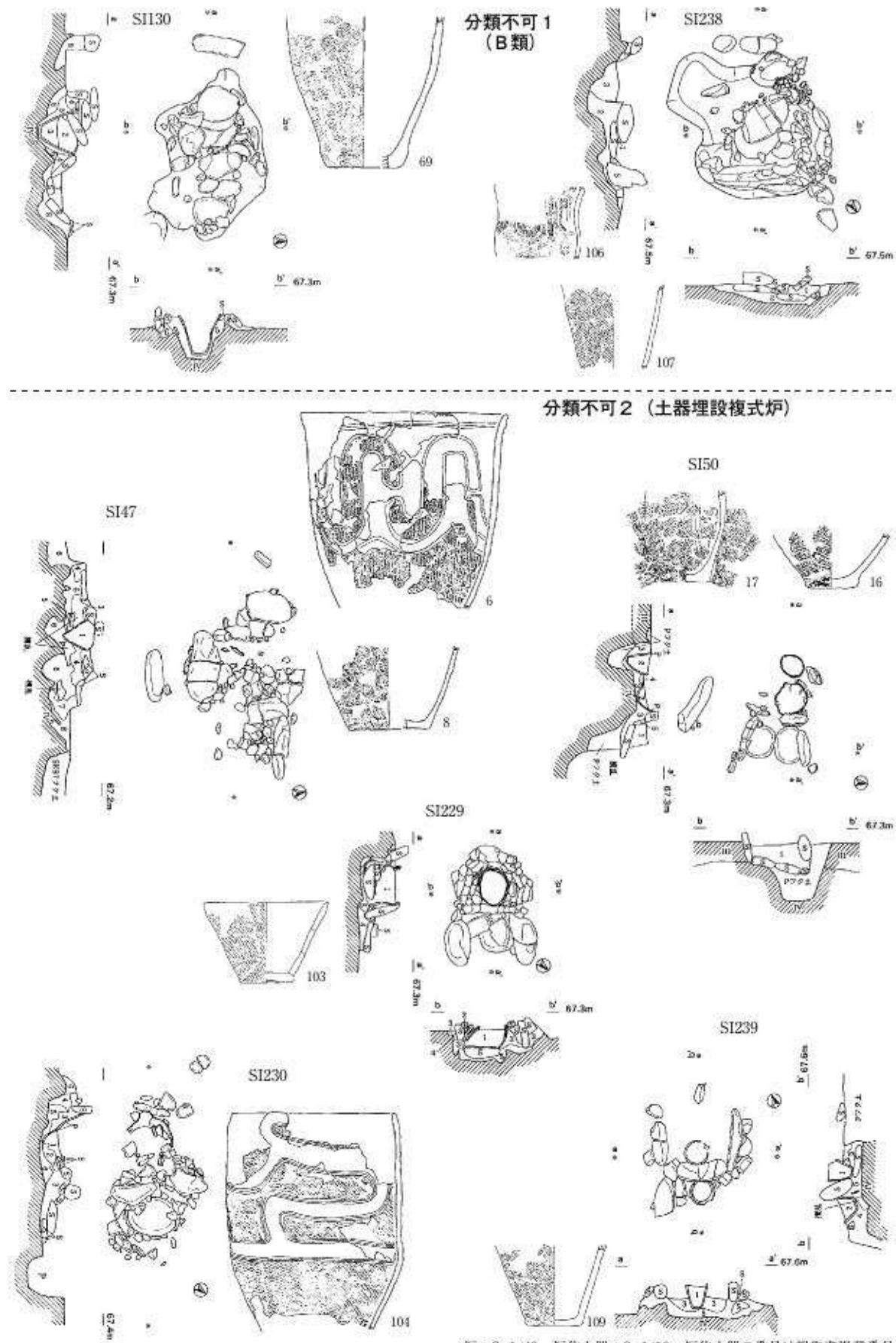


炉: S=1/40、炉体土器: S=1/10、炉体土器の番号は報告書掲載番号

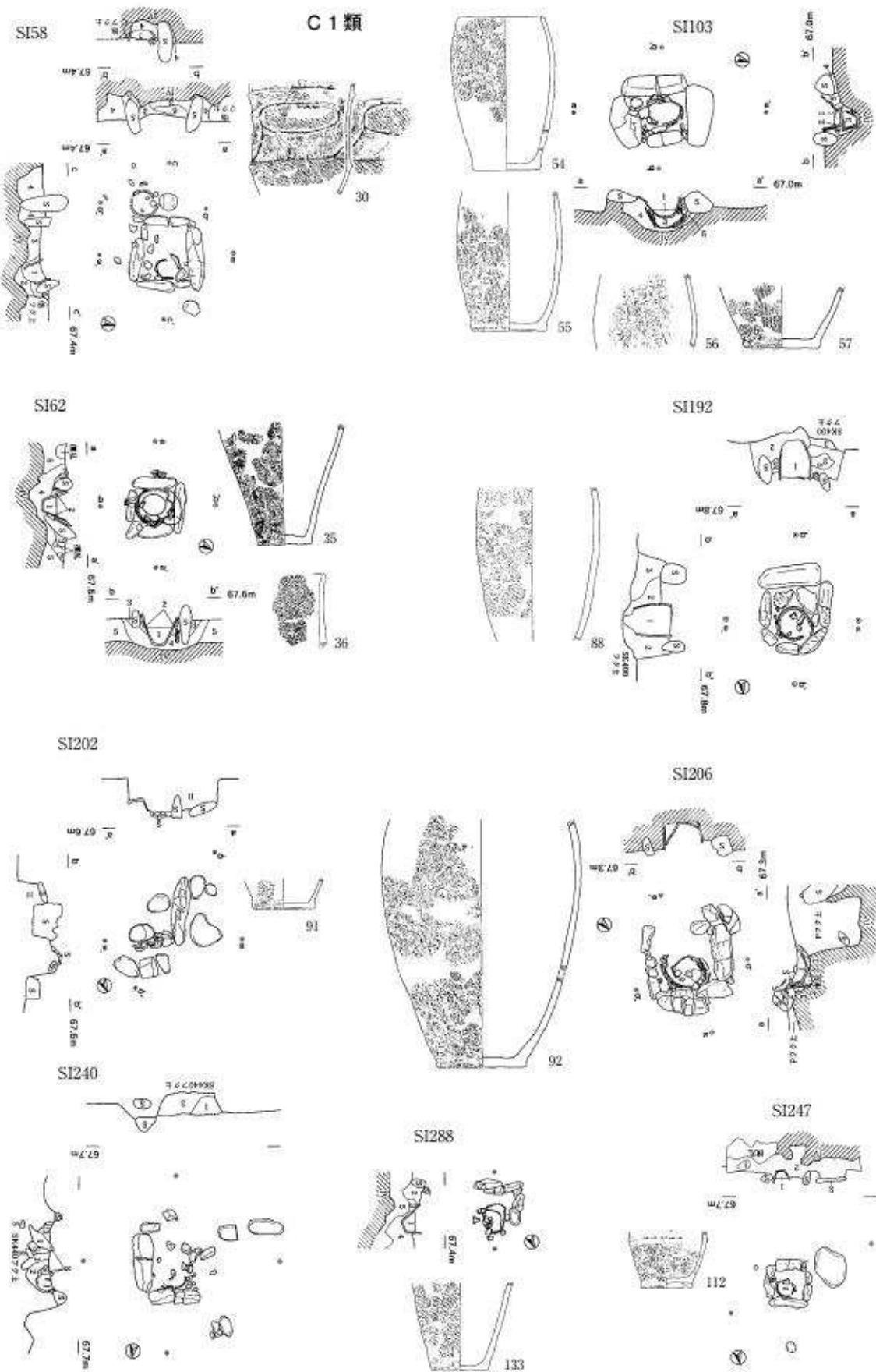
第7図 炉分類別集成図 (2)



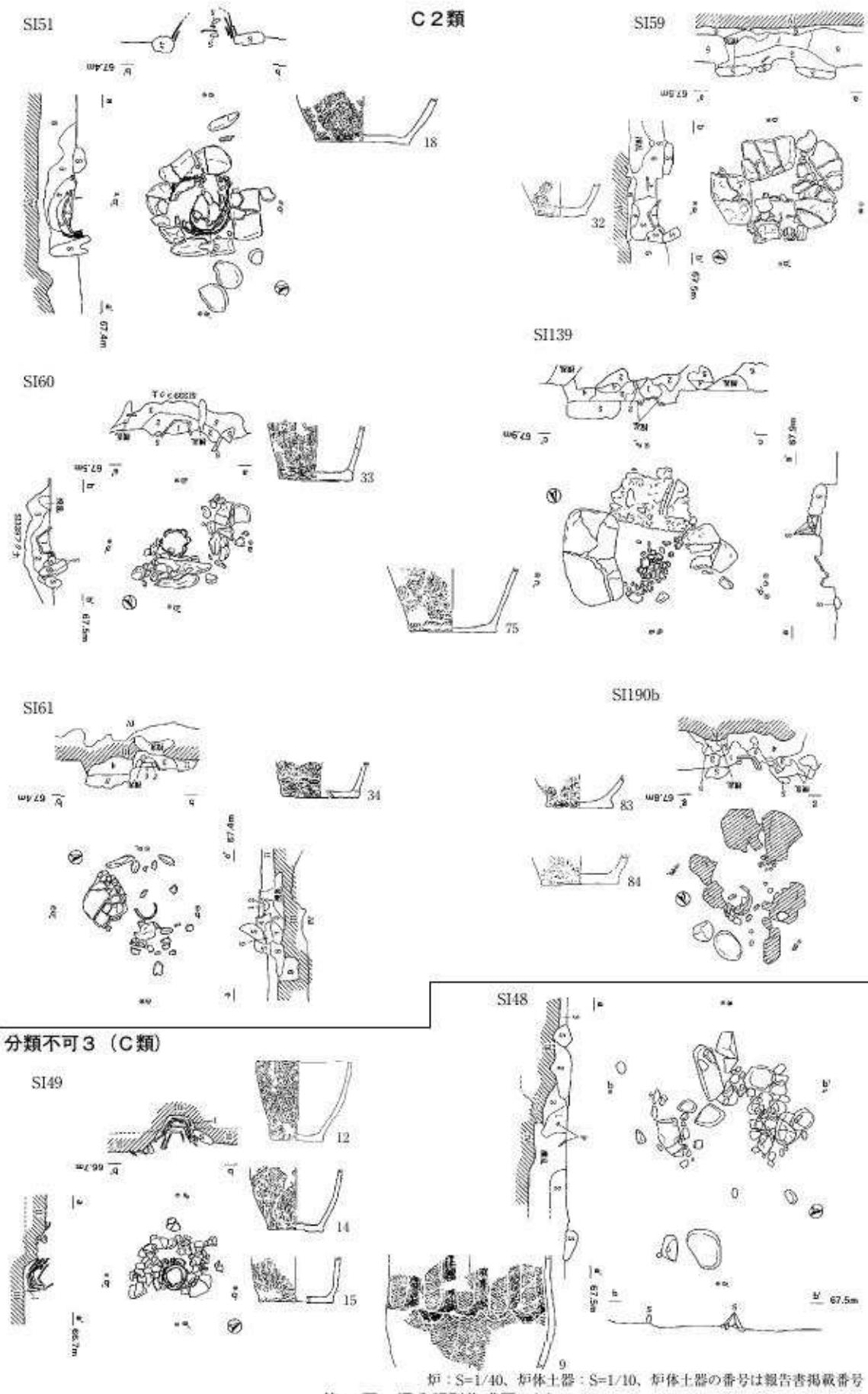
第8図 炉分類別集成図 (3)



炉 : S=1/40、炉体土器 : S=1/10、炉体土器の番号は報告書掲載番号
第9図 炉分類別集成図 (4)



第10図 炉分類別集成図 (5)
炉: S=1/40、炉体土器: S=1/10。炉体土器の番号は報告書掲載番号



またA 1～A 3類の土器埋設部は、外側にやや長めの縁石が巡り、土器との間に細かな碟が充填される。

A 4類 (第7図SI294・261) A 2・A 3類に比べ、さらに小型になり、つくりも簡略となる。用いる碟はやや大型の扁平碟で組まれるため、碟の数も少なくなる。土器埋設部は、外側にやや長めの縁石が一重に巡るだけとなる。

B類 土器埋設複式炉で前庭部及び裾石が認められないもの。石組部の形状から次のように細分される。

B 1類 (第7・8図SI122・136・295) 土器埋設部に比べ、石組部の幅が大きいもの。したがって、土器埋設部から石組部に向かって幅を広げる「放物線形」となる。比較的細かな碟を丁寧に敷き詰めるものと、大型の碟を敷き詰めたものがある。

B 2類 (第8図SI54・175・78・191・138) 土器埋設部と石組部の幅がそれほど変わらず、いわゆる「寸胴形」になる。石組部は方形に組まれ、箱形となる。比較的大型の碟を敷き、簡略化したものである。

分類不可 1類 (第9図SI130・238) 搾乱、破壊を受け、B類とのみわかるもの。

分類不可 2類 (第9図SI47・50・229・230・239ほか8基) 後世の搾乱、破壊を受け、土器埋設複式炉とのみわかるもの。

C類 土器埋設石組炉である。炉体土器は集落の内側寄りに埋設されている。

C 1類 (第10図SI58・103・62・192・202・206・240・288・247) 集落の内側寄りの碟は扁平碟を立て、ほかの3辺も扁平状の碟を立てて使用、または棒状碟を並べる。

C 2類 (第11図SI51・59・60・139・61・190 b) 集落の内側寄りは扁平碟を立て、ほかの3辺は扁平状の碟を立てずに横に並べる。

分類不可 3類 (第11図SI49・48ほか6基) 土器埋設石組炉とのみ判断できるもの。

分類不可 4類 (1基) 炉とのみ判断できるもの。

5 分類別に見た炉の時期と新旧関係

それぞれの炉の時期と新旧関係をまとめると、第1・2表のとおりとなる。なお、中期後葉～末葉の土器編年観は大木9式・10式をそれぞれ古段階（古相）と新段階（新相）の2区分し〔本間1989・1990 a・1990 b、山岸1991〕、後期初頭の土器編年観は三十稻場式を古段階・新段階の2区分した〔田中1985・1989〕。

全体的に見れば土器埋設複式炉（A・B類）と土器埋設石組炉（C類）の新旧関係は、土器埋設複式炉（A・B類）が古く、土器埋設石組炉（C類）が新しいことは明らかである。さらに分類ごとに見ていくといくつかの前後関係が認められる。

A 1類 SI472の1基のみであり、他の遺構との新旧関係を持たない。しかし、炉体土器から大木9式新段階に所属する。大きさも本遺跡の炉の中ではもっとも大きい。大木9式新段階では土器埋設複式炉が最も発達し、規模が大きくなる時期である〔鈴鹿前掲・増子前掲〕ことからも裏付けられる。

A 2類 SI129の1基のみである。炉体土器は粗製土器である。新旧関係からC 1類・C 2類より古くなる。平面形はA 1類に近似するが、小型の複式炉である。大木10式古段階～三十稻場式古段階の集落において最も古い炉形態と推定される。したがって、発掘調査報告書では炉体土器が粗製土器のため、土器埋設複式炉の形態から中期末葉の時期と記述したが、大木10式古段階に所属するものと思われる。

A 3類 SI209・52・53・76の4基が検出されている。A 2類に比べて、さらに前庭部が狭く、裾石も小さく短いことから、A 1・A 2類の小型・簡略として捉えることができる。個々の遺構で、SI53の炉体

分類	遺構名	炉の時期	新旧関係（古→新）	備 考
A 1	SI472	大木 9式新段階	なし	
A 2	SI129	中期末葉	SI129→SI58 (C 1類) →SI59 (C 2類) →SI228 (加曾利B 2式)	
A 3	SI209	中期末葉	SI209→204号集石 (中期末葉～後期初頭)・14D-1号 (三十幅場式古段階)・2号 (三十幅場式古段階)・3号 (大木10式新段階)・13号 (中期末葉～後期初頭)・14号 (三十幅場式古段階) 埋設土器	
A 3	SI52	中期末葉	不明	
A 3	SI53	大木10式古段階	不明	
A 3	SI76	中期末葉	SK89 (大木10式古段階) →SI76→12B-3号埋設土器 (三十幅場式古段階)	
A 4	SI294	大木10式新段階	SK417 (大木10式古段階) →SI294	
A 4	SI261	加曾利E 4式系	SI261→237号集石 (後期初頭)	
B 1	SI122	大木10式古段階	SI122→SK123 (中期末葉～後期初頭)・128 (三十幅場式古段階)・12D-2号埋設土器 (後期初頭)	
B 1	SI136	大木10式古段階	SI136→SI51 (C 2類)	
B 1	SI295	中期末葉	SK417 (大木10式古段階) →SI295→SI54 (B 2類)・190a (不可 3類)	
B 2	SI54	大木10式	SI295 (B 1類) →SI54	
B 2	SI175	大木10式古段階	SI175→SK160 (中期末葉～後期初頭)・171 (中期末葉～後期初頭)	
B 2	SI78	大木10式	SI78→SK80 (中期末葉～後期初頭)	
B 2	SI191	大木10式	なし	
B 2	SI138	大木10式新段階	SI210 (不可 2類) →SI138	
不可 1	SI120	中期末葉	なし	B類
不可 1	SI238	大木10式古段階	なし	B類
不可 2	SI47	大木10式古段階	不明	複式炉、敷石住居
不可 2	SI50	加曾利E 4式系	SI50→SK153 (加曾利E 4式系?)	複式炉
不可 2	SI229	中期末葉	SI229→14C-1号埋設土器 (大木10式古段階)	複式炉
不可 2	SI230	大木10式古段階	SK301 (中期末葉) →SI230→14C 2号 (中期末葉～後期初頭)・3号 (大木10式)・7号 (中期末葉～後期初頭)・9号 (中期末葉～後期初頭) 埋設土器	複式炉
不可 2	SI239	中期末葉	SK388 (中期前葉～中葉) →SI239	複式炉
不可 2	SI73	中期末葉	SK82 (中期末葉) →SI73	複式炉、平面図掲載せず
不可 2	SI74	中期末葉	不明	複式炉、平面図掲載せず
不可 2	SI151	中期末葉	不明	複式炉、平面図掲載せず
不可 2	SI208	中期末葉	SI208→SI60 (C 2類)・14D-12号埋設土器 (中期末葉～後期初頭)	複式炉、平面図掲載せず
不可 2	SI210	中期末葉	SK278 (中期前葉～中葉、中期末葉) →SI210→SI38 (B 2類)・SK337 (中期末葉～後期初頭)	複式炉、平面図掲載せず
不可 2	SI251	中期末葉	SI251→SI230 (不可 2類)	複式炉、平面図掲載せず
不可 2	SI252	大木10式古段階	なし	複式炉、平面図掲載せず
不可 2	SI339	大木10式古段階	SI339→SI206 (C 1類) →SI60 (C 2類)	複式炉、平面図掲載せず
C 1	SI58	大木10式新段階	SI129 (A 2類) →SI58→SI59 (C 2類)	
C 1	SI103	大木10式新段階	SI103→12D-9号集石 (後期初頭)	
C 1	SI62	後期初頭	不明	
C 1	SI192	後期初頭	SK400 (大木7b式新段階) →SI192	
C 1	SI202	後期初頭	なし	
C 1	SI206	後期初頭	SI206→SI60 (C 2類)・203号集石 (後期初頭)	
C 1	SI240	後期初頭	SK440 (中期前葉～中葉) →SI240→237号集石後期初頭)	
C 1	SI288	後期初頭	SK434 (中期前葉～中葉) →SI288	
C 1	SI247	大木10式新段階	SI247→16E-3号埋設土器 (中期末葉～後期初頭)	
C 2	SI51	後期初頭	SI136 (B 1類) →SI51	
C 2	SI59	後期初頭	SI129 (A 2類) →SI58 (C 1類) →SI59	
C 2	SI60	後期初頭	SI206 (C 1類)・208 (不可 2類)・339 (不可 2類) →SI60	
C 2	SI139	後期初頭	なし	
C 2	SI61	後期初頭	なし	
C 2	SI190 b	後期初頭	SK341 (中期前葉～中葉) →SI190 b	
不可 3	SI49	後期初頭	なし	C類
不可 3	SI48	大木10式新段階	SK84 (中期末葉～後期初頭)・85 (中期末葉～後期初頭)・112 (中期末葉)・113 (中期末葉)・11B-5号埋設土器 (三十幅場式古段階) →SI48	C類、柄鏡形敷石住居
不可 3	SI55	後期初頭	SK132 (中期末葉～後期初頭)・133 (中期末葉～後期初頭) →SI55	C類、掲載せず

第1表 炉の時期と新旧関係 (1)

分類	遺構名	炉の時期	新旧関係（古→新）	備 考
不可 3	SI72	後期初頭	なし	C類、掲載せず
不可 3	SI190 a	後期初頭	SK341（中期前葉～中葉）・344（中期末葉～後期初頭）・457（中期末葉～後期初頭）・458（中期末葉～後期初頭）→SI190 a	C類、掲載せず
不可 3	SI193	大木10式新段階	なし	C類、掲載せず
不可 3	SI201	後期初頭	SK287（中期末葉～後期初頭）・482（中期末葉～後期初頭）→SI201	C類、掲載せず
不可 3	SI366	後期初頭	なし	C類、掲載せず
不可 4	SI56	中期末葉～後期初頭	なし	掲載せず

第2表 炉の時期と新旧関係 (2)

土器は大木10式古段階期に比定される。SI209は他遺構との新旧関係で、大木10式新段階期・三十稻場式古段階期の埋設土器より古い。またSI76は大木10式古段階期の土坑より新しく、三十稻場式古段階期の埋設土器より古い。このように炉体土器や他の遺構との新旧関係から見ると、A 3類は大木10式古段階期から新段階期の範囲と推定される。しかし、A 3類よりさらに小型・簡略として見られるA 4類が大木10式新段階期に所属することから、A 3類は大木10式古段階期にはほぼ収まるものと考えられる。

A 4類 SI294・261の2基が検出されている。前庭部や裾石を持つA類の中では最も簡略なものである。SI294は炉体土器から大木10式新段階期に比定され、新旧関係では大木10式古段階期の土坑より新しい。SI261の炉体土器は加曾利E 4式系統であるが、胴部下端やや上位の横位沈線の区画から大木10式新段階〔本間前掲〕併行と考えられる。また後期初頭と推定される集石より古い。したがって、A 4類は大木10式新段階期に所属する。

B 1類 SI122・136・295の3基が検出されている。SI122の炉体土器は粗製土器であるものの、覆土から多くの大木10式古段階の土器が出土していることから、ほぼ大木10式古段階期に所属するものと推定できる。また、新旧関係では三十稻場式古段階期の土坑・埋設土器より古い。SI136は炉体土器から大木10式古段階期に比定され、新旧関係ではC 2類のSI51より古い。SI295は新旧関係で大木10式古段階期の土坑より新しく、B 2類のSI54、分類不可 3類（土器埋設石組炉とのみ判断できる）より古い。これらの関係からB 1類は大木10式古段階期にはほぼ所属する。

B 2類 SI54・175・78・191・138の5基が検出されている。すべて大木10式期に所属するが、炉体土器からSI175は大木10式古段階期、SI138は大木10式新段階である。新旧関係ではSI54がB 1類のSI295より新しい。したがって、大木10式古段階から大木10式新段階期に所属するものと考えられる。

C 1類 SI58・103ほか9基が検出されている。発掘調査報告書では詳細な時期が断定できないため、多くは炉の形状から後期初頭とされている。個々の遺構では炉体土器からSI58・103・247が大木10式新段階期に比定され、SI202・206は炉体土器の地文の撚糸文からほぼ大木10式新段階期以降と推定される。新旧関係はSI58がA 2類より新しい。逆にSI58・206がC 2類より古く、またSI103・206・240が後期初頭と推定される集石遺構より古くなっている。このようなことからC 1類はA類よりも新しく、C 2類よりも古くなり、大木10式新段階期～三十稻場式古段階期にかけて構築されたものと考えられる。

C 2類 SI51・59・60ほか6基が検出されている。発掘調査報告書では詳細な時期が断定できないため、多くは炉の形状から後期初頭とされている。個々の遺構ではSI51・60・139・61・190 bは、炉体土器の地文の撚糸文からほぼ大木10式新段階期以降と推定される。新旧関係では重複関係のないSI139・61を除き、最も新しい炉の形態となっている。特にC 1類より新しいことから三十稻場式古段階期に所属すると考えられる。

分類不可 1類はB類の土器埋設複式炉とわかるもので、SI238は炉体土器から大木10式古段階期に比定されている。2類は土器埋設複式炉とのみわかるもので13基検出されている。炉体土器からSI230・252・339が大木10式古段階期、SI50が加曾利E4式系統に比定される。他の遺構との新旧関係ではC類より古くなっている。3類は土器埋設石組炉とのみ判断できるもので、8基検出されている。炉体土器からSI48・193が大木10式新段階期に比定される。

6 炉の変遷

以上、炉の時期と他の遺構との新旧関係から得られた分類別の所属時期をまとめると第12図のようになる。土器埋設複式炉は大木8b式新段階期～9式古段階期に発生・定着し、9式新段階期に発展する〔増子前掲・鈴鹿前掲・阿部前掲〕。A1類はこの段階に相当する。したがって、炉の規模も大きく、比較的小型の碟をていねいに敷き並べている。A類は大木10式古段階期・新段階期を通して小型化・簡略化の傾向を示し、消滅する。しかし、簡略化される中で前庭部及び裾石が短く狭く（小さく）なるものの、SI294・61のように大木10式新段階期まで裾石は残る。

前庭部及び裾石を持たないB類は越後方面からの影響？からか大木10式古段階期に出現する。当初はSI122のように比較的小型の碟をていねいに敷き並べたと思われる。したがって、やや大型の碟を並べたSI136はやや新しい傾向と考えられる。また、B類も大木10式古段階期・新段階期を通して簡略化の傾向を示し、消滅する。形態も当初は平面形が放物線形・石組部の断面形が皿形から、平面形が寸胴形、石組部の平面形が箱形、断面形が「コ」の字形に変化する。敷き並べられた碟も大型化する。B類もこの形状で大木10式新段階期まで残る。なお、大木10式古段階期で土器埋設複式炉は小型化・簡略化の傾向を示すものの、B類の出現など多様な形状をとるようになる。

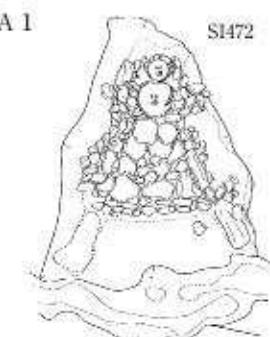
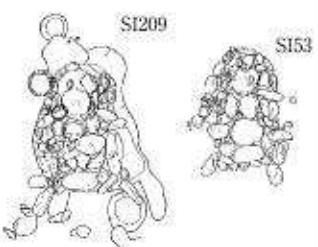
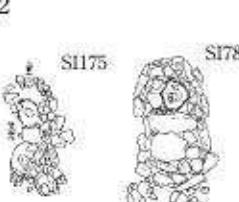
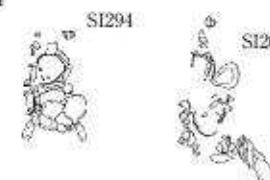
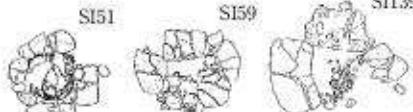
C類は土器埋設複式炉に替わり、大木10式新段階で新たに出現する。当初は扁平状の碟を立てる、または棒状碟を使用するが、三十稻場式古段階期では集落跡の内側寄りの炉の一辺を除き、扁平状の碟を敷き並べるC2類となる。大木10式新段階期における炉の形態の交代は、突然のようにも見えるが、大木10式古段階期以降の炉の小型化・簡略化の中で起こった現象であり、次のいずれかの過程で変化したものと考えられる。

- ① 小型化・簡略化の中で、箱形の石組部に土器埋設部の土器が入り込み、土器埋設石組炉が出現した。
- ② 小型化・簡略化の中で、土器埋設部のみが残って、土器埋設石組炉が出現した。この場合、集落の内側寄りの一辺に扁平碟が立てられるのは、土器埋設複式炉の土器埋設部と石組部を分ける境石の名残りとも考えられる。

7 まとめ

北野遺跡の中期後葉から後期初頭の集落に伴う住居は、中期後葉に伴うSI472を除き、掘り込みが極めて浅いまたは無いため、住居の規模や重複関係が判然としなかった。したがって、検出された炉に注目し、検討を加えてきた。これまでわかったことの要点を抜書きし、まとめとしたい。

- ① 中期後葉の住居、中期末葉～後期初頭の住居はそれぞれ別々に分布することから、集落の移動が認められる。中期末葉～後期初頭の住居その分布から同一集落で連続的に営まれている。
- ② 中期末葉～後期初頭の住居は、土器埋設複式炉と土器埋設石組炉が認められ、前者から後者への連続的な変遷が見られる。またいずれの炉も主軸方向が集落の中心部を向くように構築されている。

	A類	B類	C類
大木9式新段階期	A 1  SI472		
大木10式古段階期	A 2  SI129 A 3 	B 1  SI122 B 2  SI175 SI78	
大木10式新段階期	A 4  SI294 SI261	B 2  SI138	C 1  SI158 SI206 SI247
三十稻場式古段階期			C 2  SI151 SI159 SI139

第12図 炉変遷図

- ③ 土器埋設複式炉は、前庭部（裾石）の有無で大きく分類され、さらに規模（大形・小形）、簡略化の状態で細分される。土器埋設石組炉は石組部の碟の用い方で細分される。
- ④ それぞれの炉に炉体土器が認められ、炉体土器の時期や重複関係から分類ごとの存続時期が明らかである。
- ⑤ 北野遺跡では大木9式新段階期で発展した土器埋設複式炉が認められ、これ以降、大木10式古段階期・新段階期を通して小型化・簡略化の傾向を示し、消滅する。
- ⑥ 大木10式新段階期で土器埋設複式炉の消滅に替わり、土器埋設石組炉が出現する。
- ⑦ 土器埋設石組炉の出現は、土器埋設複式炉の小型化・簡略化の傾向の中で捉えられ、土器埋設複式炉の土器埋設部の独立、または土器埋設部と石組部の合体のいずれかと考えられる。
- ⑧ 土器埋設石組炉は、すべて集落の内側寄りの炉の一辺は扁平状の碟を立てられるが、他の三辺は当初、扁平状の碟を立てる、または棒状碟を並べ構築されていたが、三十稻場式古段階期から扁平状の碟を平に並べるようになる。

引用・参考文献

- 阿部昭典 1999 「複式炉の研究—複式炉の成立について—」『新潟考古学談話会会報 第20号』 新潟考古学談話会
- 阿部昭典・寺崎裕助・佐藤雅一 2005 「新潟県における複式炉の様相」『日本考古学協会「日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集」』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
- 梅宮 茂 1960 「飯野白山住居跡報告」「福島県文化財調査報告書第8集」福島県教育委員会
- 梅宮 茂 1972 「田地ヶ岡遺跡」「福島県文化財調査報告書第36号」日本道路公团・福島県教育委員会
- 押山雄三 2005 「複式炉研究のあゆみ」「日本考古学協会「日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集」』日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
- 鈴鹿良一 1986 「複式炉と敷石住居」「福島の研究 第1巻 地質・考古篇」清文堂出版株式会社
- 高橋保雄・荒谷伸郎 2003 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第119集 北野遺跡I（下層）』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 高橋保雄・高橋 保・児玉泰裕・齊藤 準 2005 『新潟県埋蔵文化財調査報告書 第141集 北野遺跡II（上層）』新潟県教育委員会・財團法人新潟県埋蔵文化財調査事業団
- 田中耕作 1985 「所謂三十稻場式土器の成立をめぐって」「信濃 第37巻第4号」信濃史学会
- 田中耕作 1989 「三十稻場式土器様式」「縄文土器大観4」 小学館
- 田辺早苗 1988 「新潟県の複式炉—魚沼地方を中心として—」「新潟考古学談話会会報 第1号」新潟考古学談話会
- 日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会 2005 「シンポジウム I 「複式炉と縄文文化」」「日本考古学協会2005年度福島大会シンポジウム資料集」日本考古学協会2005年度福島大会実行委員会
- 丹羽 茂 1989 「中期大木土器様式」「縄文土器大観1」 小学館
- 本間 宏 1989 「福島県における縄文後期前葉土器群の変遷」「シンポジウム 縄文の配石と集落」三春町教育委員会
- 本間 宏 1990 「東北地方南部における縄文後期前葉土器群の変遷過程」「第4回縄文セミナー 縄文後期の諸問題」縄文セミナーの会
- 本間 宏 1990 「第Ⅲ章考察 1. II群土器の編年的細分」「福島県文化財調査報告書 第232集 牧場山遺跡（第2次）・北向遺跡」福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター・日本道路公团
- 増子正三 1988 「新潟県における東北系複式炉について」「北越考古学 创刊号」北越考古学研究会
- 増子正三 1999 「炉址」「新潟県の考古学」新潟県考古学会
- 日黒吉明 1982 「住居の炉」「縄文文化の研究第8巻」雄山閣出版株式会社
- 山岸英夫 1991 「第3章考察 第1節縄文時代の遺物について Ⅲ群3類土器・Ⅲ群4類土器」「福島県文化財調査報告書 第243集 法正尻遺跡（下巻）」福島県教育委員会・財團法人福島県文化センター・日本道路公团

新潟県におけるタタキ甕・布留式系甕について

滝 沢 規 朗

1 はじめに

新潟県における古墳出現前後の在来系甕形土器（以下では「形土器」を省略する）は「千種甕（又は能登甕）」と呼ばれるく字口縁・胴部外面ハケ調整・平底（尖底）甕である。北陸北東部に位置付けられる当県は、千種甕を主体に、様々な地域の土器が確認されているが、ここで対象とするタタキ甕・布留式系甕は、一般的に「畿内系」と解釈される外来系の甕である。この2タイプは一部で時期が重複するものの、おおむねタタキ甕→布留式系甕へと変遷するとされる。県内においては当該期の調査例が飛躍的に増加するのに比例して、一定量の出土が確認できる。

布留式系甕については、1988年に川村浩司氏が上越市（旧中郷村）籠峰遺跡出土例を報告・検討〔川村1988〕されたのが最初であり、近年では伊藤秀和氏による県内例の集成がある〔伊藤2003〕。川村氏の報告以降、この20年の間で資料の蓄積は著しい。一方のタタキ甕は、長岡市横山遺跡〔長岡市1987、小林・広井1992〕でまとまって出土して以降、資料数は着実に増加している。ただし、これら2タイプは、報告書等で記述はあっても、資料が増加した今日において県内のどの地域でどういったものが分布するのかといった初步的な状況把握が進んでいるとは言い難い。特に、タタキ甕についてはその傾向が強い。布留式系甕についても伊藤氏の論考から数年が経過しており、資料数が増加していることから、本稿では県内出土例の集成を第1の目的とし、その状況を雰囲感することにしたい^{註1)}。

2 県内のタタキ甕

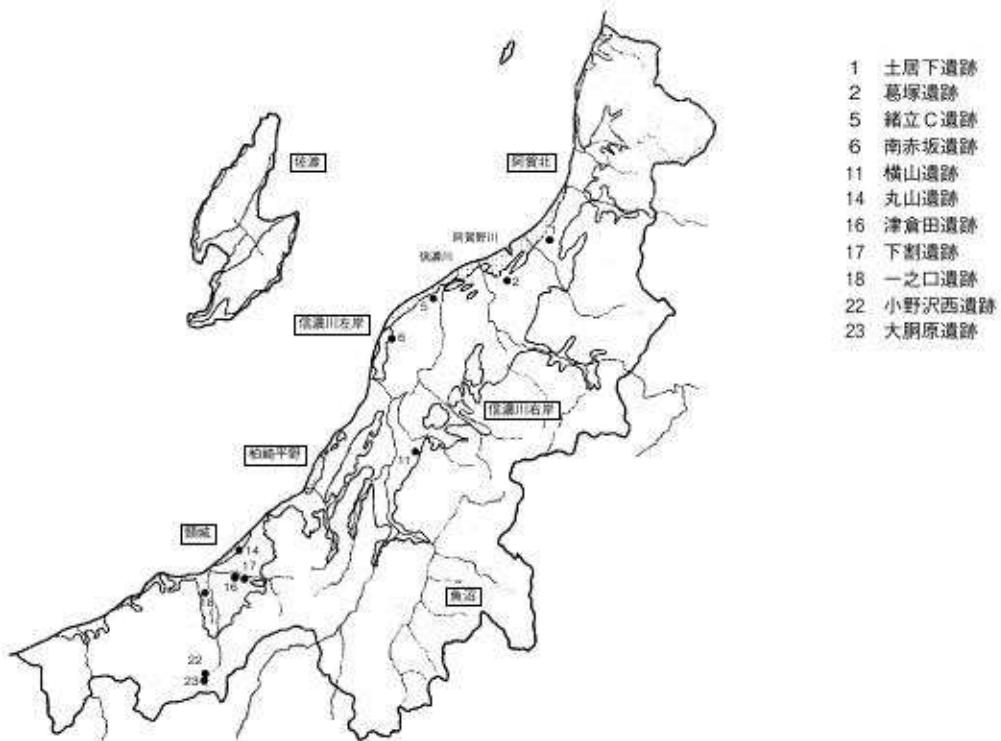
タタキ甕は、外面にタタキ痕跡を残すものを一括した。タタキ成形された後、入念なハケが施されてその痕跡が消えていると思われるものも存在すると考えるが、ここでは外面にタタキ痕跡が残るもののみ対象とした^{註2)}。

以下では県内での分布を概観したのち、簡単な分類を行う。県内での地域区分については、2005年に行われた新潟県考古学会主催のシンポジウム『新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現』〔新潟県考古学会2005〕に準じた。

(1) 分 布

県内では10遺跡で41例が確認できる（第1図・第2表）。地域別では頸城が最も多く6遺跡で28例、信濃川右岸が1遺跡8例、信濃川左岸が1遺跡1例、阿賀北が2遺跡4例である。地域別では頸城が最も多く、柏崎平野・魚沼・佐渡では報告例がない。比較的土器の出土量が多い遺跡においても、全く出土しない遺跡が多い中で、頸城の上越市下割遺跡〔山崎ほか2004〕では20例、信濃川右岸の長岡市横山遺跡〔広井・小林1992〕で8例とまとめて出土している。両遺跡の出土量は県内全体の約70%を占めていることから、局地的に集中する遺跡が存在することが伺える。この2遺跡以外でタタキ甕が確認された遺跡では、1～2例程度の出土にとどまる。

なお、第2・3図は甕以外に壺にタタキ痕が残るものも図示している。信濃川左岸・南赤坂遺跡（5）〔前山・相田1999〕、頸城・下割遺跡（39）〔山崎ほか2004〕で各1点出土している。



第1図 新潟県におけるタタキ甕等出土遺跡分布図

(2) 分類

畿内研究者の分類を基本に以下のように大別した。

A 弥生形甕

平行気味の粗いタタキが施されたもので、V様式系甕と呼称されることも多い。畿内第V様式～布留式期前半頃まで残存し、庄内式・布留式甕の影響から、口縁部・胴部・底部の形態・調整は様々である。平底・ドーナツ底で、胴部内面はヘラケズリを原則としない。cm/2～3本のタタキ痕が認められる^{注3)}。

なお、これらは口縁部の形態・法量で細分が可能である。

B 庄内形甕

外傾する口縁部と上端に摘み上げられた端部とからなり、胴部外面に細かなタタキが施されたものである。胴部内面はヘラ削りを原則とする。

上記のA・B類は口縁部形態・法量等で細分が可能である。大きさは容量による区分が最も有効と考えるが、破片資料が多く容量が把握できないものが多い。このためここでは、以前に示した法量から区分を行う〔滝沢2005b〕。

[法量]

大型 脇部最大径27.2～35.8cm、器高30.4～41.4cm、口径18.0～32.0cm

中型 脇部最大径15.6～28.4cm、器高19.6～31.2cm、口径13.0～26.3cm

小型 脇部最大径10.8～18.0cm、器高17.0cm未満、口径9.6～18.3cm

[口縁部の形態]

のことについて、在来系のく字甕について検討を試みたことがある〔滝沢2005b〕。以下ではその分類に準じて、以下のようにした。

I類 端部上端及び上下端が大きく突出して幅広い面を有するもの。上端部が厚く、下部との器厚が異なり、「付加状口縁」等と呼称されるものを含む。

II類 端部の上下がI類ほど突出せず、おおむね器壁程度の端面を有するもの。

III類 端部に面を持たないものや、わずかに面を持つものを一括した。

上記以外に有段口縁、受け口状口縁がある。

[タタキの部位]

寺沢1986を参考に以下のように区分した。

1類 脊部全面にわたりタタキが残存するもの。部分的な縦位のナデ・ハケは本形式に含めた。

2類 脊部上位にナデ・ハケ、以下にタタキ痕を残すもの。

3類 脊部中位にナデ・ハケ、その上下にタタキ痕を残すもの。

4類 脊部下半にナデ・ハケ、その上位にタタキ痕を残すもの。

なお、口縁部にタタキ痕が残るものはa類、タタキ痕が残らないものをb類とした。

(3) タタキ甕各説

A 弥生形甕 (第2・3図1~4・6~18・20~38・40~43)

[法量]

口縁部から底部まで残存するものは2点のみ(8・17)である。また、脊部最大径付近まで残存するものを含めても、法量が確認できる個体は少ない。

大型と予想されるものもあるが(25)、中型・小型が多い。口径12.0cm程で小型と予想されるものも数例あるが(6~8・31・33など)、主体は中型(1・10・17・27など)と思われる。

[口縁部形態]

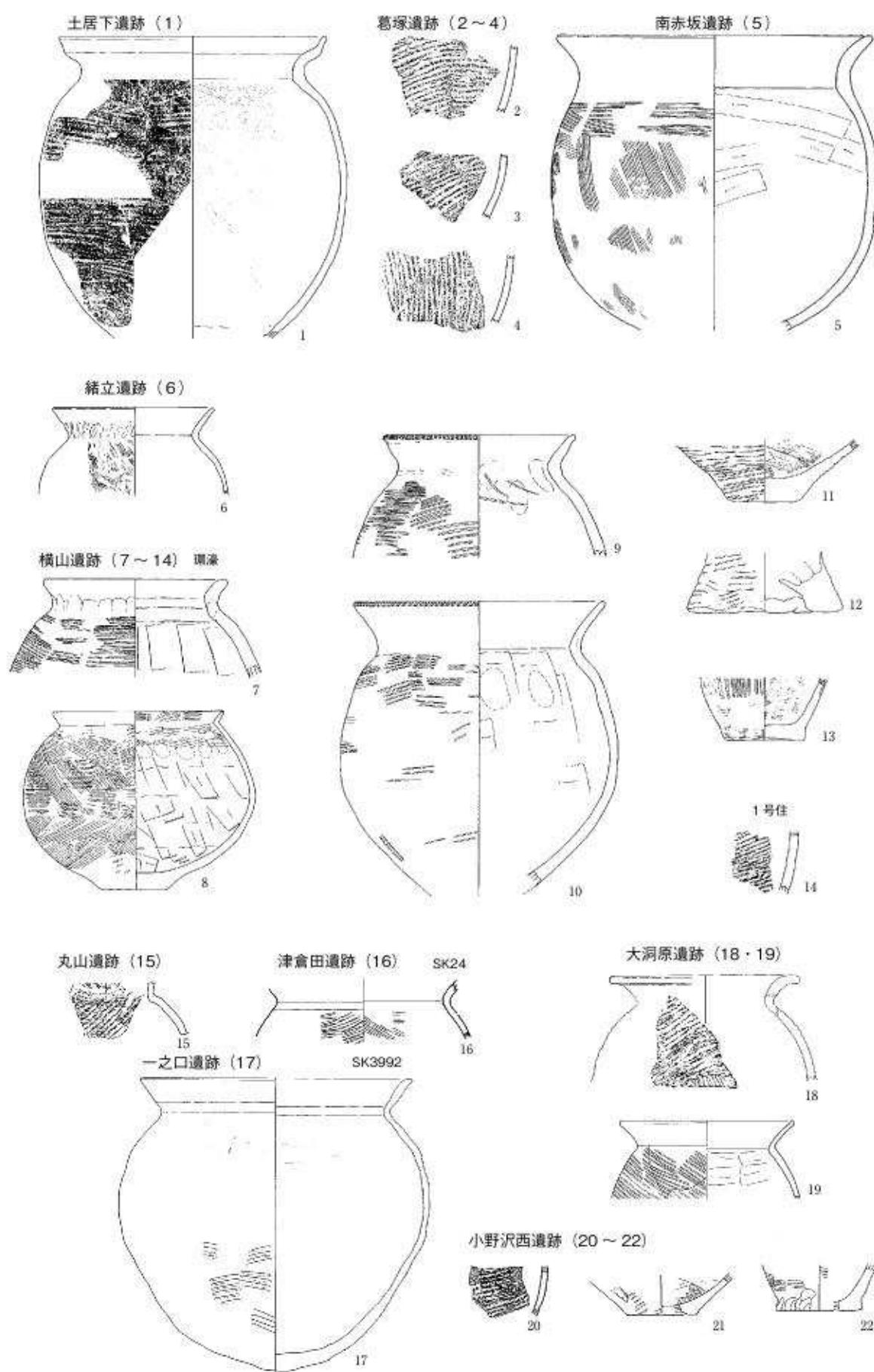
有段口縁・受け口状口縁 有段口縁のもの(17)、有段ないしは受け口状口縁のもの(1)が1点づつある。17は口縁部と脊部の境界を強くヨコナデすることにより外面のみ有段状を呈するが、口縁部は全周にわたり有段状を呈していない。タタキ痕は2類である。一方、1は脊部下半のみハケが施されており、タタキ痕は4類である。いずれも口縁部にタタキ痕は認められない。

く字状口縁 25点と圧倒的に多い。く字状口縁の分類ではI類は確認できない。III類が圧倒的に多く、II類が若干認められる。

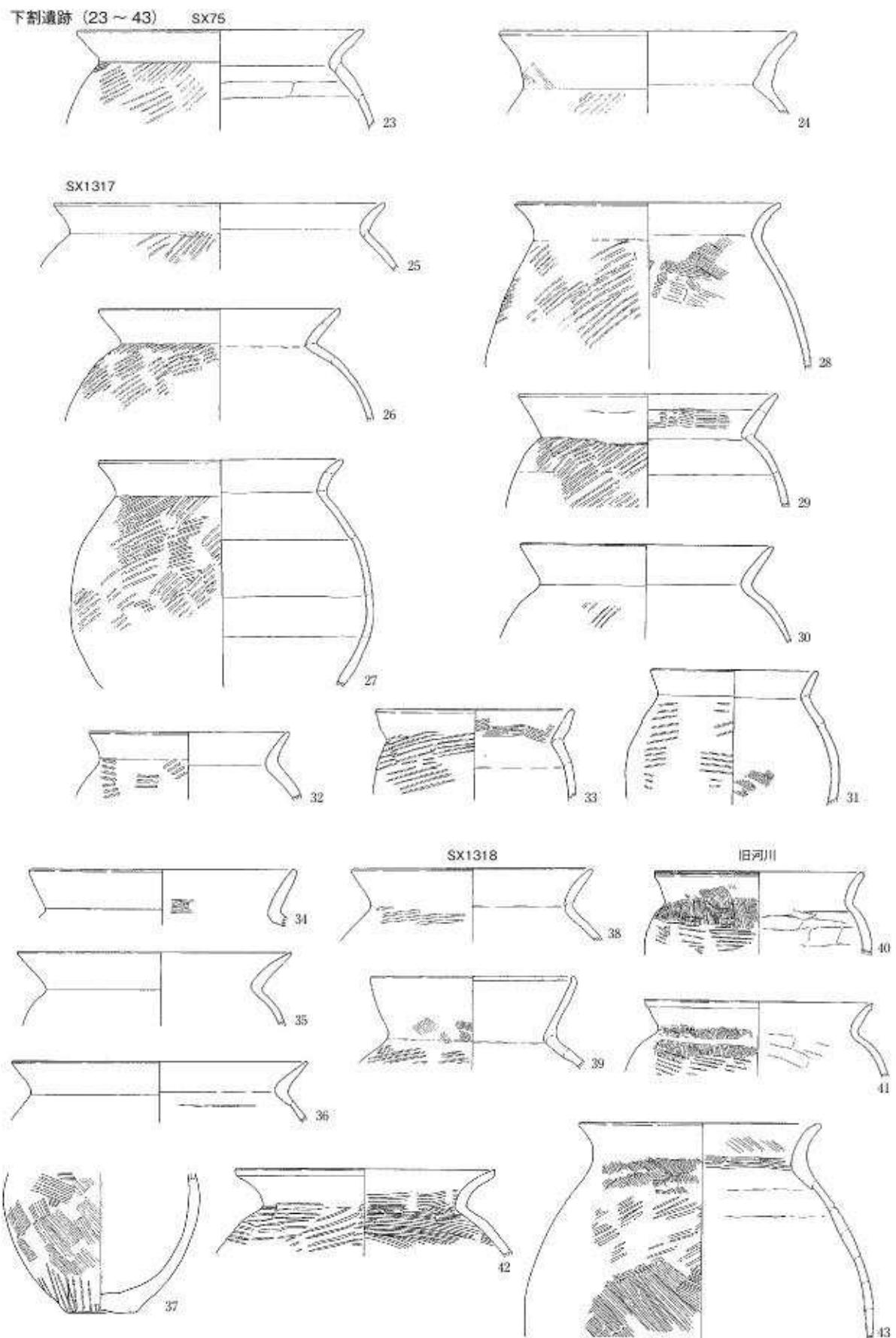
口縁部II類：4点確認される(18・40~42)。外反して立ち上がり垂直な面を持つII f類(42)、大きく外反して立ち上がり垂直な面を持つII j類(18)、外傾して立ち上がり、垂直な面を持つもの(40・41)に分かれる。

口縁部から脊部上位の破片のため、タタキ痕の分類は明確にしえないが、40・41は口縁部から脊部上位に縦ハケが残るのに対し、18・42はハケでタタキ痕を消していない。残存部におけるタタキ痕の方向は平行ないしは右上がり(18・42)と平行ないしは右下がり(40・41)に分かれる。また、内面調整は18・40・41がヘラナデであるのに対し、42は口縁部下位から脊部上位にはヨコハケが残る。

口縁部III類：最も確認例が多く、様々な口縁部形態が存在する。外傾して立ち上がる短い口縁部の先端が尖るIII d類(8・25・31・32)、口縁部は直立ないしは外反する短い口縁部で、厚手のIII e類(7・43)、外反して立ち上がり先細りとなるIII h類(27・28)、端部の処理はIII d類と同じであるが口縁部が長いもの(9・10・23・24・26・29・30・38)がある。これは、厳密な意味では在来系甕との区分は明瞭であり、特に単純に外反して立ち上がり、先細りとなる口縁部形態はタタキ甕特有の口縁部形態である点は注意を有する。



第2図 新潟県におけるタタキ甕・壺 (1) S=1/4



第3図 新潟県におけるタタキ甕・壺 (2) S=1/4

また、横山遺跡出土の9・10は口縁端部に刺突が施されている点が特徴的である。

口縁部形態II類と同様に口縁部から胴部上位の破片のため、タタキ痕の分類は明確にしえないが、43は3類の可能性があるが、残存部には胴部上位にのみタタキ痕を残す。また、8は4類であるが、胴部上位から中位にもハケが残る。タタキの方向は口縁部細別では一定の傾向を抽出しがたい。平行も一定量存在するが、下割遺跡例は右上がりが多い。これは内面調整も同様であり、横山遺跡例は胴部上位に指頭圧痕が残り、ヘラナデのものが多いため（8～10）、下割遺跡では顕著ではなく、粘土紐積み上げの痕跡を残すものが一定量存在する（23・27・29・43）。

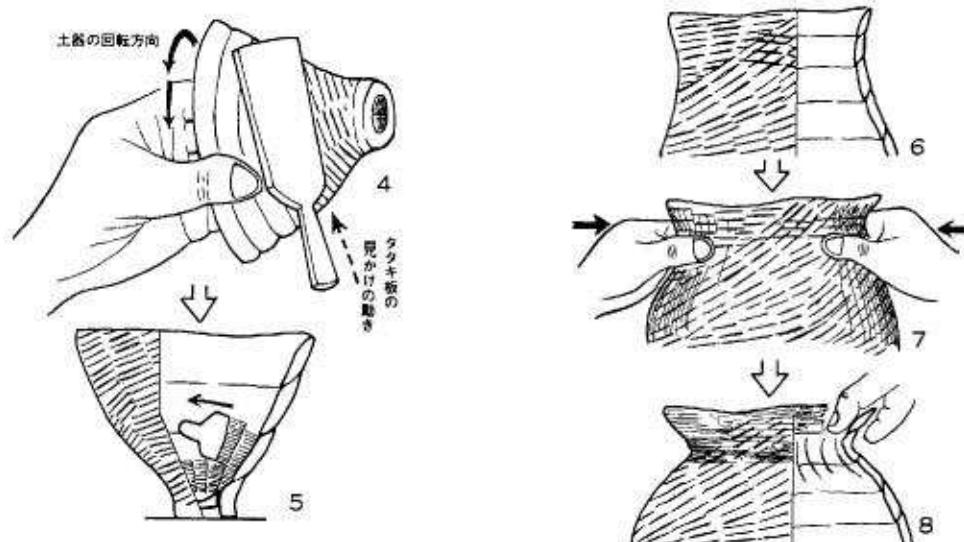
【底部形態】

口縁部形態が把握できるものでは、有段口縁の17は丸底であるのに対し、8は平底で底径も4.8cmと大きい。底部のみ残存するものではドーナツ状に外面中央が凹むものは1点（21）、高台状のものが1点（12）、それ以外の底部外面は平坦である。

【口縁部の製作技法】

胴部外面に残存するタタキ痕についてはこれまで概観してきたが、口縁部付近にタタキ痕が残存するものについては、a類とした。a類については、都出比呂志氏が「口縁叩き出し手法」と呼称するもの〔都出1974〕に対応すると考える。都出氏は「第5様式の新しい段階では、甕の外反する口縁を、胴部成形後に新たに接ぎたしてつくる手法以外」にも、「胴部上半部上端の口縁部相当部分が外反するように連続的に叩き伸ばし、更に頸部のクビレ相当部分を外から両手で絞って口縁部を作り出し、その後口縁部の端をつまみあげ気味にヨコナデ調整を施す」ものが見られるとし、後者を「口縁叩き出し手法」と呼称する。この手法により製作されたものは「仕上げの悪い土器の場合、くの字に外反する口縁部およびクビレ部に、胴部上半と連続する平行タタキメがしばしば観察できたり、口頸部に絞り目があったり、口縁端の線が波うつ」とした（第4図）。

口縁部にタタキ痕が観察できる土器には6・32・33がある。口縁部の絞り目や、口縁部が波打つなどの顕著な傾向は確認できないものの、口縁部にタタキ痕が確認できることから、都出氏の指摘する「口縁叩き出し手法」で製作されたものと考える。



第4図 タタキ甕の製作技法（都出1974を一部改変）

一方でこれ以外の土器はどうであろうか。口縁部にタタキ痕が観察できないことから、「口縁叩き出し手法」以外の手法で、都出氏の「胴部成形後新たに接ぎたしてつくる手法」が多かった結果であろうか。ただし、口縁叩き出し手法で製作されたものであっても、口縁部に丁寧なヨコナデやハケが施された場合にその痕跡は確認できることから、口縁部におけるタタキ痕の有無のみで「口縁叩き出し手法」か否かは判断できない。口縁部付近の観察が重要であると考えるが、実見したものの中では下割遺跡例で「口縁叩き出し手法」以外のものが観察できる。

下割遺跡出土土器の中には、口縁部と頸部の境界までタタキ痕が存在するものの、タタキ痕が粘土紐の接ぎたしにより原体の途中で途切れているものも存在する(26～29・42)。また、これらは口縁上部で粘土紐の接合痕跡も明瞭なことから(29など)、「接ぎ足し」により成形されているのがわかる。また、24では接ぎ足した粘土の一部が剥落しており、その下にはタタキ痕が確認できる。このことから、これらは「口縁叩き出し手法」に近いものの、胴部上半部上端を若干外反するように連続的に叩き伸ばした後、粘土紐を接ぎ足して製作されたものと考える。これらは、口縁上端部分に粘土紐の接合痕がわずかに確認できる例もあり(27～29)、この裏付けとなる。

下割遺跡では「口縁叩き出し手法」が口径14.0cm以下と比較的小型品に多いのに対し、後者は口径約16.0cm以上と中・大型品に多い傾向にある。

B 庄内形窓(第2図19)

県内では頸城の妙高市(旧妙高村)大洞原遺跡で1点確認されている。庄内形窓はタタキ目が右下がりの庄内大和形窓と、タタキ目が右上がりで、庄内大和形窓よりも細かなタタキが施された庄内河内形窓があるが[石野・関川1976など]、本例は庄内大和形窓の範疇で理解されるものである。

19は口径12.4cmと小型品である。口縁部は上端部がつまみ上げられており、寺沢氏のd手法に該当する(第5図)。条痕幅が細かく、1cm当たりの平均条痕数が4本程度である。胴部の器厚は約3mmと、弥生形窓に比して薄い。残存部において胴部内面には横方向のヘラ削りが施されており、胴部と口縁部の棱は比較的明瞭である。この点は庄内形大和窓とはやや様相が異なる。

3 県内の布留式系窓(第8・9図1～46)

布留式系窓は畿内での寺沢薰氏[寺沢1986]・米田敏幸氏[米田1991]らの見解、加賀での田嶋明人氏[1986]等の分類を参考に抽出した。本稿で取り扱う布留式系窓は寺沢氏の見解[寺沢1986]から抜粋すると以下のとおりとなる。

- ①わずかに内彎しながら外方に伸びる。
- ②口唇部はe・f・g・h手法(第5図)を一般とし、きわめて多様性に富むが定型化したものはg手法。
- ③体部は球形か球形に近い長胴形。肩部に横位のスリナデを施す例を典型とする、また、古い段階では櫛状工具によって直線文や波状文を施す例がみられる。
- ④内面ケズリ手法で器壁は薄く仕上げる。壁厚の平均は3.0mmである。
- ⑤底部は丸底で、内面の押圧が顕著である。

寺沢氏は以上の属性をもったものを典型例とし、狭義の「布留形窓」とする。また、出現期の布留形窓を「0式布留形窓」とし、各地への拡散を指摘している[寺沢1987]。

一方で米田氏は「布留系窓」「布留式窓」という名称を用いる[米田1991]。両者の区分を厳密に対比できないが、おおむね寺沢氏の「0式布留形窓」は米田氏の「布留系窓」の一部を含み、寺沢氏の「布留形

甕」が米田氏の「布留式甕」に相当するようである。米田氏は別の論考〔米田1990〕で布留系甕とした上でA～Hに分類を行い、その変遷を明確にしている。

本稿で扱ういわゆる布留甕の範疇については、在地で製作した模倣品の可能性もあること、細片が多く、口縁部の抽出が多くなることから、在来の甕口縁部に見られない「口縁部f・g手法」のものを主体に、口縁部e手法で肩部に横ハケが加えられたものを対象とする。また、名称については布留式甕に系譜がたどれるものとして「布留式系甕」とした。

(1) 分 布

県内では17遺跡で50例が確認できる(第6図・第3表)。地域別では頸城が圧倒的に多く8遺跡で38例、魚沼が2遺跡2例、信濃川右岸が3遺跡4例、信濃川左岸が4遺跡5例である。頸城での出土例が最も多い点、比較的土器の出土量が多い遺跡においても全く出土しない遺跡もある点はタタキ甕と同様である。出土遺跡では1遺跡1～2例が多いが、頸城の津倉田遺跡(上越市)で14例、下割遺跡で5例とまとまって出土している^{註4)}。

(2) 分 類

ここで取り扱う新潟県の資料は完形品が少なく、ほとんどが口縁部破片である。このため、口縁部形態を主眼において分類を行う。なお、口縁部の細分にあたり大和・矢部遺跡での区分〔寺沢1986〕、南加賀・漆町遺跡での区分〔田嶋1986〕を参考に、以下のように区分した。

[口縁端部形態]

a類 口縁部端面が外傾するもの。寺沢氏のe2手法、田嶋氏のa類に相当すると考える。

b類 口縁部端面がほぼ平行するもの。寺沢氏のf手法、田嶋氏のb類に相当すると考える。

c類 口縁部端面が内傾するもの。寺沢氏のg手法、田嶋氏のc・e類に相当すると考える。

d類 口縁端部が丸く作られたもの。寺沢氏のe1手法、田嶋氏のd類に相当すると考える。

[口縁端部の肥厚]

I類 肥厚がほとんど認められないもの。田嶋氏のI類に相当すると考える。

II類 わずかに肥厚するもの。田嶋氏のII・III類に相当すると考える。

III類 肥厚が大きいもの。田嶋氏のIV・V類に相当すると考える。

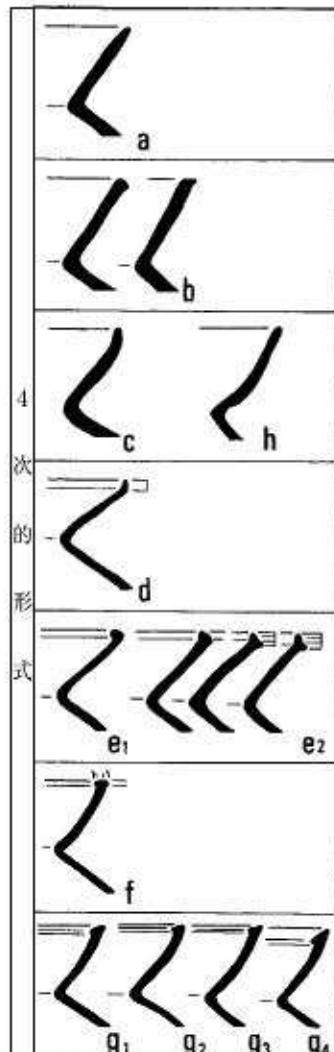
[口縁部形態]

1類 外傾・外反するもの。

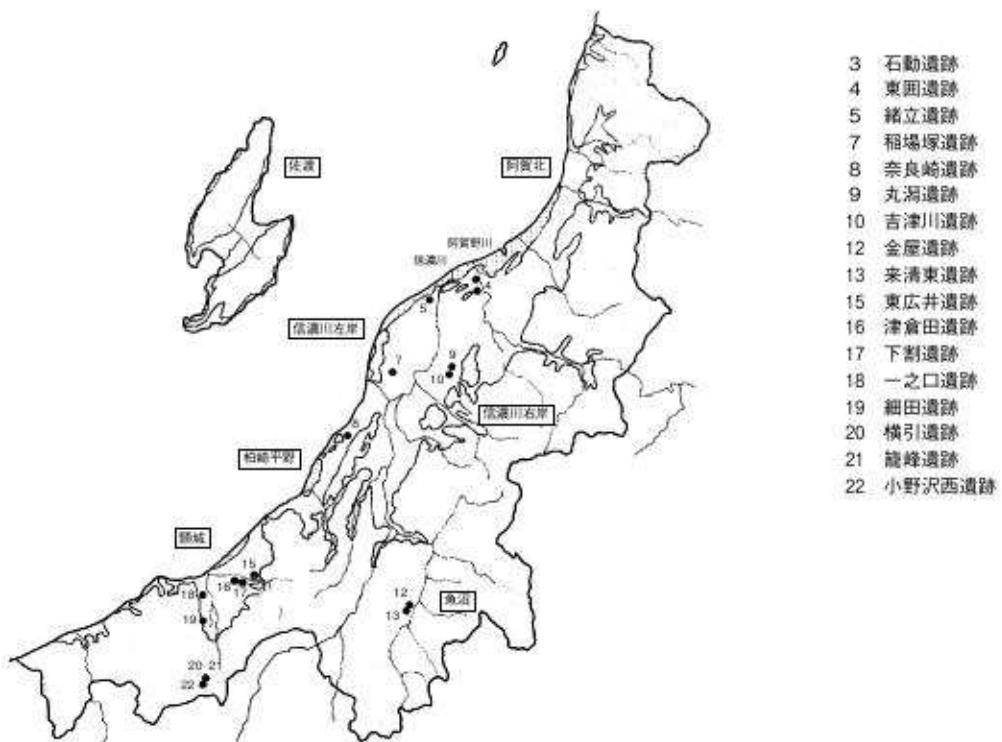
2類 内湾するもの。

[胴部調整]

内面調整はおおむねヘラ削りであり、底面付近や胴部上位に指頭圧痕が残るものが多い。以下では胴部外面調整を主体に記す。



第5図 口縁部の分類
(寺沢1986より)



第6図 新潟県における布留式系堀出土遺跡分布図

A類 タテ・ナナメ方向のハケが施されたもので、肩部の横ハケが確認できないもの。

B類 布留式系堀特有の肩部に横ハケが認められるものを一括した。ただし、規制性が弱く、調整が難と思われるものも含めている。

上記の分類で属性を分割したのち、資料を概観し、そのまとまりについて検討したい。

(3) 各 説

[法量]

口縁部から底部まで残存するものは2点のみ(26・37)である。全形が分かるものが少ないとから法量の区分は明確でないが、大型と思われるものは明瞭でなく、小型品も少なく(46など)、中型品が主体と考える。

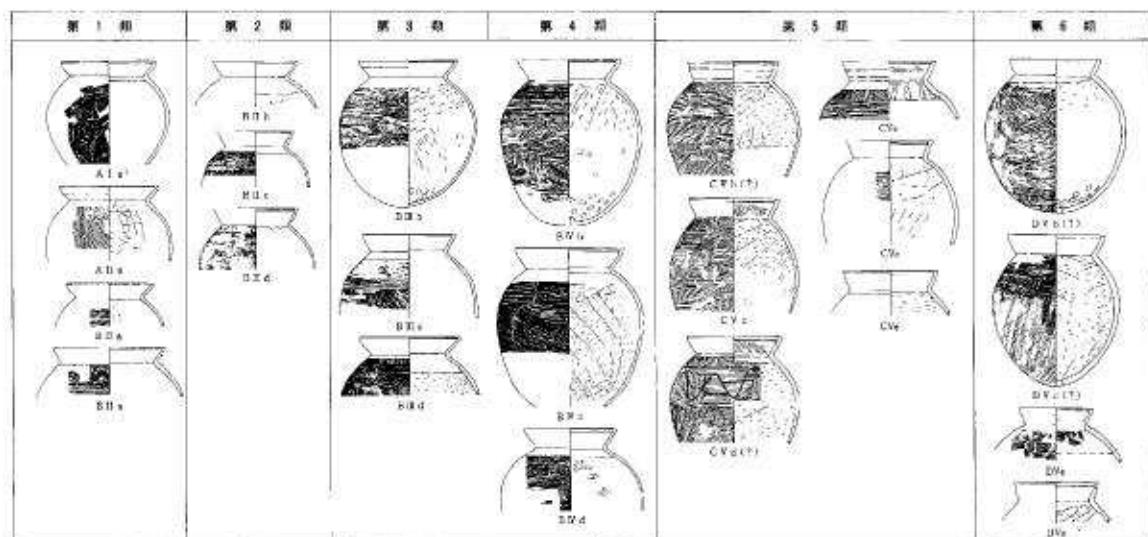
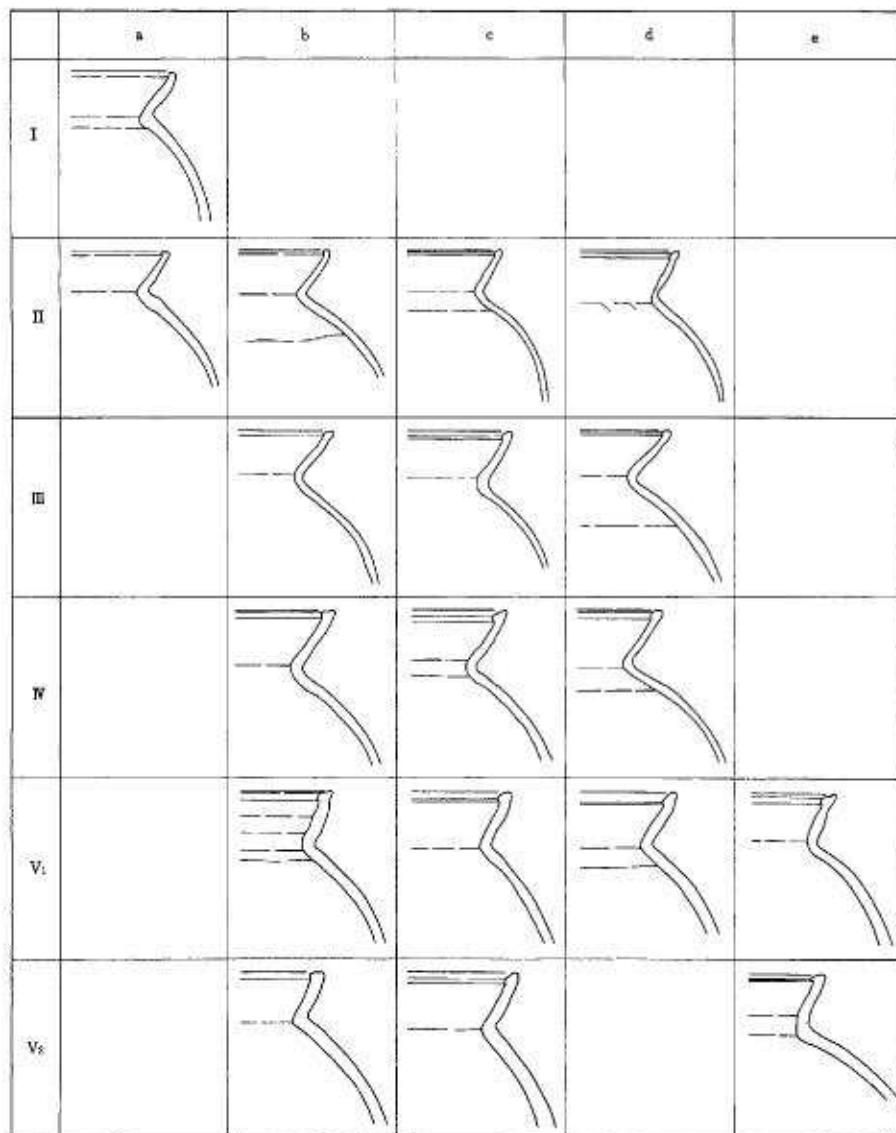
[口縁部] 端部の形態を主体に記述する。

・ a類 5例認められる。口縁部形態は外傾する1類は1点(7)で、内湾する2類が4点(3・4・18・41)に分かれる。

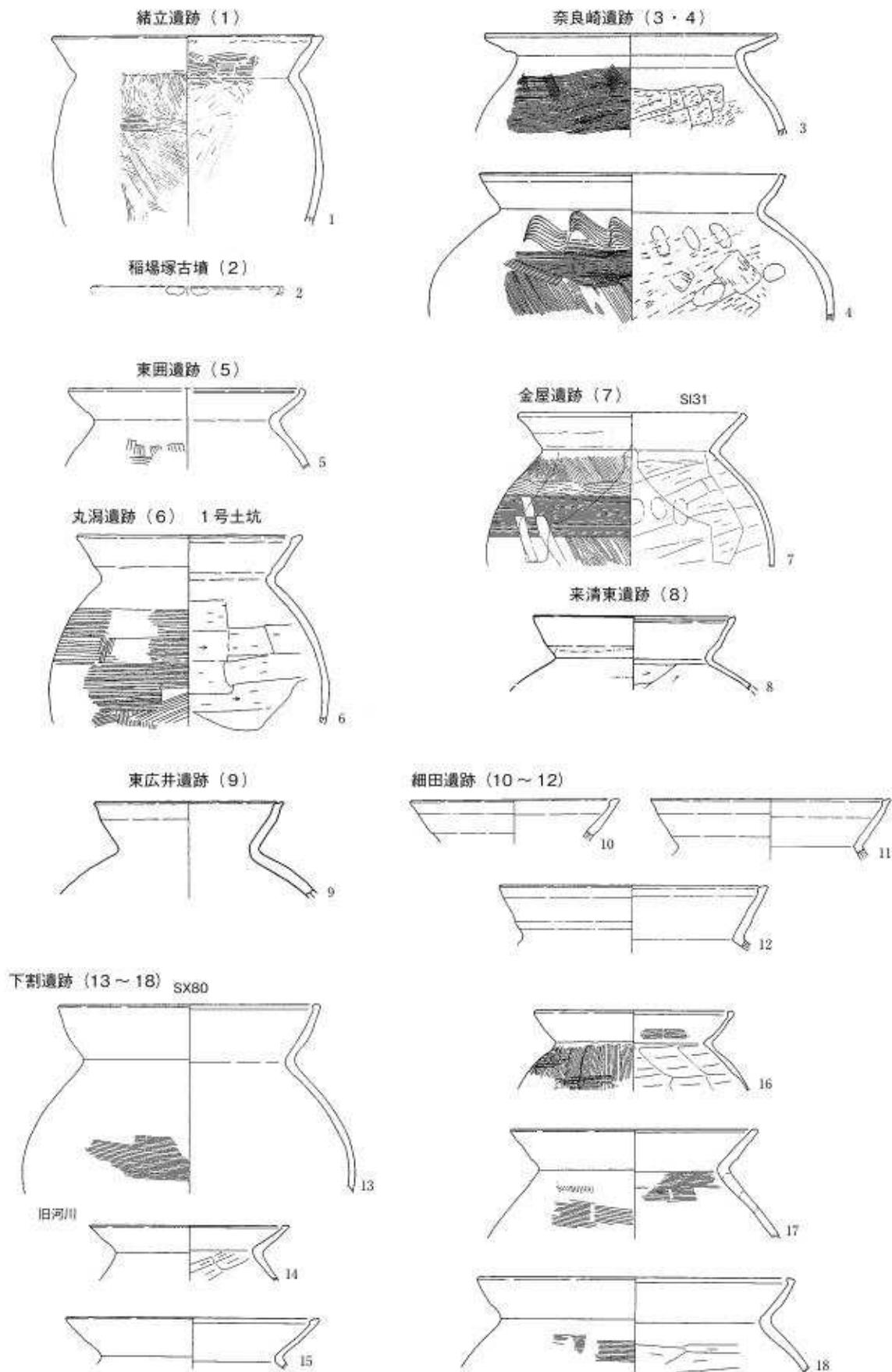
7は口縁端部にほとんど肥厚が認められないI類である。胸部には2種の工具による横ハケが顕著で、内面には指頭圧痕が残る。米田氏の布留系堀C類に近いと考える。

後者の2類は口縁部が肥厚しないI類(3・4)と、上端がつまみ上げられて肥厚するII類(18・41)に分かれる。残存する外面は肩部の横ハケが顕著であり、4には波状文が加わる。前者のI類はいずれも奈良崎遺跡出土資料で、報告書でも指摘があるとおり[丸山2001]、田島氏のI-1類「布留傾向堀」である。

・ b類 c類との区分に課題を残すものの、12例と比較的多くの資料が認められる。口縁部形態は内湾するものが主体であるが、内湾度が低く、外傾するものも定量存在する(17など)。端部の肥厚は、

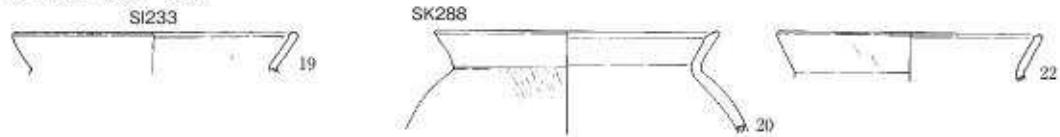


第7図 布留式系土器の分類図（田嶋1986より）

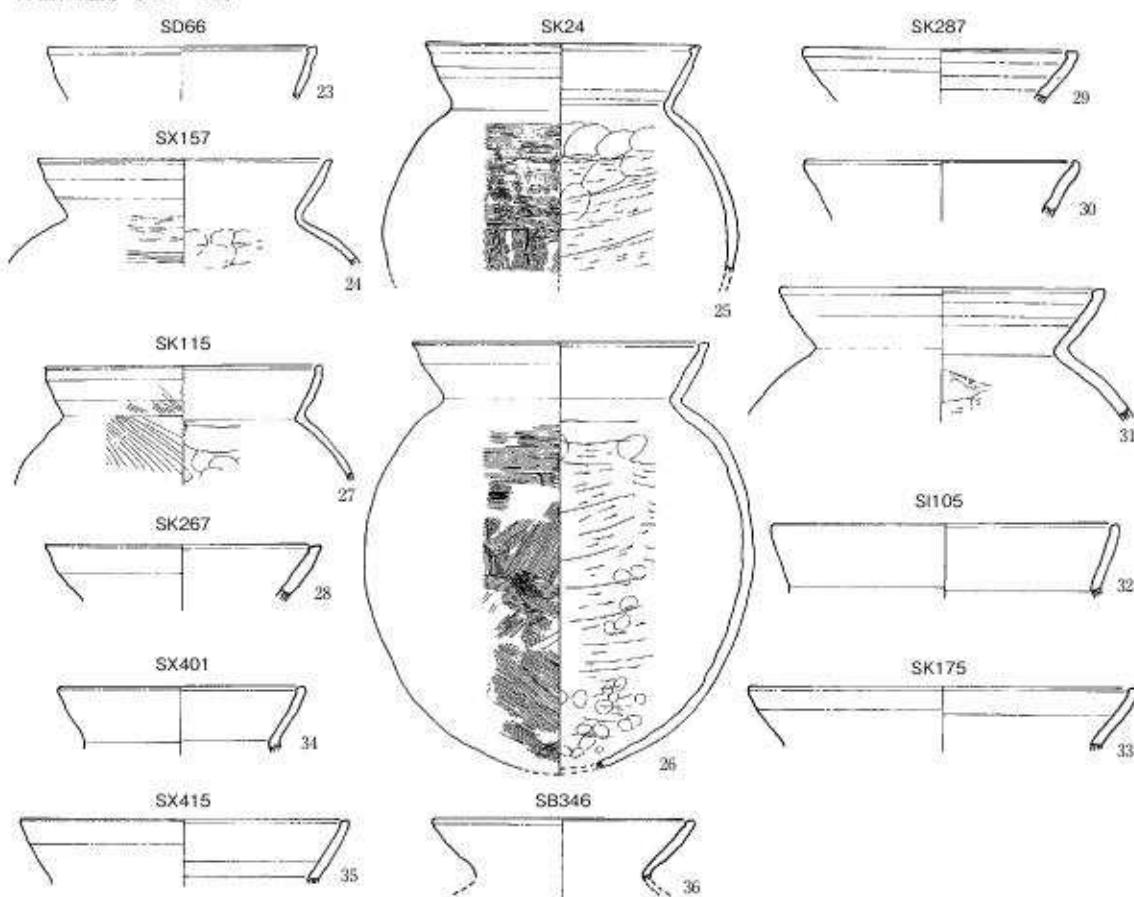


第8図 新潟県における布留式系堀 (1) S=1/4

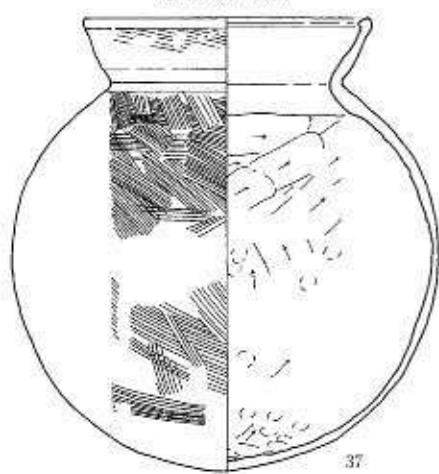
一之口遺跡 (19 ~ 22)



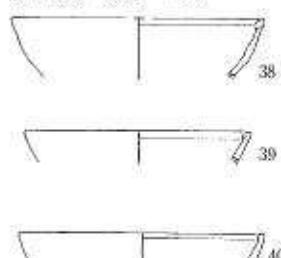
津倉田遺跡 (23 ~ 36)



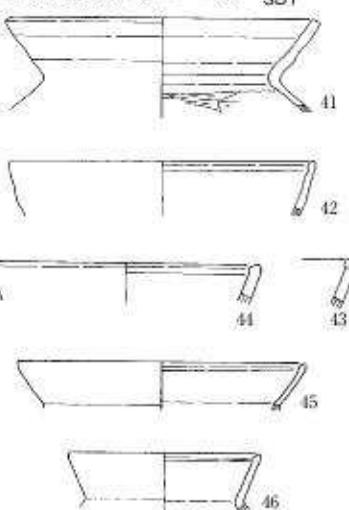
笠峰遺跡 (37)



横引遺跡 (38 ~ 40)



小野沢西遺跡 (41 ~ 46)



第9図 新潟県における布留式系甕 (2) S=1/4

ほとんど認められないもの（17・22・35）などもあるが、おおむね肥厚したものが多い傾向にある。

胴部の調整が分かるものは少ないが、肩部付近に横ハケが施されたもの（17）、肩部の横ハケが顕著でないものの（1）などがある。

- ・c類 b類と同様に多く、20例が認められる。口縁部が内湾するものが圧倒的に多いが、外傾するものも若干認められる（20・21）。後者のうち20は口縁部が短い傾向にある。端部の肥厚は顕著であるが、ほとんど肥厚しないものも認められる（24・27など）。

胴部の外面調整は肩部の横ハケが顕著なものもある（25）。

- ・d類 9例が認められ、b・c類に比して確認例は少ない。口縁部は内湾するものが圧倒的に多い。端部の肥厚は顕著なものが多いが、36などほとんど肥厚しないものも含まれる。

胴部外面調整が把握できるものは少ないが、16は肩部に横ハケ、13は胴部中位に横ハケが施されているが、37は横ハケを欠くなどの違いがある。

4 タタキ甕・布留式系甕の年代について

(1) タタキ甕（第2・3図）

A 弥生形甕

いわゆる畿内系とされるタタキ甕は、畿内第V様式に顕在化し、それ以降も布留式併行期まで残存する〔寺沢1986ほか〕。細かな変遷については明確でないが、寺沢氏は「外的な要因（原則として布留形甕）の影響を多分にうけていると考えられるものがある」とし、布留式影響の弥生形甕を提唱している〔寺沢1986〕。おおむね長胴・平底から球胴化・尖底ないしは丸底化し、庄内式併行期には技法として内面ヘラ削りされたものが増加する傾向にあるようである。

また、米田氏は中南河内においてV様式系甕（本稿の弥生形甕）が、氏の庄内IV式まで残存することを指摘している。庄内IV式併行期におけるV様式系甕は「畿内中枢部ではほとんど消失しているが周辺地域では丸底化したV様式甕が残存している」という〔米田1991〕。米田氏の指摘どおり、紀伊・摂津・山城等では布留形甕の出現以降も平底・長胴のタタキ甕が残存する一方で、庄内形甕や布留形甕の胴部形態・調整等の影響が認められるようである〔財大阪府文化財センター2006〕。

畿内及びその周辺の土器について、十分な知識を持たない筆者には、県内出土資料を畿内のそれと対比することは、きわめて困難である。このためここでは、特に出土例が多い横山遺跡、下割遺跡出土例を、共伴した在来系土器との年代を手がかりに推定することにしたい。なお、在来系土器の時期区分については第1表に示した。断りがない限り、○期は在地の土器区分とする。在来系土器の変遷観と、畿内との併行関係には大きな問題を残すものの、一応の目安として表示している^{⑥)}。

1) 横山遺跡（第2図7～14）

環濠出土のほか、1号住と包含層出土・表採品がある。横山遺跡の年代については、包含層出土資料中に3期頃のものが若干散見できる。確認された遺構は環濠以外に竪穴建物3棟、方形周溝墓1基等があり、これらの年代は4期が主体である。横山遺跡の環濠出土土器の年代幅については明確でないが、上層からは5期の資料が多い。

横山遺跡出土資料の内面調整においてハケ目が残存せず、粒子の移動が顕著ではないヘラナデが採用されている。また、残存率が高い個体では胴部は球胴のもの（8）と、長胴のもの（10）がある。球胴タイプの8については類例を検索しえなかつたが、長胴の10は胴部最大径が口径を上回り、胴部最大径は胴

本稿	越後	頸城	加賀	大和		河内		関川1994		寺沢1987		米田1997	
				石野・関川 1976	寺沢1986・ 2002	米田1994		大和	加賀	関川1976	寺沢1986	大和	加賀
3期				前半 1式	後半 庄内0式	庄内I		前半 1式	後半 庄内II	庄内0	3群	河内	加賀
4期	I - 3			前半 2式	後半 庄内2式	庄内III		前半 2式	後半 庄内IV	庄内1	4群	米田	漆町
5期	II - 1	1段階	5群	前半 3式	後半 庄内3式	庄内V		前半 3式	後半 庄内VI	庄内II	5群		編年
6期	II - 2	2段階	6群							庄内III	6群		
7期	II - 3	3段階	7群							庄内IV	7群		
8期	III	4段階	8群							庄内V	8群		
9期	IV	5段階	9群							庄内VI	9群		
10期		6段階	10群										
11期		7段階	11群										
12期		8段階	12群										

第1表 編年対応表

部中位にある。これらの特徴は弥生形甕の中でも、庄内式併行期以降の特徴と考える。

また、横山遺跡出土例で特に注目されるのは口縁部に刻み目を持つ土器である（9・10）。川村氏が米田氏の庄内II式に併行するとした一群が含まれる〔川村1996〕。この刻み目については、2つの考え方方が可能であり、一つは同じく環濠出土資料中にも含まれる東北南部系土器の影響である。もう一点は、いわゆる弥生形甕分布圏内で口縁端部に刻み目を持つ土器との関連である。後者との関連を考えた場合、このような土器は紀伊に多いという指摘〔関川・石野1976〕がある一方、森岡秀人氏が提唱する「淡路型叩き甕」の影響も想定できる^{註6)}。紀伊では庄内式前半期を中心に布留式初頭併行期まで〔前田2006〕、摂津では森岡氏の西摂4様式で、米田氏の庄内I～II式、寺沢氏の庄内0式に比定できる可能性がある。いずれの出自か判断はしえないが、本稿の5期を主体とする横山遺跡環濠出土資料は、紀伊・摂津での盛行時期から、おおむね庄内式前半段階の所産として考えたい。

2) 下割遺跡（第3図23～43）

下割遺跡出土資料は包含層出土のほか、SX1317・SX1318など遺構出土資料が多い。これらのうち、同一遺構から多量に出土したSX1317の在来系土器は7期のものと考える。下割遺跡は2期には成立しているようであるが、タタキ甕が出土した「下割遺跡II地点」は6～7期以降のものが目立つ。

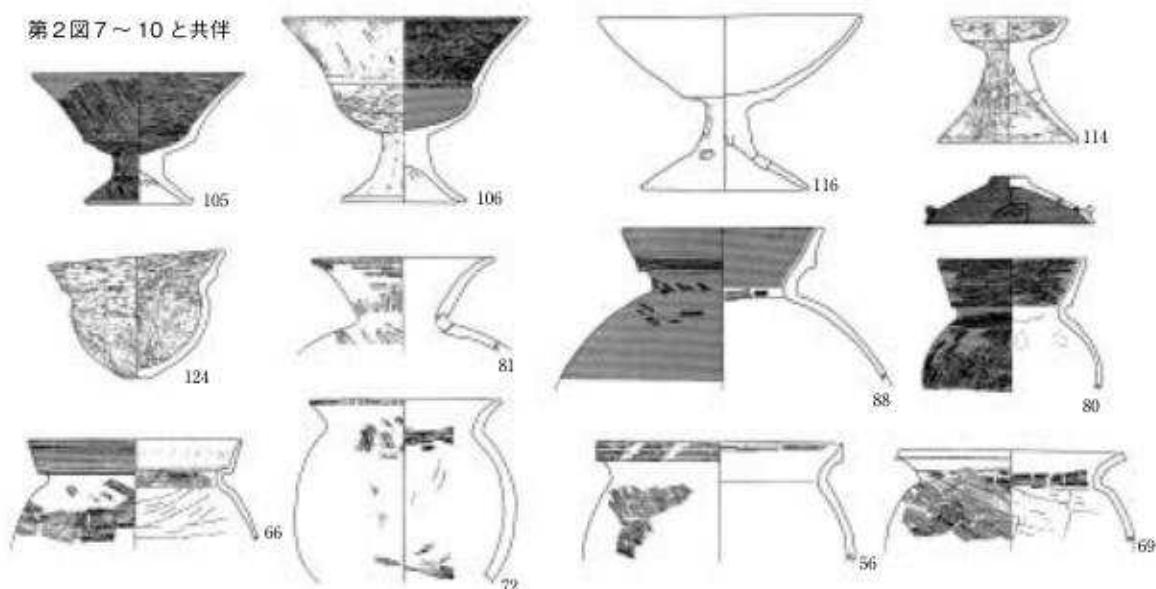
全形が把握できる資料は少ないものの、胴部中位まで残存する中型品である27・43などは横山遺跡の10に比して、胴部最大径が口径を大きく上回る。また小型品（31）もほぼ同様の形態をとるようである。全体に長胴形を呈していても、頸部のすぼまり具合から球胴・胴張りタイプと予想される。また、胴部内面調整はハケを残すものが少なく、ナデ残しによる粘土紐接合痕跡が明瞭なものが多い。内面調整からは判断しがたいが、胴部のプロポーションから横山遺跡例よりも後出的な要素が強い。このことから庄内式後半～布留式期にかけての所産と考えたい。

在来系土器との関係についてであるが、多くのものは明瞭に区分できる。特に短い口縁部が外傾し、端部が丸い（又は先細り）資料は在来系の千種甕では認められない。一方で、口縁部が外反して立ち上がり、器壁程度の垂直な面をもつ42は7期を中心とした時期に顕著に認められる。このことからも、上記の位置づけはおおむね妥当なものと考える。

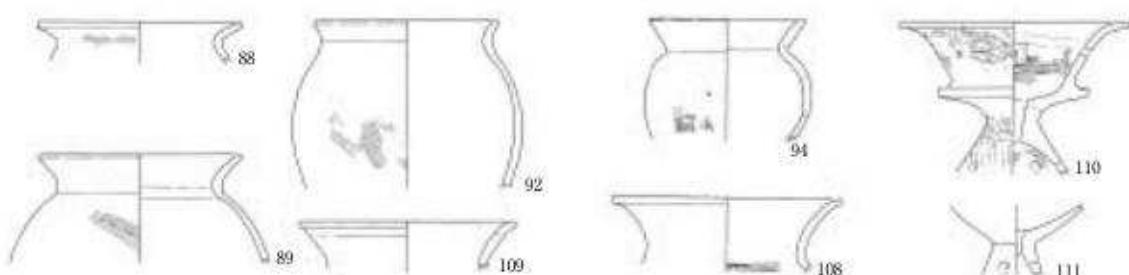
3) その他の遺跡

横山遺跡・下割遺跡以外ではまとまった報告例はない。また、破片資料が多いことから、年代的な位置付けが困難なものが多い。この中で、比較的残存率が高い土居下遺跡の第2図1と一之口遺跡東地区の第2図17について、概観することとした。

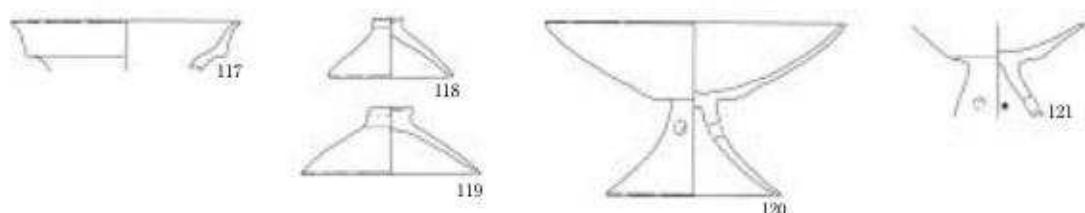
第2図 7～10 と共に



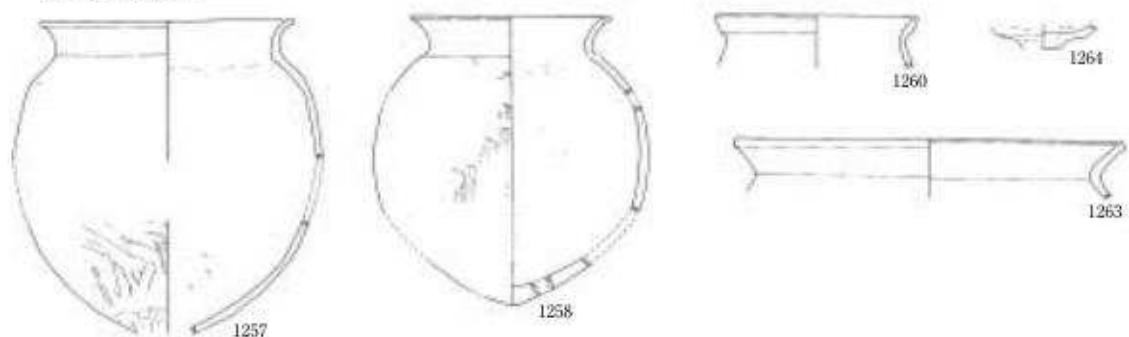
第3図 25～37 と共に



第3図 38・39 と共に



第2図 17 と共に



第10図 タタキ甕と共に伴土器 S=1/6

1は有段状ないしは受口状口縁を呈するものである。土居下遺跡自体は5・6期～9期頃までの土器が認められることから、口縁部形態は在来系とは考え難く、変容は予想されるが外来的要素が強いものと考える。口縁端部に面を有さないことから、近江系ないしは丹後・丹波周辺との関連が予想される。両地域周辺の土器変遷を周知していないが、庄内式新段階とほぼ併行する資料と考えたい。

一之口遺跡東地区の17は、有段状を呈し、球胴径の胴部と丸底の底部からなる。県内の在来系甕は基本的に丸底を受容しないが、8期以降散見でき、布留式甕の影響と考えられている。このためその上限はおおむね8期としたい。一方、口縁部形態は外面のみ有段状を呈している。口縁部と胴部の境界付近を強くヨコナデすることにより有段状を呈しているが、前述のように有段口縁は全周しない。このため年代的位置付けについては苦慮するが、在来系土器の特徴を残すことから、8～9期の所産と考えたい。

B 庄内形甕

1点のみ出土している第2図19は、口縁部端部が上端につまみ上げられたものであり、寺沢氏の分類では口縁部d手法と考える。口縁端部の形態から、寺沢氏の庄内2～3式の所産を考える。胴部半ば以下を欠くため明確ではないが、薄手でシャープなつくりである点からすると、庄内2式の可能性が高いであろうか。これは報告者の指摘〔三ツ井1995〕と一致する。

以上、弥生形タタキ甕と、庄内形タタキ甕に区分して年代的位置について検討したが、両者では数量も大きく異なるものの、弥生形タタキ甕の流入後に庄内形甕が流入するという傾向は認められない。5期よりも古い弥生形タタキ甕が存在する可能性は否定できないものの、残存率が高い個体では庄内形甕よりも後出するものが数多く認められる。庄内形甕の流入とほぼ同時期である5期頃から弥生形タタキ甕が認められるようになり、7期頃をピークとして8・9期と新しい段階まで継続する。これは、東国における弥生形タタキ甕・庄内形甕の流入を、前者が庄内の前半段階まで、後者は氏の庄内Ⅲ式以降とした米田氏の指摘〔米田1997〕とは合致しない。

(2) 布留式系甕（第8・9図）

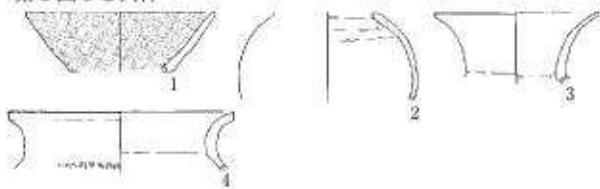
本稿で扱う布留式系甕については、大和・寺沢編年〔1986〕、中南河内・米田編年〔米田1991〕、南加賀・漆町編年〔田嶋1986〕との対比から、年代を推定することにしたい。

口縁部a類は、いわゆる布留傾向甕〔酒井1975〕に代表されるものであり、定型化した布留式系甕が成立する以前の所産とされている。寺沢氏の「0式布留形甕」、田嶋氏の「布留傾向甕」、米田氏の布留系C類の範疇に属するものと考える。

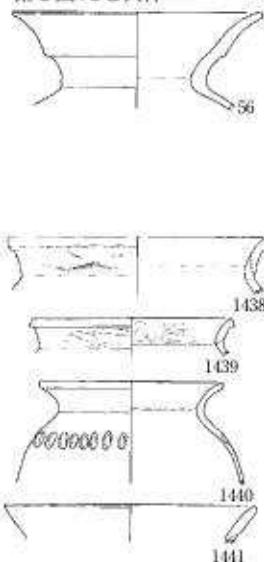
本県例は残存部する肩部には横ハケが顕著なものが多く、奈良崎遺跡の4は肩部上位に波状文が見える。胴部内面上位に指頭圧痕が及んでおり、これは米田氏の布留系甕C類には認められない点である。若干、変異している可能性はあるものの、寺沢氏の布留0式、米田氏の庄内Ⅳ式、田嶋氏の漆7群頃に比定される可能性が高いものと考える。金屋遺跡の7は、口縁部が外反するものであり、胴部外面には横位の横ハケが顕著である。胴部内面はケズリが上位にまで施され、口縁部との稜が明瞭である。このような特徴は布留0式形甕の範疇で理解すべきものと考える。寺沢氏の布留0式、米田氏の庄内Ⅳ式と考える。

口縁部b類は端面が平行なものであり、寺沢氏のf手法（布留0～3式）、米田氏の布留系甕C類、田嶋氏の端部b類（8～10群）に相当する。本類は胴部調整が明確なものは少ないが、6は外面の胴部最大径を有する中位まで横ハケが残存し、内面はヘラ削り調整である。米田氏の布留系C類に近いことから8～9期を中心とした時期を想定したい。一方で、1は胴部内面がヘラ削り調整である点は6と同じものの、外面の横ハケは顕著ではない。口縁部が比較的厚手であり、胴部も球胴形を呈さないことからも、6に比

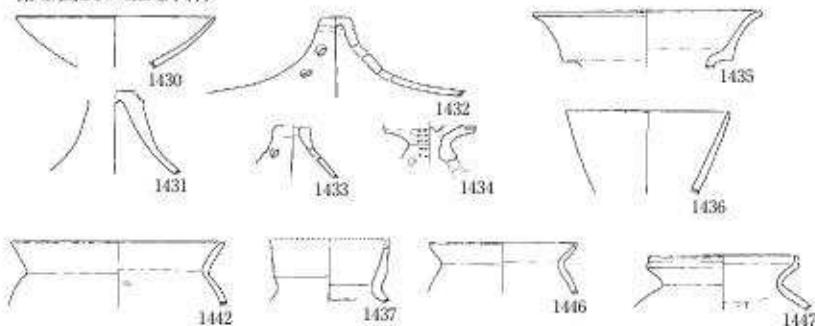
第8図6と共に



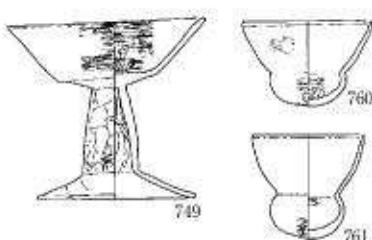
第8図13と共に



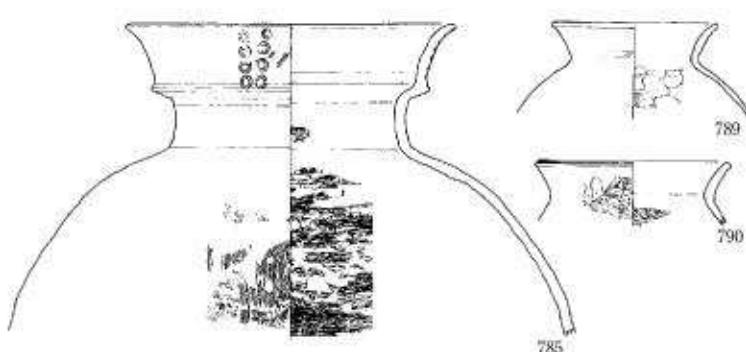
第9図20~22と共に



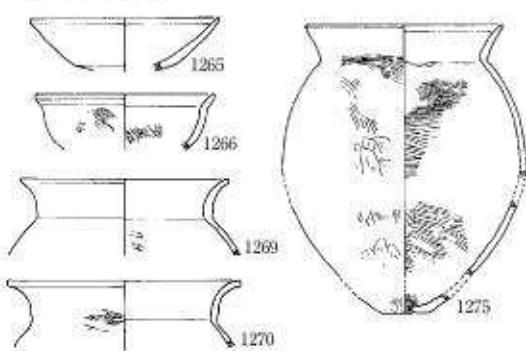
第9図23と共に



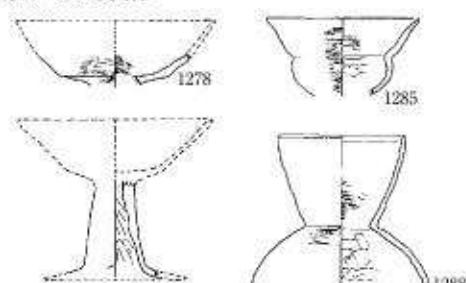
第9図24と共に



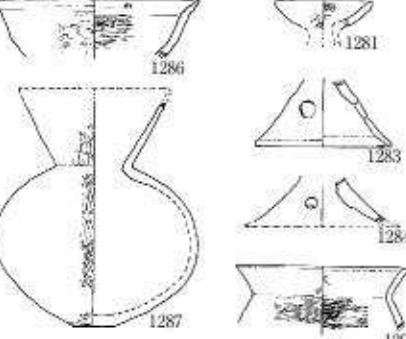
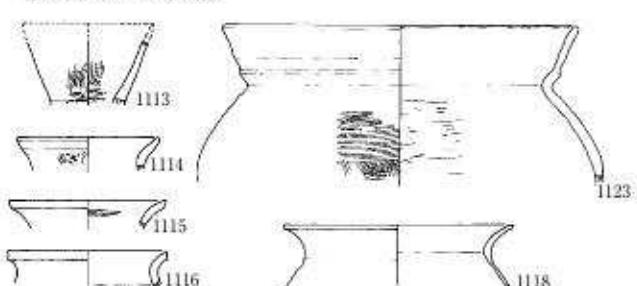
第9図28と共に



第9図29~31と共に



第9図25・26と共に



第11図 布留式系堀と共に土器 S=1/6

して後出的な要素が強い。また、口縁部の肥厚が比較的小さい17などは布留Ⅰ～Ⅱ式の様相を呈する。

口縁部c類は口縁部端面が内傾するもの。寺沢氏のg手法である。出土点数は最も多い。米田氏の分類では本稿の口縁部c類は布留系D～H類に認められ、米田氏の布留Ⅰ式からV式まで認められるという。このうち、比較的残存率が高い25・26は口縁部が内湾するものの、比較的厚手である。また、口縁端部が肥厚する点、胴部外面のハケ調整が斜め・横ハケが主体で、肩部の横ハケが若干残る点、胴部内面の指頭圧痕が広範囲に及んでいる点は、米田氏の布留系甕F類の特徴を備えており、布留Ⅲ式の可能性が高い。

一方で、一之口遺跡東地区出土の20は口縁部が短く、口縁部も直立気味に立ち上がる。内傾面を有するものの、厚手である。このような特徴は米田氏の布留系甕G類ないしはH類に該当し、布留Ⅳ～V式に比定される。

これ以外のものは年代付けに苦慮するが、横引遺跡の38・39、来清東遺跡の8は米田氏の布留系D・E類で、布留Ⅰ～Ⅱ式、端部が肥厚せず、比較的長い口縁部を有するものは布留Ⅱ～Ⅲ式のものと考えたい。

d類は口縁端部が丸く作られたもの。寺沢氏のe1手法に近い。この中で、略完形品の37は口縁部が比較的厚手であり、口縁端部の肥厚が著しい。胴部の外面調整は斜めハケが主体であり、肩部の横ハケを欠く。口縁部・端部の形態は米田編年と直接の対比はできないものの、布留Ⅰ～Ⅲ式、胴部の外面調整は布留Ⅱ～Ⅳ式に比定できる。ここでは、口縁部の形態から布留Ⅱ～Ⅲ式と考えたい。一方で、薄手の16は肩部の横ハケが認められる点、胴部上位に縦ハケが顕著なことから、ほぼ同じ年代を想定したい。

上記の検討から、県内で確認された布留式系甕は、その成立当初から若干例認められ、寺沢氏の布留Ⅱ～Ⅲ式、米田氏の布留Ⅱ・Ⅲ式をピークとして定量認められる。ただし、寺沢氏の布留Ⅳ式、米田氏の布留Ⅳ式、田嶋氏の漆町11群以降のものの確認例はきわめて少なくなり、一之口遺跡東地区の20がその可能性を残す程度である。県内の遺跡盛行時期とおおむね比例した結果であるが、大きな傾向として注意を有する。

5 タタキ甕・布留式系甕についての若干の検討

これまで外来系である両タイプの出土遺跡の分布や分類と共に、年代的位置付けについて概観してきたが、以下では、他地域と比較しての流入年代や、流入ルート、在来系甕に与えた影響等について考えてみたい。

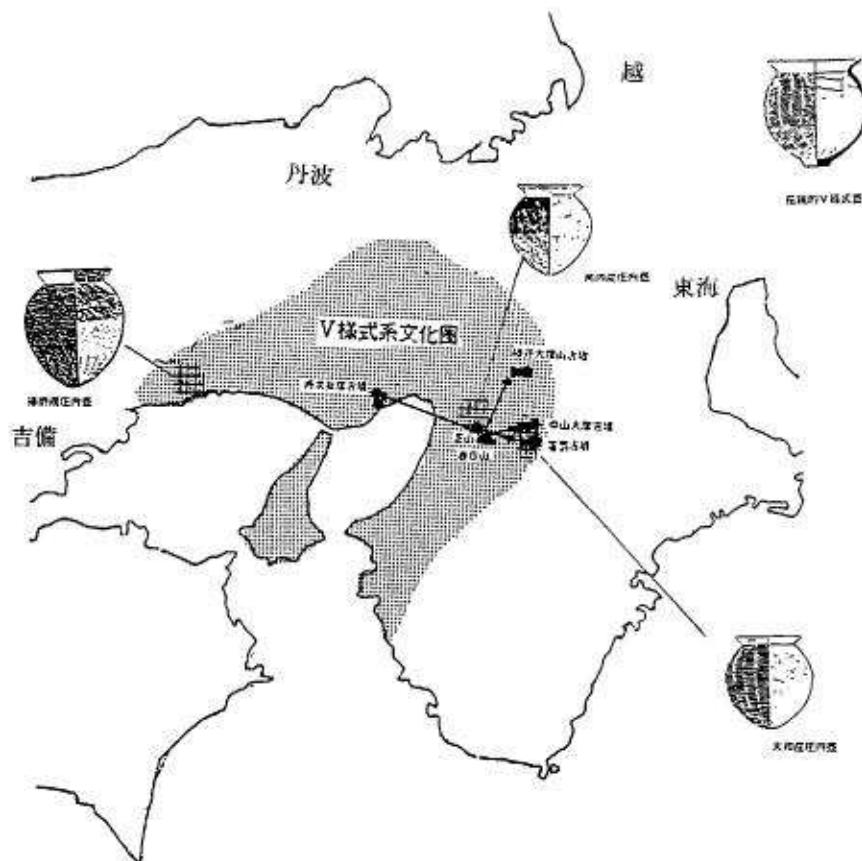
(1) タタキ甕について

A 績内からの流入時期と流入先

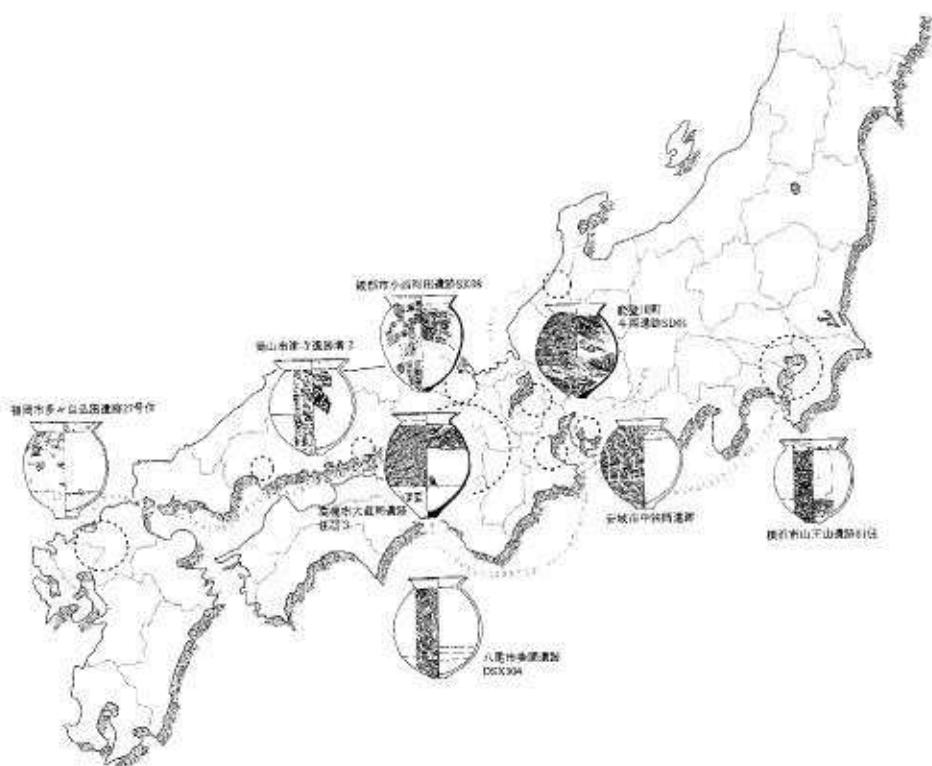
全章で検討したとおり、県内で確認されたタタキ甕は弥生形のものが圧倒的に多く、庄内形のものは大和形甕が1点確認されているにすぎない。波及の開始時期は本稿の5期頃で、米田氏の庄内Ⅱ式、寺沢氏の庄内Ⅰ式頃と考えたい。このような状況はこれまでの研究と照らすとどうであろうか。

タタキ甕は弥生形甕が主体で、庄内形甕が少ない点は関東をはじめ畿内以外に分布するタタキ甕の分布とほぼ一致する〔西川1991、米田1997、赤塚1999など〕。また、庄内形甕の全国への波及には地域性があり、米田氏は、畿内以東が大和形甕、畿内以西が河内形甕と指摘する〔米田1997〕。県内で確認された庄内形甕も大和形であることから、この点も従来の指摘と一致する結果となった。

一方で東国におけるタタキ甕の波及年代について米田氏は、弥生形甕が庄内式前半期、庄内形甕が庄内式後半期と指摘している〔米田1997〕。県内への波及時期は、その上限が米田氏の指摘と一致するが、以降、長らく継続的に認められる。これは北陸北東部全般の事例と一致すると考えたい。



第12図 弥生形タタキ甕の主要分布圏（米田1997より）



第13図 弥生形甕分布図（赤塚1999より）

次に越後に波及したタタキ甕の搬入経路について考えてみたい。畿内の庄内併行期段階において、その前半段階から近畿地方のどの地域でもタタキ甕が使用されていたわけではないようである(第12図)。また、庄内形甕の分布も限られており、畿内中枢部においても地域差・遺跡差が著しい(第15図)。庄内形甕は畿内中枢部においても主体となる地域・遺跡は限定されるようである〔米田1991ほか〕。

越後で確認された弥生形タタキ甕は、直接的ないしは間接的にもたらされたであろうが、筆者の認識不足もあり形態的な特徴から搬入地域を限定することはきわめて困難である。ここでは形態的な特徴と盛行年代を手がかりに若干の検討を試みることとしたい。

形態的な特徴では、横山遺跡出土の第2図9・10が注目される。前述のとおり口縁端部に認められる刻み目は、紀伊や摂津に認められる。口縁端部に面を有しないことから淡路型甕との相違点はあるものの、候補地の一つと考えたい。次に土居下遺跡出土の第2図1は有段ないしは、受口状を呈する。短い有段部は丹後・丹波などの北近畿に多く認められる特徴と考えるが、頸部が直立していることから受け口状口縁と思われる^{註7)}。変容が予想されるが、近江地方との関連を想定したい。数量は少ないものの、関連が想定できる資料は畿内中枢部ではなく、その周辺地域となる。

次に盛行年代は本稿の5～7期である。汎日本的に土器の移動が認められる時期とされており、これまでタタキ甕の分布圏外であった地域においても、拡散が認められる〔赤塚1999〕。土居下遺跡出土の1と類似する近江地域でも、この時期に弥生形タタキ甕が増加するようである。また、北陸系土器との密接な関連が指摘されている丹波・丹後〔近澤2000、高野2006〕において、この頃タタキ甕が認められるようになる。仮に横山遺跡出土のタタキ甕が、淡路・摂津との関連で考えることが可能であれば、タタキ甕において摂津との類似性が指摘〔米田1997・近澤2000〕されている丹波経由との理解もできようか。

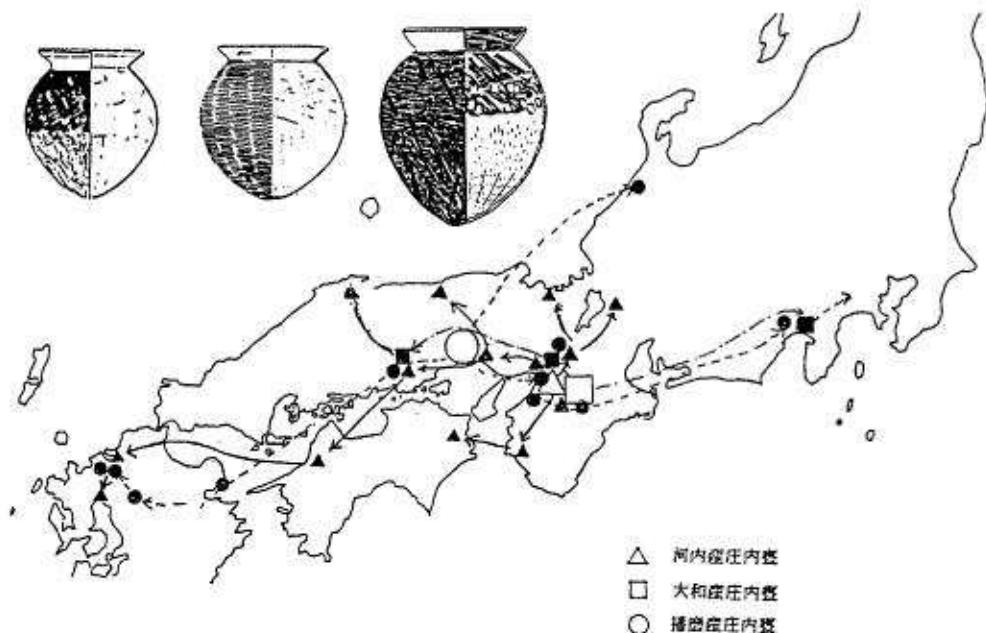
これらのことからも越後におけるタタキ甕の搬入先は、単一かどうかなど多くの問題点を含むが、畿内外縁部でも北近畿とされる丹後・丹波、近江経由の日本海ルートを想定したい。なお、丹後・丹波については、この時期、北陸系土器との密接な関連が説かれている。北陸と北近畿地域の結びつきと仮説を立て、次に畿内地域における北陸北東部系土器についてみてみたい。

B 畿内及びその周辺地域における北陸北東部系土器

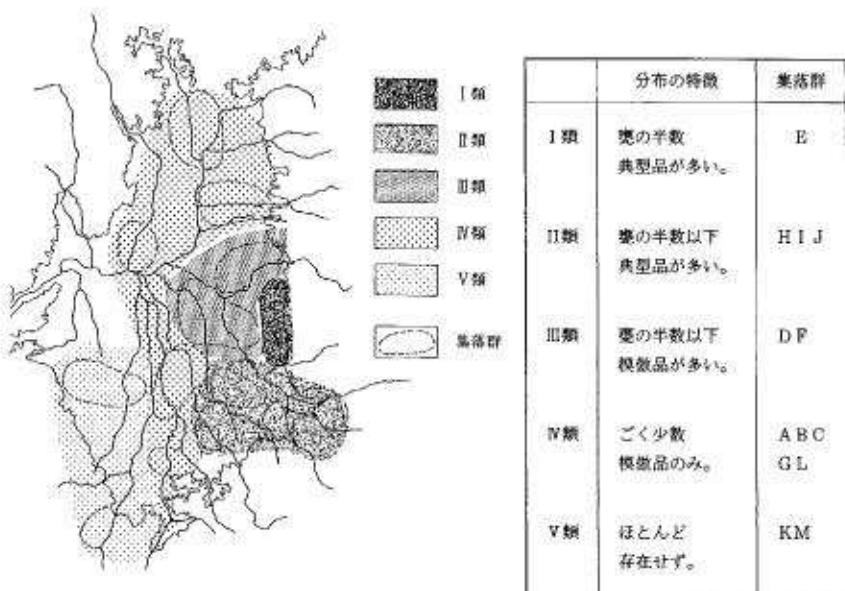
畿内及び周辺地域の北陸北東部系の甕：タタキ甕の受容という一方的な流入のみであったのであろうか。この時期、畿内周辺部における北陸系土器の動向については近年、市村慎太郎氏により積極的な集成が行われている〔市村2003・2004〕。市村氏の集成は、北陸でも南西部の月影甕（有段口縁・擬凹線文）や裝飾器台が主体である。北陸北東部系土器はあまり多く含まれていないが、滋賀・唐川遺跡など、数遺跡でその可能性が指摘されている。北陸南西部系土器の集成が進む大きな要因は「認識のしやすさ」であり、このためか市村2003では北陸北東部系土器の集成も試みられているが、市村2004では「おもに北陸南西部地域の土器の一部形式を集成」する作業が行われている。

北陸南西部の土器を主体とした市村氏の集成では、大和・河内では少ないものの、それ以外の地域では一定量認められるという。中でも、近江の湖東までは定量認められるものの、近江の湖南以南では少なく、「北陸系の出土する遺跡では他の外来系土器も見られる遺跡が多い」という〔市村2003p.33〕。なお、市村氏も指摘するように、「認識しえない北陸系土器が存在する可能性も考えられる」〔市村2003pp.103〕のであり、この点については北陸北東部系土器の細別器種認定が重要となろう。

市村氏の集成と前後して、畿内における北陸北東部系土器について、重要な指摘がある。一つは青木勘時氏による指摘であり、大和・柳本遺跡群大ナカ田地点遺跡においてく字口縁・ハケ調整甕＝能登形甕・



第14図 庄内形甕の移動（米田1997より）



第15図 大和における庄内形甕の分布模式図（小池1994より）

千種形甕に類似する資料が存在する〔青木2004〕。口縁部はナデ、胴部外面はハケを基調とするが、胴部の一部と口縁部にはタタキ痕が残る。北陸からの直接の搬入と考えるよりも、近畿外縁地域で作られたものの搬入を考えるべきという。また、田嶋氏は北陸北東部を「東の越」とし、「実測図の所見」と前置きしたうえで、近江・山城・河内・丹後・丹波などで、田嶋氏の「能登型甕」が見られるが、確実な例は確認していないとしている〔田嶋2004〕。

青木・田嶋両氏が指摘するように、能登型甕又は千種甕は、く字口縁を呈する外面ハケ調整甕であり、識別に際して特徴に乏しいことが挙げられる。このため「東の越」の土器が畿内で確認されにくい。

越後でタタキ甕が比較的多く確認できる本稿の5～7期ほどにおいて、月影甕・装飾器台に代表される

西の越（北陸南西部）の土器様相に対して、東の越（北陸北東部）は千種甕（能登甕）・装飾台付甕が代表的な土器様相とされる〔田嶋1986〕。もちろん、それ以外の細別器種においても東西の越の特徴を示すものは存在するし、「西の越」「東の越」それぞれの細別地域内においても特徴的な細別器種は存在する。

鍔付き結合器台：青木・田嶋両氏が指摘した甕以外の器種はどうであろうか。従来、その系統について一定の解釈がなされていなかった仮称「鍔付き結合器台」（第16図上段）について、越後で成立した可能性を指摘した〔滝沢2005b〕。関東から越後を主体に認められるタイプで、越中・能登では分布が希薄であるため「東の越」の土器とは呼べないものの、越後で色濃く分布しているのは事実である。熊野氏が早くに指摘〔熊野1979〕しているように、大和・纏向遺跡東田地区南溝上層〔石野・関川1976〕から出土している。また、山城・水垂遺跡SD128〔財京都市埋蔵文化財研究所1998〕出土品も、鍔付き結合器台の可能性がある。口縁部を欠くため明確でないが、近江・斗西遺跡〔能登川町教委1993〕も鍔付き結合器台としてよければ、出土量はごくわずかであるが、（仮）越後系土器が畿内およびその周辺部に流入していたことになる。他地域の土器が顕著に認められる遺跡においては、鍔付き結合器台が確認されている。

この土器の系統について畿内側での評価は、纏向遺跡例は系統不明〔関川1976〕・関東系〔寺沢1984〕、水垂遺跡例は北陸南西部の「二ツ屋タイプの装飾器台」〔市村2004〕とする見解が提示されている。畿内及びその周辺部への流入時期については、確実に本稿の5期のものは確認できず、6期の可能性を残すが、7期を中心とした時期を想定したい。これは、タタキ甕が多量に流入した下割遺跡SX1317の時期と一致する。

このような土器が近江・山城で点在すること、千種甕が畿内外縁部を中心に分布する可能性があることから、越後内でのタタキ甕は畿内外縁部から流入した可能性が高い。直接もたらされたものか、北陸南西部や東の越でも能登・越中を経由したものかは判然としないが、一つの可能性として提示したい^{註9)}。

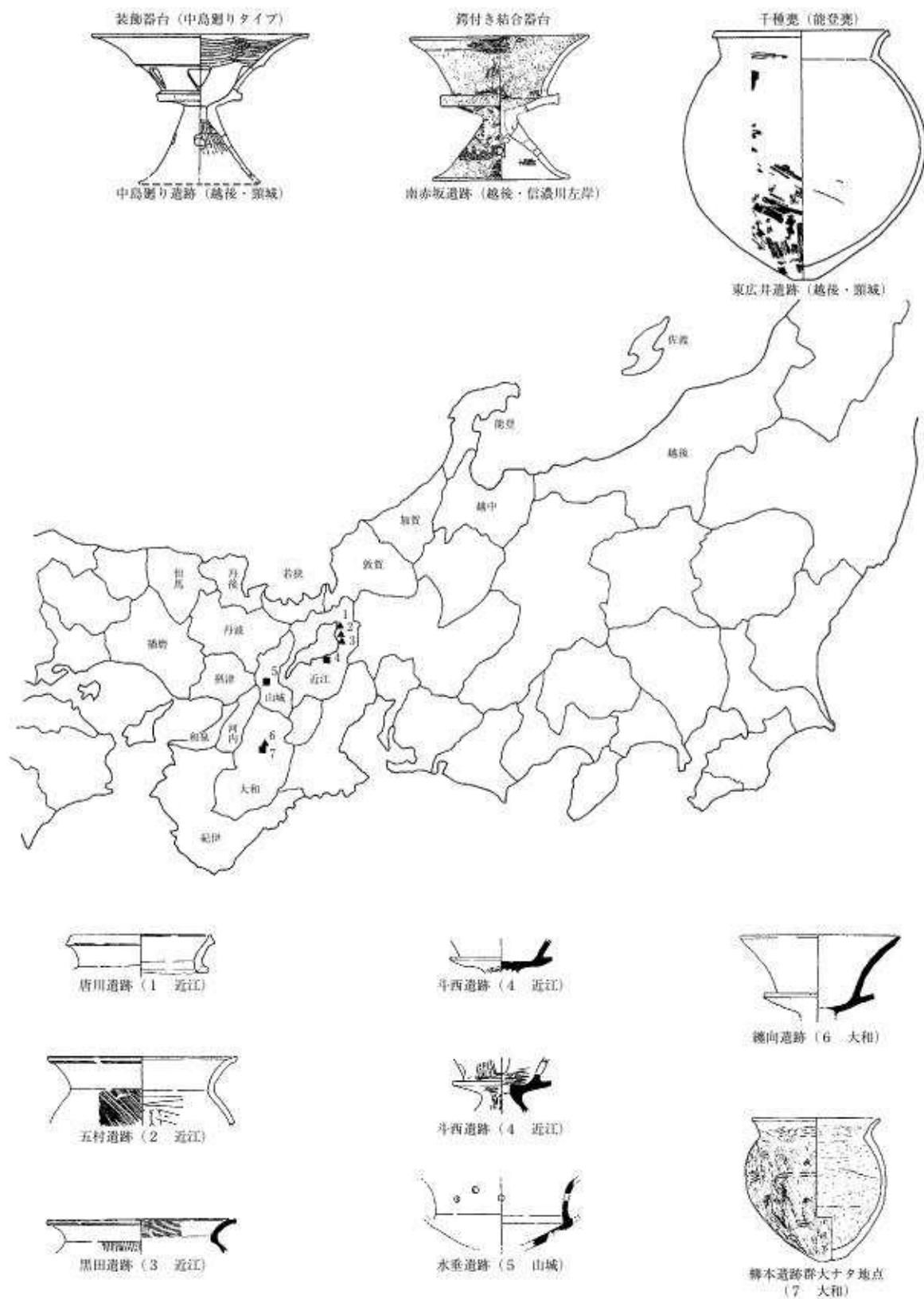
畿内外縁部の丹後との関連：田嶋氏らにより早くから「東の越」との関連が説かれている丹後の状況はどうであろうか。越後におけるタタキ甕流入や、少ないながらも確認されている畿内外縁部での東の越系土器の流入において、一定の役割を果たしたことが予想される。

本稿の5～7期ほどに併行関係があると思われる浅後谷南遺跡の調査〔石崎ほか2001〕により、く字口縁甕が多量に使用されていることが明らかになりつつある。本稿の5期前後に増加しており、北陸系との解釈がなされている〔高野2006〕。北陸系とされたく字甕は胴部内面ヘラ削り調整が多い。この点は、千種甕と様相が異なる。また、浅後谷南3式とされる浅後谷南遺跡SK2003出土資料は、胴部外面上位に横ハケが顕著に認められる。実見していないため明言できないが、口縁部の諸特徴などにおいて千種甕との様相差が認められる。ちなみに胴部外面上位に横ハケ、胴部内面ヘラケズリの調整は、東の越でも佐渡での海岸部遺跡に多い。現状では、丹後と東の越の千種甕との関連を明確にしえないが、浅後谷南遺跡のく字甕の評価は、北近畿と「東の越」の評価を更に前進させる可能性があるとして注目される。

C 千種甕と弥生形タタキ甕

本稿で対象とする時期において、在来系の甕は「千種甕」に代表されるく字口縁・端部面取り甕である。このことについては、以前に分類を試み、その変遷案を提示した。大局的には、口縁つまみ上げ（I類）⇒面取り（II類）⇒端部丸（III類）と変遷するが、3者は5・6期には共存する。III類は2期には存在し、県内でタタキ甕が盛行する5～7期においても確実に存在する。III類を千種甕に比定するか否かは判断を保留したが、突然に増加する様子は外来的要素によるものと思われる。

今ここで、口縁部III類の全てを外来系の影響とは言えないまでも、面取りしないIII類が5期以降に増加



*() 内の番号は上図の番号と対応

第16図 畿内及び周辺地域における「東の越」系土器

すること、この時期に口縁部Ⅲ類を基本とするタタキ甕が一定量認められることから、外来系の要素を基に口縁部Ⅲ類が増加した可能性もある。

(2) 布留式系甕

布留式系甕の動向はどうであろうか。畿内中枢部からの拡散とする考え方以外に、加賀産の甕が波及するとの見解がある〔奥田1993ほか〕。今回、集成した資料の中で、胎土の特徴から加賀産とされる「流紋岩質岩起源の砂礫」が多い個体に第8図16などがあり、その可能性は想定できよう。ただし、混和材以外にもいわゆる粘土の分析も重要である。産地同定については慎重にならざるを得ないが、他器種において畿内系が定着するのは9期であり、ここが大きな画期となる点は重視したい。ただし、これらは、いわゆる「受容土器」であり、畿内中枢部の直接的な動きとは評価できないであろう。

A タタキ甕・布留式系甕の局地的分布

タタキ甕は頸城の下割遺跡、信濃川右岸の横山遺跡、布留式系甕は頸城の津倉田遺跡・下割遺跡やいわゆる頸南地域で局地的な分布を見せる。当該期の土器交流が盛んな信濃川左岸の緒立遺跡では少ない点が特徴的である。両タイプ共に頸城に集中するのは興味深いが、本稿の5～10期までの土器が確認できる津倉田遺跡で布留系甕が多量に検出されているものの、タタキ甕はわずかに1点のみである。一方、津倉田遺跡から約3.5km南東に位置する下割遺跡では布留式系甕が6点と越後の中では多く、タタキ甕が20点と他遺跡を凌駕する^{註8)}。質的な違いはあるにせよ、頸城平野でも飯田川流域の両遺跡で局地的な分布を示す。また、頸南地域もこの傾向は強い。旧妙高村大洞原遺跡（タタキ甕2）・小野沢西遺跡（タタキ甕2、布留式系甕4）、旧中郷村横引遺跡（布留式系甕3）・籠峰遺跡（布留式系甕1）など、明確な遺構が確認できないにもかかわらず、一定量の出土が確認できる。弥生時代後期の巨大な高地性環濠集落である斐太遺跡群の信濃側に位置する地域において、小規模遺跡に点々と畿内系甕が出土する状況は特異である。このことについて、飯田川流域の下割遺跡・津倉田遺跡の状況から、信濃地域への搬入路としてきわめて重要な意義を持つものと考える。

頸城地域における両タイプの顕在化は特異であるものの、下割遺跡と津倉田遺跡での出土量の差は、両タイプが異なる原理で波及している可能性を示唆する。また、一方で、信濃川右岸の横山遺跡の状況や、少ないながらも魚沼地域で顕在化する布留式系甕の動向は、一重に海岸ルートのみならず、山間ルートの存在の大きさも伺える。特に、横山遺跡は様々な系統の土器が確認される5期まで残存した環濠集落である。その土器様相から閉鎖性は感じられない。また、魚沼地域における布留式系甕の分布は、いずれも魚野川流域に位置する。越後が海岸ルートから内陸ルートへの変換以前に重要拠点となったことと考える。

6 おわりに

本稿では県内の出土例集成を目的として、雑感してきた。川村氏が県内の布留式系甕を報告・検討してから約20年で状況は大きく変化した。当初はその存在すら疑われたと聞く布留式系甕は、現在、旧上越市内の調査で、比較的広い面積の発掘調査が行われれば、「出て当たり前」になりつつある。「東の越」に属する越後は、布留式系甕は原則として波及しない〔田嶋2004〕とされているが、頸城でも旧上越市周辺では局地的な分布が認められ、むしろ能登よりも波及しているようである。

タタキ甕は以前、局地的な出土傾向を示すが、その分布は県北部の阿賀北地域にも及んでいる。いずれのタイプも、第13・14図のように、全国的な分布図から除外されることが多い越後・佐渡ではあるが、数量は確実に増加している。分布の北限地域の一つとして、集成・意義付けを行うことが重要と考えている。

今回、両タイプの集成を通じて確認できた事柄は以下のとおりである。

タタキ甕

- ・局地的な分布が認められ、頸城・下割遺跡では20例、信濃川右岸・横山遺跡で7例確認されており、両地域で県内出土の約70%を占める。また、下割遺跡SX1317では特に出土量が多く、出土土器のはとんどがタタキ甕である。
- ・確認されたタタキ甕は、弥生形のものが圧倒的に多く、庄内形甕は庄内2式頃の大和形甕が1点確認されたのみである。弥生形が主体となるのは、東日本各地に分布するタタキ甕と共通する。
- ・若干、遅る時期のものが存在する可能性はあるが、形態や共伴土器から本稿の5期以降のものが多く、畿内の編年では庄内式の前半段階から顕著に認められ、以降、本稿の8～9期頃まで確認できる。
- ・在地の土器とは異なる胎土を有することから、搬入の可能性があるものが一定量含まれる。ただし、搬入元は明らかではない。庄内形甕は1点のみで、その他は弥生形タタキ甕である。これまでの指摘どおり、畿内中枢部（大和・河内）ではなく畿内外縁からもたらされたものと考える。形態から阿賀北・土居下遺跡例は丹波・近江、信濃川右岸・横山遺跡例のうち口縁端部の刻み目から、紀伊ないしは揖津・丹波地域との関連を想定したい。それ以外のものも、日本海経由と考える。
- ・タタキ甕が出土する時期、畿内では外縁部を中心に越系土器が若干確認できるが、東の越（北陸北東部）系土器は少ない。ただし、東の越でもその分布が越後にわたる鈎付き結合器台は、畿内でも若干確認できる。このことから、タタキ甕は畿内からの一方的な搬入ではなく、交流の結果と考える。

布留式系甕

- ・局地的な分布が認められ、頸城・津倉田遺跡で14例、同じく頸城の下割遺跡で5例確認されており、両地域で県内出土の約40%を占める。
- ・確認された布留式系甕は、いわゆる布留式傾向甕が3点あるが、分布の中心の頸城での確認例ではなく、信濃川左岸と魚沼地域での確認例である。これ以外の個体は布留1～3式（主体は2・3式）のものが多く、布留式系後半期の4・5式の確認例は極端に少ない。
- ・在地の土器とは異なる胎土を有することから、搬入の可能性があるものが一定量含まれる。ただし、搬入元は明らかではない。

今回の集成から想定できることを書き綴ったが、残された課題も多い。胎土による産地同定が最も大きいであろう。研究史を十分に反映できなかった。大きな課題の一つとしたい。

本稿を作成するにあたり、石野博信氏からは新潟県埋蔵文化財センター所蔵品のタタキ甕について、ご指導いただいた。田嶋明人氏・赤澤徳明氏からは北陸全般の状況について、ご教示いただいた。また、以下の各氏には資料の実見・分析方法等でご配慮・ご教示いただいた。文末ではありますが、記して感謝いたします（五十音順 敬称略）。相田泰臣・伊藤秀和・大野英子・小熊博史・笹沢正史・広井 造・三ツ井朋子・山崎忠良・吉川俊久・米川仁一・渡邊ますみ

註

- 1) 今回の集成にあたり、既に報告書が刊行されたものを対象として、第2・3図と第8・9図に掲載した。ただし、第2図19と第8図7については再実測した図を掲載した。
- 2) 当該期における県内の甕は「底部輪台法」[都出1974]で製作されていることから [滝沢1992]、タタキ

成形後にハケ調整でタタキ痕を消している可能性もある。ただし、これまで本稿で抽出した土器以外にタタキ痕が残存するものを確認していない。また、タタキ痕が残存しないものでも、形態が畿内の庄内形窯に類似するものの指摘があるが（旧西山町高塙B遺跡222）[金子・坂井1983]、本稿では対象から除外している。

- 3) タタキ痕は器面の凸面条数をカウントした。
- 4) 註1のとおり、報告書が刊行されたものを第8・9図に掲載した。新潟市石動遺跡・三条市吉津川遺跡出土資料については、[新潟県考古学会2005] 第2分冊に掲載された図から判断し、第3表の集成表に加えている。
- 5) タタキ窯の口縁端部に認められる刻み目については、大和・纏向遺跡でも確認されており、報告書で紀伊地方に多いと指摘されている〔石野・関川1976〕。紀伊地方において口縁端部に刻み目が施された窯は、庄内式併行期の前半では全体の1~3割に及び〔渋谷1985〕、前田氏の庄内併行期第2段階では減少するという。

一方で、森岡秀人氏は「口縁部外面の粗雑な板ナデ、縦ハケ調整、口縁端部の縦方向の叩き調整」のものが淡路南部において高い頻度で認められるとし、「淡路型窯」を提唱する〔森岡1999〕。最大の特徴として「口縁の端部を叩いて面形成を行っており」「叩いたために生じる粗放な口縁部の波打ちを伴ったものが多い」という。

横山遺跡例は端部に明確な面を有していないことから、淡路型窯とはやや異なるが、現状ではその類似性を指摘しておきたい。

- 6) 一応の目安として第1表を作成した。ただし、本稿の時期区分（3~11期）と、畿内の編年を直接対比することは困難である。問題は多いものの、現状では加賀の漆町編年を介して畿内との対比したい。畿内の編年対応関係については〔財大阪府文化財センター2006 (pp.550~551)〕から引用した。漆町編年と畿内の編年との対応関係については、畿内の研究者の発言から作成した。

漆町編年と畿内の併行関係について若干補足すると、関川氏は漆7群が纏向3式後半、漆8群が纏向4式とするが、漆7群中に纏向4式のものが、漆8群に纏向3式後半のものが含まれるという〔関川1994p.97〕。また、寺沢氏は布留0式が漆町6・7群に相当する一方で、7群の基準資料とした「漆町遺跡溝上層資料はむしろ8群に近い様相」とする。また、「漆5群を布留0式併行とみるか庄内3式併行とするかはにわかに決定しかねる」「漆4群は庄内2~3 (?) 式に併行するとしたい」と指摘する〔寺沢1987p.18〕。寺沢氏の指摘については、田嶋氏の見解が近年提示された〔田嶋2006〕。

- 7) 土居下遺跡出土例（第2図1）のような口縁部形態の土器は、本稿の5期以降、胎内市（旧中城町）西川内南遺跡（報告No.254など）をはじめ、阿賀北地域で散見できる。
- 8) 下割遺跡SX1317のように、個別造構の出土土器で弥生形タタキ窯がまとまる遺跡は北陸内でもわずかにあり、加賀・永町ガマノマカリ遺跡25号土坑〔田嶋1987〕や、越中・鍛治町遺跡SI745〔大野ほか2003〕などがある。前者は田嶋氏により漆町7群、後者は大野英子氏により婦負Ⅲ期（漆町5・6群併行）とされている。下割遺跡SX1317は本稿の7期（漆町7群併行）であり、3遺跡は近接した時期の可能性が高い。ただし、下割遺跡SX1317の出土量は永町ガマノマカリ25号土坑・鍛治町遺跡SI745における弥生形タタキ窯の出土量を凌駕している。
- 9) 弥生形タタキ窯の越後への流入が、畿内外縁部からダイレクトか否かは結論を保留するが、東の越でも越後で圧倒的出土量が多い錫付き結合器台が畿内外縁部に存在すること、下割遺跡SX1317の出土量が西の越を含めても圧倒的に多いことから、能登・越中などを介していない可能性が高いと考えている。

引用・参考文献

- 青木勘時 1992「大和における庄内併行期の窯の様相」「庄内土器研究」Ⅲ pp.76~83
 青木勘時 2004「大和東南部地域出土越系土器の新例」「邪馬台国時代の越と大和」 pp.203~207 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
 赤塚次郎 1999「三世紀への加重—古墳時代初頭の様式変動と共鳴—」「考古学フォーラム」11 pp.44~57
 石崎喜久ほか 2000「(1)浅後谷南遺跡」「京都府遺跡調査概報」第93冊 pp. 3~181 京都府埋蔵文化財センター
 石野博信 2001「三世紀の列島間交流」「邪馬台国の考古学」 pp.131~184 吉川弘文館
 石野博信・関川尚功 1976「纏向」 奈良県立橿原考古学研究所・桜井市教育委員会
 伊藤秀和 2003「加茂市における古墳時代の遺跡について—宮之浦古墳・福島古墳群周辺の歴史的環境を

- 考る一」「加茂郷土誌」第25号 pp. 3~25 加茂郷土調査研究会
- 市村慎太郎 2003「畿内および一部周辺地域における北陸系土器」「庄内土器研究」XXVII pp.31~110 庄内土器研究会
- 市村慎太郎 2004「畿内の越系土器」「邪馬台国時代の越と大和」 pp.125~166 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 大野英子 2003「婦負における古墳出現期の土器の変遷」「鍛冶町遺跡発掘調査報告」 pp.56~67 富山県婦中町教育委員会
- 大野英子・堀内大介・細辻嘉門 2003「鍛冶町遺跡発掘調査報告」富山県婦中町教育委員会
- 奥田 尚 1993「布留系窯の砂礫について」「庄内式土器研究」IV pp.44~66
- 金子拓男・坂井秀弥 1983「高塙B遺跡」西山町教育委員会
- 川村浩司 1988「新潟県籠峰遺跡出土の外来系土師器3例」「新潟考古学談話会」第1号 pp.50~60 新潟考古学談話会
- 川村浩司 1993a「古墳出現期における北陸北東部の土器組成」「環日本海地域比較史研究」2 pp.15~36
- 川村浩司 1993b「北陸北東部の古墳出現期の様相」「東日本における古墳出現過程の再検討」 pp. 7~16 日本考古学協会新潟大会実行委員会
- 川村浩司 1994「関東南部における北陸系土器の様相について」「庄内土器研究」VI pp.113~142
- 川村浩司 1996「越の土器と古墳の展開」「越と古代の北陸」 pp.21~56 名著出版
- 川村浩司 1999「庄内並行期における上野出土の北陸系土器」「庄内土器研究」XIX pp. 1~30
- 川村浩司 2000「上越市の古墳時代の土器様相—関川右岸流域を中心に—」「上越市史研究」第5号 pp.95~114 上越市
- 小池香津江 1994「古墳出現期・大和の地域構造に関する予察」「文化財論集」 pp.253~264
- 小林正史 2001「弥生土器のタタキ技法—タタキによる原型の変形度を中心に—」「北陸古代土器研究」第9号 北陸古代土器研究会
- 財大阪府埋蔵文化財センター 2003「古墳出現期の土師器と実年代」
- 財大阪府埋蔵文化財センター 2006「古式土師器の年代学」
- 財京都市埋蔵文化財研究所 1998「水垂遺跡長岡左京六・七条三坊」
- 渋谷高秀 1985「出土遺物の考察 弥生時代後期末～古墳時代前期」「野田・藤並地区遺跡発掘調査報告書」 pp.161~170 和歌山県教育委員会
- 関川尚功 1976「纏向遺跡の古式土師器」「畿内地方の古式土師器」「纏向」 pp.433~500 桜井市教育委員会
- 関川尚功 1988「弥生土器から土師器へ」「季刊考古学」第24号 pp.18~23 雄山閣
- 関川尚功 1994「加賀と大和の土器編年について」「庄内土器研究」V pp.95~100
- 高野陽子 2006「丹後地域—擬凹線文系土器の様式と変遷」「古式土師器の年代学」 pp.225~242 財大阪府文化財センター
- 滝沢規朗 2005a「新潟県における古墳出現前後に盛行する装飾器台・結合器台について」「新潟考古」第15号 pp.77~96 新潟県考古学会
- 滝沢規朗 2005b「越後・佐渡における弥生時代後期～古墳時代前期の「く」字窯について」「三面川流域の考古学」第4号 pp.65~106 奥三面を考える会
- 田嶋明人 1986「漆町遺跡出土土器の編年的考察」「漆町遺跡」I pp.101~186 石川県立埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 1987「永町ガマノマガリ遺跡」石川県埋蔵文化財センター
- 田嶋明人 2003「大型建物群造営期の土器様相」「石川県万行遺跡発掘調査概報」 pp.31~36 七尾市教育委員会
- 田嶋明人 2004「3世紀の越系土器の移動」「邪馬台国時代の越と大和」 pp.63~74 香芝市教育委員会・香芝市二上山博物館
- 田嶋明人 2006「「白江式」再考」「陶磁器の社会史」 pp.269~292 吉岡康暢先生古希記念論集刊行会
- 都出比呂志 1974「古墳出現前夜の集団関係」「考古学研究」20~4 pp.20~46 考古学研究会
- 寺沢 薫 1984「纏向遺跡と初期ヤマト政権」「櫛原考古学研究所論集」第6 pp.35~72 櫛原考古学研究所
- 寺沢 薫 1986「畿内古式土師器の編年と二・三の問題」「矢部遺跡」 pp.327~397 奈良県立櫛原考古学研究所
- 寺沢 薫 1987「布留O式土器拡散論」「考古学と地域文化」 pp.179~200 同志社大学
- 寺沢 薫 2002「布留O式土器の新・古相と二、三の問題」「著墓古墳周辺の調査」 pp.137~140 奈良県立

樺原考古学研究所

- 新潟県考古学会 2005「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」
西川修一 1991「関東のタタキ甕」「神奈川考古」第27号 pp.107~133 神奈川考古同人会
能登川町教育委員会 1993「斗西遺跡（3次調査）」
前田敬彦 2006「紀伊地域」「古式土師器の年代学」pp.177~192 財團法人大阪府文化財センター
森岡秀人 1999「揖津における土器交流地点の性格—真正弥生時代と庄内式期を比べて—」「庄内土器研究」
XXI pp.63~154
米田敏幸 1981「古墳時代前期の土器について」「八尾南」 pp.180~190 八尾市教育委員会
米田敏幸 1985「中河内の庄内式と搬入土器」「考古学論集」 pp.85~105 考古学を学ぶ会
米田敏幸 1986「書評 矢部遺跡」「古代学研究」112号 pp.36~38
米田敏幸 1990「中南河内の「布留系」土器群について」「考古学論集」第3集 pp.113~128 考古学を学ぶ会
米田敏幸 1991「近畿」「古墳時代の研究」6 pp.19~33 雄山閣
米田敏幸 1992「庄内播磨型甕の提唱」「庄内土器研究」Ⅲ pp. 1~5
米田敏幸 1997「庄内土器研究の課題と展望」「庄内土器研究」XIV pp. 1~48
米田敏幸 1999「邪馬台国河内説の検証～河内からみた纏向遺跡」「庄内土器研究」XIX pp.43~61庄内土器
研究会

（新潟県内のタタキ甕・布留式系甕出土遺跡の図の出典）

（阿賀北）

- 関 雅之 1999「葛塚遺跡」 豊栄市教育委員会
細井佳浩・郷 実ほか 2006「土居下遺跡」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
(信濃川左岸)

（信濃川右岸）

- 駒形敏朗ほか 1987「横山遺跡」 長岡市教育委員会
広井 造・小林隆幸 1992「横山遺跡」「長岡市史」資料編1 考古 pp.490~520 長岡市
伊藤秀和・平岡和夫ほか 2000「丸潟遺跡・新通遺跡」 加茂市教育委員会
朝岡政康・諫山えりかほか 2003「東門遺跡」 新潟市教育委員会
朝岡政康 2005「石動遺跡」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」第2分冊 pp.220~226 新潟
県考古学会
田村浩司 2005「吉津川遺跡」「新潟県における高地性集落の解体と古墳の出現」第2分冊 pp.268~273 新
潟県考古学会

（魚 沼）

- 安立 晴 2001「来清東遺跡発掘調査報告書」 塙沢町教育委員会

（頸 城）

- 甘粕 健・小野 昭ほか 1988「丸山遺跡発掘調査報告書」 大潟町教育委員会
鈴木俊成・春日真実ほか 1994「一之口遺跡東地区」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由里子・小池義人ほか 1996「横引遺跡・籠峰遺跡・柳平遺跡」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化
財調査事業団
三ツ井朋子ほか 1997「大洞原遺跡」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
塙沢正史・小島幸雄 1999「津倉田遺跡」 上越市教育委員会
北村 亮・川村浩司ほか 2000「籠峰遺跡発掘調査報告書Ⅱ（遺物編）」 中郷村教育委員会
吉川俊久・長澤展生 2003「東広井遺跡発掘調査報告書」 三和村教育委員会
山崎忠良・郷 実 2004「下割遺跡Ⅱ」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
土橋由里子 2004「小野沢西遺跡」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団
尾崎高宏 2005「下馬場遺跡・細田遺跡」 新潟県教育委員会・財新潟県埋蔵文化財調査事業団

第2表 タタキ甕・壺出土一覧

遺跡No. (第1 回と 対応)	遺跡名	遺物 No. (第2- 3回と 対応)	所 在 地	地域 区分	報告書 No.	出土状況	器種	分類	口縁部 分類		タタキ 部分類	口縁部 作り
									大別	細別		
1	土居下遺跡	1	胎内市(旧中城町)塙津字土居下	阿賀北	99	包含層	甕	弥生形	受口		1類	
2	葛塚遺跡	2	新潟市(旧豊栄町)大字葛塚	阿賀北	3	包含層	甕	弥生形				
2	葛塚遺跡	3	新潟市(旧豊栄町)大字葛塚	阿賀北	4	包含層	甕	弥生形				
2	葛塚遺跡	4	新潟市(旧豊栄町)大字葛塚	阿賀北	5	包含層	甕	弥生形				
5	緒立C遺跡	6	新潟市(旧黒崎町)	信左	352	暗渠部分	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
6	南赤坂遺跡	5	新潟市(旧卷町)	信左	92	テラス遺構	壺		く字		4類	
11	横山遺跡	7	長岡市桂町字横山	信右	61	環濠	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
11	横山遺跡	8	長岡市桂町字横山	信右	62	環濠	甕	弥生形	く字	Ⅲ類	4類	
11	横山遺跡	9	長岡市桂町字横山	信右	71	環濠	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
11	横山遺跡	10	長岡市桂町字横山	信右	73	環濠	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
11	横山遺跡	11	長岡市桂町字横山	信右	140	表様など	甕	弥生形				
11	横山遺跡	12	長岡市桂町字横山	信右	141	表様など	甕	弥生形				
11	横山遺跡	13	長岡市桂町字横山	信右	143	表様など	甕	弥生形				
11	横山遺跡	14	長岡市桂町字横山	信右	28	1号住	甕	弥生形				
14	丸山遺跡	15	上越市(旧大潟町)大潟区大字丸山	頸城	64	包含層	甕	弥生形				
16	津倉田遺跡	16	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1117	SK24	甕	弥生形				
18	一之口遺跡	17	上越市大字木田字一之口	頸城	1259	SK3992	甕	弥生形	有段		2類	
23	大洞原C遺跡	18	妙高市(旧妙高村)大字坂口新田字山谷	頸城	48	包含層	甕	弥生形	く字	Ⅱ類		
23	大洞原C遺跡	19	妙高市(旧妙高村)大字坂口新田字山谷	頸城	47	包含層	甕	庄内大和甕	く字			
22	小野沢西遺跡	20	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	194a	SD2	甕	弥生形				
22	小野沢西遺跡	21	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	194b	SD2	甕	弥生形				
22	小野沢西遺跡	22	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	245	SD3a	甕	弥生形				
17	下削遺跡	23	上越市大字下岡字下削	頸城	53	SX75	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
17	下削遺跡	24	上越市大字下岡字下削	頸城	54	SX75	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
17	下削遺跡	25	上越市大字下岡字下削	頸城	95	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類	叩出し	
17	下削遺跡	26	上越市大字下岡字下削	頸城	96	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類	積上げ	
17	下削遺跡	27	上越市大字下岡字下削	頸城	97	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類	叩出し	
17	下削遺跡	28	上越市大字下岡字下削	頸城	98	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類	積上げ	
17	下削遺跡	29	上越市大字下岡字下削	頸城	99	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類	積上げ	
17	下削遺跡	30	上越市大字下岡字下削	頸城	100	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
17	下削遺跡	31	上越市大字下岡字下削	頸城	101	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
17	下削遺跡	32	上越市大字下岡字下削	頸城	102	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
17	下削遺跡	33	上越市大字下岡字下削	頸城	103	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類	叩出し	
17	下削遺跡	34	上越市大字下岡字下削	頸城	104	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類	積上げ	
17	下削遺跡	35	上越市大字下岡字下削	頸城	106	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
17	下削遺跡	36	上越市大字下岡字下削	頸城	105	SX1317	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
17	下削遺跡	37	上越市大字下岡字下削	頸城	107	SX1317	甕	弥生形				
17	下削遺跡	38	上越市大字下岡字下削	頸城	115	SX1318	甕	弥生形	く字	Ⅲ類		
17	下削遺跡	39	上越市大字下岡字下削	頸城	116	SX1318	壺				積上げ	
17	下削遺跡	40	上越市大字下岡字下削	頸城	140	旧河川	甕	弥生形	く字	Ⅱ類		
17	下削遺跡	41	上越市大字下岡字下削	頸城	139	旧河川	甕	弥生形	く字	Ⅱ類		
17	下削遺跡	42	上越市大字下岡字下削	頸城	141	旧河川	甕	弥生形	く字	Ⅱ類	積上げ	
17	下削遺跡	43	上越市大字下岡字下削	頸城	142	旧河川	甕	弥生形	く字			

*「地域区分」の信左は信濃川左岸、信右は信濃川右岸

第3表 新潟県における布留式系堀一覧

遺跡 No. (第1 図と 対応)	遺跡名	遺物 No. (第8- 9図と 対応)	所 在 地	地域区分	報告書 No.	出土状況	分 類			胴部 外面 調整
							口縁 端部	口縁 端部 の肥厚	口縁部 形態	
5	猪立C遺跡	1	新潟市(旧黒崎町) 黒島はか	信濃川左岸	413	包含層	b類	Ⅲ類	1類	I類
7	福塚塚古墳	2	西蒲原郡弥彦村大字山岸	信濃川左岸	15	墳丘上	d類?	II類?	?	
8	奈良崎遺跡	3	長岡市(旧和島村)大字島崎	信濃川左岸	50	包含層	a類	I類	2類	II類
8	奈良崎遺跡	4	長岡市(旧和島村)大字島崎	信濃川左岸	51	包含層	a類	I類	2類	II類
4	東園遺跡	5	新潟市若葉谷字東園	信濃川右岸	142	包含層	d類	II類	2類	II類
9	丸潟遺跡	6	加茂市大字加茂字五反田	信濃川右岸	5	1号土坑	c類	II類	1類	II類
14	金屋遺跡	7	南魚沼市(旧六日町)余川字金屋道上	魚沼	52	SI31	a類	II類	1類	II類
13	来清東遺跡	8	南魚沼市(旧坂沢町)大字坂沢字来清	魚沼	70	包含層	c類	II類	2類	
15	東広井遺跡	9	上越市(旧三和村)三和区大字広井字東広井	頸城	281	包含層	b類	II類	2類	
19	綿田遺跡	10	上越市大字黒田字綿田	頸城	93	包含層	b類	Ⅲ類	2類	
19	綿田遺跡	11	上越市大字黒田字綿田	頸城	94	包含層	b類	Ⅲ類	2類	
19	綿田遺跡	12	上越市大字黒田字綿田	頸城	95	包含層	b類	Ⅲ類	1類	
17	下削遺跡II	13	上越市大字下岡字下削	頸城	55	SX80	d類	Ⅲ類	2類	II類
17	下削遺跡II	14	上越市大字下岡字下削	頸城	133	旧河川	b類	II類	2類	
17	下削遺跡II	15	上越市大字下岡字下削	頸城	134	旧河川	b類	Ⅲ類	2類	
17	下削遺跡II	16	上越市大字下岡字下削	頸城	135	旧河川	d類	Ⅲ類	2類	II類
17	下削遺跡II	17	上越市大字下岡字下削	頸城	137	旧河川	b類	I類	1類	II類
17	下削遺跡II	18	上越市大字下岡字下削	頸城	138	旧河川	a類	Ⅲ類	2類	II類
18	一之口遺跡	19	上越市大字木田字一之口	頸城	920	SI233	d類	II類	1類	
18	一之口遺跡	20	上越市大字木田字一之口	頸城	1443	SK288	c類	Ⅲ類	1類	
18	一之口遺跡	21	上越市大字木田字一之口	頸城	1444	SK288	c類	Ⅲ類	1類	
18	一之口遺跡	22	上越市大字木田字一之口	頸城	1445	SK288	c類	II類	1類	
16	津倉田遺跡	23	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	778	SD66	c類	II類	2類	
16	津倉田遺跡	24	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	791	SX157	c類	I類	2類	II類
16	津倉田遺跡	25	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1121	SK24	c類	Ⅲ類	2類	II類
16	津倉田遺跡	26	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1122	SK24	b類	II類	2類	II類
16	津倉田遺跡	27	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1248	SK115-	c類	I類	2類	
16	津倉田遺跡	28	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1267	SK267	c類	II類	2類	
16	津倉田遺跡	29	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1292	SK287	b類	Ⅲ類	2類	
16	津倉田遺跡	30	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1293	SK287	d類	II類	1類	
16	津倉田遺跡	31	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1294	SK287	c類	Ⅲ類	2類	
16	津倉田遺跡	32	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1622	SI105	c類	I類	2類	
16	津倉田遺跡	33	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1659	SK175	b類	II類	2類	
16	津倉田遺跡	34	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1747	SX401	c類	II類	2類	
16	津倉田遺跡	35	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1759	SX415	c類	II類	2類	
16	津倉田遺跡	36	上越市大字中真砂字津倉田	頸城	1790	SB346	d類	II類	2類	
21	籠峰遺跡	37	上越市(旧中郷村)中郷区大字籠荷山字籠峰	頸城	29	包含層	d類	Ⅲ類	2類	I類
20	横引遺跡	38	上越市(旧中郷村)中郷区大字市屋字横引	頸城	58	包含層	c類	Ⅲ類	2類	
20	横引遺跡	39	上越市(旧中郷村)中郷区大字市屋字横引	頸城	59	包含層	c類	II類	?	
20	横引遺跡	40	上越市(旧中郷村)中郷区大字市屋字横引	頸城	60	包含層	b類	II類	2類	
22	小野沢西遺跡	41	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	37	SD1a	a類	I類	2類	
22	小野沢西遺跡	42	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	52	SD1a	c類	II類	2類	
22	小野沢西遺跡	43	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	53	SD1a	d類	II類	?	
22	小野沢西遺跡	44	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	354	包含層	c類	II類	?	
22	小野沢西遺跡	45	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	355	包含層	c類	II類	2類	
22	小野沢西遺跡	46	妙高市(旧妙高村)大字閑山字小野沢西	頸城	356	包含層	c類	II類	1類	
3	石動遺跡		新潟市本所字居浦	信濃川左岸	81	包含層				
10	吉津川遺跡		三条市大字下保内字割前	信濃川右岸	62	SX347				
10	吉津川遺跡		三条市大字下保内字割前	信濃川右岸	63	SX347				
10	吉津川遺跡		三条市大字下保内字割前	信濃川右岸	69	SX347				

研究紀要

第5号

平成19年3月16日 印刷
平成19年3月23日 発行

編集・発行 財団法人 新潟県埋蔵文化財調査事業団
〒950-0845 新潟市大字金津93番地1
電話 0250(25)3981
FAX 0250(25)3986
印刷・製本 株式会社第一印刷所
〒950-8724 新潟市和合町2丁目4番18号
電話 025(285)7161